

## 「学校インターンシップ」実施報告（平成 17～18 年度）

新潟大学大学院教育学研究科学校インターンシップ委員会編  
森田龍義、鈴木 恵、岡野 勉、山崎 健、中村文隆、柴山 直、横山知行

平成 17 年度より、大学院教育学研究科のカリキュラム改革の一環として、「学校インターンシップ」を実施している。実施要綱を次に示す。

### 「学校インターンシップ」実施要綱

#### 1. 授業科目の名称、単位数、その他

- (1) 授業科目：教育実践総合研究
- (2) 講義題目：学校インターンシップ
- (3) 開講時期、単位数：通年、2 単位
- (4) カリキュラム上の位置付け：研究科共通科目
- (5) 担 当：大学院教育学研究科学校インターンシップ委員会

#### 2. 対象・条件

教育学研究科の修士課程 1 年次生の希望者で、次の条件をすべて満たす者。

- (1) 教育実践に関する研究テーマを、ある程度明確な形で持っていること。
- (2) 教員免許状取得者であること。
- (3) 指導教官の許可が得られていること。

#### 3. 目的・内容

- (1) 附属幼稚園、小学校、中学校、養護学校における教育・学習活動の実際を経験する。
- (2) 研究テーマにもとづき、教育実践に関する認識を深める。
- (3) 高度な専門的能力と識見を備えた教師に向けた、今後の自己形成の課題を発見する。

#### 4. 単位認定の要件・手続き

- (1) 学校インターンシップの活動を、総計 60 時間以上、実施していること。
- (2) 上記の活動について、「活動記録・反省カード」（活動回数分）、「レポート（中間レポートおよび最終レポート）」（年 2～3 回程度）を、一定の内容と水準を備えた形で、作成・提出していること。
- (3) 「中間報告交流会」（9 月頃）、「最終報告会」（年度末）に出席し、報告、発言を行うこと。
- (4) 上記 3 点による総合的な判断にもとづき、大学および派遣校の指導教員が評価の原案を作成し、担当委員会に提出する。担当委員会は、提出された原案にもとづいて単位認定を行う。

#### 5. 指導教員（大学）

指導教員（大学）は、大学院生および派遣学校との連絡により、活動内容を把握すると同時に、必要な指導を行う。適宜、派遣校の訪問を実施する（例えば、活動開始時、中間、終了時等）。

#### 6. 担当委員会（略）

平成 17 年度においては 7 名の大学院生が 7 校園において、平成 18 年度においては 12 名の大学院生が 7 校園において、それぞれ活動を行った。各年度の実施概要および大学院生による活動報告を掲載する。

## 「学校インターンシップ」実施概要（平成17年度）

No.	氏名	専攻および分野・専修	実施校	指導教員 (大学、実施校)	活動の概要		
					学年・学級、 教科等	内容	期間
1	古川 早紀	学校教育・ 教育心理学	附属幼稚園	大浦容子 山口玲子	音楽	・幼稚園における 発達段階の違い ・幼稚園における 音楽の役割	8月～ 9月
2	金谷 篤	学校教育・ 障害児教育	附属養護 学校	長澤正樹 牧野 統	小・中・高等 部	・小・中・高等部 での学習の様子 を学ぶ。 ・特別支援教室の 活動を学ぶ。	10月～ 12月
3	岩船 尚貴	教科教育・ 国語教育	附属新潟 中学校	堀 竜一 佐藤佐敏	第1～3学年 国語	・モジュールスケ ジュール期間 における生徒 の学習支援 ・教材準備の手伝 い等	12月 (集中)
4	長谷川貴久	教科教育・ 数学教育	附属新潟 中学校	山田和美 金山光宏	第3学年 選択数学		6月～ 2月
5	吉村 智宏	教科教育・ 音楽教育	附属長岡 小学校	田中幸治 伊藤純子	音楽	・ピアノによる音 楽づくり	7月～ 3月
6	池上 弓子	教科教育・ 美術教育	附属新潟 小学校	佐藤哲夫 石塚 崇	低学年3組、 第5学年 図画・工作	・図工の授業実践 を行い、研究課 題を発見する。 ・クラス経営、学 級経営について 学ぶ	11月～ 3月
7	丸山 葉子	教科教育・ 美術教育	新潟市立 内野小学 校	佐藤哲夫	さくら学級		
			新潟市立 内野中学 校	佐藤哲夫	選択美術		

註1. 「活動の概要」は、活動開始時点において作成・提出する「『学校インターンシップ』申込書・活動開始報告書」による。従って、実際の活動内容との間に相違が存在する場合がある。

## インターンシップ活動報告

新潟大学大学院 教育学研究科  
学校教育専攻 教育心理学分野  
古川 早紀

### 1. 応募動機・経歴

今回のインターンシップをやるまでの経歴としては、同大学の教育人間科学部・芸術環境創造過程・音楽表現コースにおいて中/高等学校・音楽教員免許を取得した。教職関係の授業は、免許取得のために最低必要な授業しか受講せず、主に音楽科でのピアノ演奏の授業を中心に受けていた。今回幼稚園に行くことになった理由としては、学部において小・中・高等学校に接する機会は得られたが、就学前の幼児と関わることがなかったというのが主な理由である。現在、音楽心理を勉強しているので、幼稚園という音楽授業がない中で、園児が普段どのように音楽と触れ合っているのか、また、幼稚園において先生方がどのように園児のために有効的に音楽を用いているのかを観察し、実際に触れてみたいと考えた。

教育実習においても、実際の現場での体験は、生徒と直接関わることができるという点で得られるものが多かった。今回も、実際の現場に出向き、幼児にも直接関わりたいと考えた。卒業後の進路は教員志望ではなく、ピアノ講師や、音楽療法という方面での指導者として幼児から大人までのような幅広い年代の人を相手に活動していきたいと考えているので、学校での授業ではなく、幼児の普段の様子に触れてみたいと考えた。

### 2. 活動の概要

今回のインターンシップは長岡付属幼稚園において、8月31日(水)～9月2日(金)、4日(日)、8日(木)の5日間行った。活動内容は、小・中学校と合同の運動会の練習での補助、予定されていた避難訓練において、園児が非難練習のために道路を歩くので、安全への配慮・補助、中越地震の改修工事のため危険な場所が何箇所あるので、園児が怪我をしないように配慮・補助など、園児が活動する中での補助が主な活動であった。

なお、今回の日程の決定は、交通費を支給していただけたという話から、支給額を4日間程度までなら可能であるという点、幼稚園から提示していただいた日程に合わせたという点から決定した主な活動概要は次のようである。

8月31日(水) 午前は4歳児・ばら組で過ごした。全園児で運動会のために、「まつけんサンバ」「玉入れ」の練習をグラウンドで行った。同時に、振り付け、整列体系、入退場を確認した。機材運びや、園児の整列・踊りの補助なども行った。この日は、園児は午前みの日程であるので、おやつを食べた後、終わりの挨拶をして帰宅した。その後、まつけんサンバを踊る際、園児が頭につける衣装を作成した。また、8日に予定されていた避難訓練の際の非難場所である公園に安全確認・道路確認のために下見を行った。

9月1日(木) 午前は、3歳児・さくら組で過ごした。朝の挨拶を済ませた後、全園児で運動会での「かけっこ」の練習をグラウンドで行った。走順・合図があったらゴールまで走るという点を確認した。屋外での活動であるので、熱中症予防のための麦茶・機材運の補助をした。給食では、3歳児ク

ラスと一緒に給食を食べ、手洗い・給食の机・飲み物の準備をし、昼食中に飲み物のパックにストローがさせない園児などの補助をした。午後は、絵の具を使用し、自由に絵を描いている園児の見回りをした。時間がたつとそれぞれ好きな遊びを始めるので、絵本を一緒に読んだり、声をかけてくれた園児の話の聞いたり、道具の取り合いなどで喧嘩をした際の仲介役として話を聞いた。園児帰宅後、園内の掃除を行った。

9月2日(金)午前は5歳児・もり組で過ごした。小・中学校の児童・生徒と動会練習をした。合同で行われる入場行進・大玉コロコロの練習をした。もり組に関しては、代表者による選手宣誓・応援合戦も練習した。多くの生徒、児童、園児がいるので、気が散ってしまう園児などに注意をして整列の体系の補助をした。また、気温が高かったので、麦茶を持って行き、待機中に園児に配った。給食は、5歳児クラスと一緒に食べ、手洗い・机の準備・配膳をした。午後は、遊戯室で園児と一緒に遊んだ。ごっこ遊び、積み木遊びなどそれぞれであるので、見回りながら一緒に遊んだ。「だっこして」「見て」という要望が多いので、なるべく多くの園児と接することができるように順番のルールを確認しながら対応した。終わりの挨拶の際、もり組はそれぞれの園児が当番で担当している生物の世話をするので、鳥かごの掃除を手伝った。園児帰宅後、図書室の本の整理・園内の掃除をした。

9月4日(日)午前は運動会での補助をした。朝の挨拶の後、安全に気をつけ、グラウンドへ移動し、必要な道具を運ぶなどした。入場行進・かけっこ・大玉コロコロ・ダンス・玉入れの入退場の補助や、園児の衣装の配布補助も行った。幼稚園は午前のみ参加であったので、幼稚園に帰っておやつを飲み、終わりの挨拶の後、帰宅した。

9月8日(木)午前は避難訓練を予定していたが、天候が悪かったため延期されたため、ばら組を中心に各歳の園児と遊んだ。ばら組は今度幼稚園にくるお客様にプレゼントする首飾り作成していたので、ホッチキスなど危険が多い作業を手伝った。折り紙を折る、遊戯室で走るなど、年齢を問わずみんなが同じ空間で遊んでいるので、様々な遊びに加わりながら用具の貸し借りでの喧嘩などの仲介をした。給食は4歳児クラスで、一緒に手洗い・机の準備、給食配膳を手伝った。食べる際の補助は必要ないため、隣の席で園児と会話をしながら食べた。午後は天候がよくなってきたので、さくら組～もり組の順番を交代しながら、外の砂場がある場所などで遊んでいたため、中で遊んでいる園児とも関わりながら、喧嘩の仲介・出入りの際の足ふきや靴の整理・遊び道具の整理を補助した。園児帰宅後、園内の掃除・洗濯を手伝った。

### 3. 成果と課題

インターンシップを通して次の二点を観察することができた。第一に、3～5歳のそれぞれの年齢で、大きな発達段階の違いがあるという点、第二に、幼児は音楽に非常に敏感であるという点である。特に発達段階の違いについては、予想以上に大きいということが印象的であった。3歳児では、集団活動・仲間との付き合いが苦手な自己中心的な行動をとる頻度が高いということが印象強く、割り込み、おもちゃの取り合いで喧嘩になるなど、頻繁に先生が仲介役となり、問題解決をとる必要がある。また、友達と遊ぶより、個々に興味のある遊びをする割合が高い。ごっこ遊びも頻繁に行われるが、個人の興味のある遊びに向かうため、同時に複数のごっこ遊びが存在し、それらが混ざったような形で遊ぶ。

4歳児は、集団行動ができるようになってきているため、友達同士で遊ぶ頻度が高く、仲間意識が高かった。先生の話の時に落ち着きがない園児も数名いるが、だいたい聞くことができ、3歳児に比べ、おもちゃを譲る、片付けるということもスムーズに行うことができていた。しかし、まだ、同時に自分が話したいことを話す傾向があり、ごっこ遊びについては、男女に分かれて遊ぶことが多く、女の

子はドレスを着てお姫様遊びをし、男の子は積み木やダンボールなどで家を作っていた。給食の際の席も自然と男女に分かれ、仲の良い友達同士で座るなど、仲間意識の発達がみられた。5歳児においては、集団行動が可能になり、遊びも具体的になっていた。より男女で分かれて遊ぶ傾向が増し、ごっこ遊びも、3、4歳児より頻繁に行われていた。赤ちゃん役やお母さん役、お姉さん役などが存在し、1つの組織のなかで役割を決めて遊ぶなど、具体化していた。昼食時もマナーを守り、静かに待ち、片付けることができていた。動物の飼育もするようになり、班に分かれて世話をしており、1歳しか年齢が変わらないが集団行動が4歳児よりも可能であることが印象深かった。年齢が1歳変わるだけで発達における差が予想以上に大きいことは驚きであった。全体的に「先生見て!!」というような主張が多いのも印象深い。5歳児の中には3歳児を気遣う様子も見られ、思いやりの心も発達しているようであった。先生方の姿勢も園児の自発的な活動を支え、より多く経験をさせるために様々な環境を与え、整えているので遊びの中で学んでいる様子をはっきり観察できた。遊びのための材料も豊富に用意されており、創造的に遊ぶことができるので、創作するおもちゃも様々であった。

また、幼児と音楽の環境については、3、4、5歳児の各教室にピアノが配置されており、自由に手を触れることができるようになっていた。ピアノを使ってみんなで歌を歌うことが主な目的であるようである。園児が遊ぶことも可能であるが、帰りの会の際にみんなで集まって歌を歌うなど、集合の合図のような働きを持っていた。それぞれ遊んでいる園児を教室に戻し、集合させて帰りの挨拶をすることは容易ではないが、先生がピアノを弾き始めると、園児も集合しなければならないという意識を持ち、自ら教室で待機する園児がいたのは驚きであった。また、3歳児のクラスでは、集団行動がまだあまり身につけていないためか、集合・待機ということが難しい年齢であると考えられる。そのような場合も、音楽に合わせて踊ったり、歌ったりという形で、園児に帰りの挨拶の集合を誘導し、強制的に集め、注目する時間を増やし、待機させるのではなく、自然に気をひきながら集団行動を指導しているようであった。遊びの時間においても園児の音への敏感な様子を観察することが出来た。お遊戯室にはタンバリン・カスタネット・鈴をはじめ、打楽器が豊富に用意されており、音楽を楽しむというよりは、音が出ることを楽しんでいるようであった。教えられて学ぶというよりも自らの経験を通して学びとっていくことは、幼稚園の教育姿勢でもあり、そのような環境が音、音楽、楽器という面にも整えられていた。園児は音に対して非常に敏感であると感じる。音を利用し、集団行動を学ぶことや、知識・経験を得るといったような先生と園児を媒介してくれるような存在であるように感じた。曲を演奏するだけでなく、音を鳴らすことに楽しみを感じる、意外な音が出るのが楽しいと感じるなど、ただ一緒に楽器を鳴らすだけで園児とコミュニケーションとれたことは非常に嬉しかった。

今後の課題としては、今回の活動においては、行事がある時に参加することができ、普段とは違う園児の様子も観察できたと感じる。しかし、行事に関係なく普段遊戯室で遊んでいる園児の姿、指導している先生方の姿に触れることができる時間が少なかったのは残念であった。期間が短いこともあるのも要因であると考えられるのが、とにかく実際に幼稚園児と関わってみたいという思いが強く、免許取得に関係のない授業の中でどのように自分自身で目的を持てば良いのか曖昧であった点も反省すべきことであると考えている。しかし、現在は卒業後、学校・幼稚園という場ではないが、幼稚園児と関わる仕事がしたいと考えているので、園児の普段の様子を観察することができ、発達の違いや、音に対する敏感さを直接観察できたことに対して良かったと考えている。まつけんサンバでの衣装作りにおいても、園児に怪我のないよう、痛みを与えないよう先生方が細かく配慮されている姿などに触れ、教職につくということに関わらず、将来の役に立ったと感じ、より将来に向けてやらなくてはならないことや、注意すべき点を確認できて、有効な時間であった。集中的に毎日参加することで、園児が覚えてくれており、充実感も持つことができたが、長期における園児の成長の様子は観察でき

ていないので、今回の実習をきっかけに、行事などがあれば、手伝うことができることを見つけ幼稚園の様子を観察しに行きたいと考えている。

## 特別支援学校への学校インターンシップ

— 特別支援教室への参加を中心に —

新潟大学大学院 教育学研究科  
学校教育専攻 障害児教育分野  
金 谷 篤

### I. 問題と目的

近年、特殊教育から特別支援教育へのシフトとともに、養護学校のあり方についても活発な議論がなされている（例えば、名古屋，2003；瀬戸口・安部・北村，2004など）。それらは、養護学校が特別支援学校（仮）と名称を変え、地域のセンター的役割を果たすために、具体的に養護学校がどのような取り組みをしていけばよいのか、また現時点でどのような取り組みをしているのかが論じられている。

一方、新潟附属養護学校も特別支援教室による地域支援事業を行っている（能登，2005）。この取り組みは、全国に先駆けた取り組みである。

そこで、今回のインターンシップでは、附属養護学校の地域支援事業の一つである特別支援教室に参加し、実践力を身につけるとともに、特別支援のあり方について学習した。

### II. 方法

#### 1. 応募動機

##### （1）応募動機

近年、専門的な知識や技能を有し、コンサルテーションができる教師の養成が求められている（松岡・長澤，2004）。N大学においても、学内施設を使用した、臨床実習の場（チャレンジルーム）が設けられているが（松岡・長澤，2004；古田島，2004）、これは、学部学生や大学生学生、長期研修生（現職教員）に対する、発達障害に関する臨床実習の場として機能している（松岡・長澤，2004）。平成17年度においては、筆者もチャレンジルームにスタッフとして参加し、実践力向上に努めた。

その他、学部、大学院の授業、研修会、学会などに積極的に参加し、質の高い教師になるために努めている。

今回の学校インターンシップ応募動機は、現場で実習することで実践力向上できると考えたからである。

また、特別支援学校における地域支援の実態について学ぶことも応募動機の一つである。

##### （2）参加者

N大学に通う大学院1年次学生である。学部生では、学習社会ネットワーク課程に在籍し、生涯学習や、社会教育について学んだ。平成16年度は、A市の臨時TT職員として、小学校で勤務した経験がある。教員免許については、中学校社会1種を取得している。

## 2. 特別支援教室の概要

### (1) 特別支援教室

N 大学附属養護学校で行われており、一般校の通常学級に在籍している軽度発達障害のある児童・生徒が通っている。ソーシャルスキルトレーニングを行っている。

### (2) 指導・生徒

小学生は、4 人 1 グループで、低学年 2 グループ、高学年 1 グループある。中学生は、個別指導を行っている。保護者が別室からモニターで授業の様子を観察している。

今回は低学年 B グループの活動に参加した。

### (3) 保護者、一般校との連携

各活動ごとに、担当職員が参加者の在籍校、保護者当てに、A4 一枚程度の報告書を送付する。在籍校での様子、指導方法などの把握、特別支援教室での様子、指導などを知らせている。

### (4) 時間帯

週に 1 度（または、隔週）程度の割合で、午後 2 時から 3 時までの 1 時間行われる。3 グループと中学生をローテーションさせている。

### (5) スタッフ

特別支援教室担当職員、内地留学生、学生ボランティア、その他ボランティアで構成されている。毎回の活動は 2 名から 4 名程度で行われる。

## 3. インターンシップ概要

### (1) インターンシップのスケジュール

低学年 B グループの活動に参加した。毎回、午後 1 時 30 分から午後 3 時 30 分くらいまでの活動であり、準備、事前ミーティング、授業、後片付け、反省会の流れとなっている（表 1 参照）。

表 1. 活動のタイムスケジュール

時間	内容	詳細
午後 1 時 30 分	活動準備・活動ミーティング	ビデオセット、教材の準備、授業ミーティング（内容・留意点・役割の確認など）
午後 2 時	授業開始	S T として参加、または、別室で観察
午後 3 時	後片付け、授業反省	ビデオ、教材の片付け、授業の反省

### (2) 参加状況

参加は、直接参加とビデオ分析による参加の 2 つからなる。直接参加は、平成 17 年 10 月 7 日から平成 18 年 3 月 14 日まで、週に 1 度程度の参加で計 11 回 特別支援教室ではないが研究会にも参加した。

ビデオ分析による参加は、上記の 11 回に加えて、6 回行われた（表 2 参照）。



表2. インターンシップ参加状況

		直接参加	ビデオ分析のみの参加
参加日	10月	7日、11日、19日	
	11月	2日、29日	18日
	12月	14日、21日	
	1月	20日	11日、27日、31日
	2月	15日、28日（低学年A）	7日、22日
	3月	3日、10日、14日	

## (3) 活動内容

## ・直接参加

S Tとして参加、または、別室で保護者とともに授業観察した。

## ・ビデオ分析

毎回の授業での、参加児童の問題行動を分析した。問題行動場面を1分くらいにまとめて、「問題の起こる状況」「問題行動」「その後のスタッフの対応」の3つについて分析した（図1参照）。

また、問題行動が起こらなくするためには、どのような対応が望ましいかを、「問題の起こる状況」「問題行動」「その後のスタッフの対応」それぞれについて回答した（図2参照）。

これは、G大学・N大学と協働で行われている e-learning によつて支援事業の一環として行われた（永森正仁・上野真臣・浅井達雄・長澤正樹，2006；長澤，2006）。

相談者入力		2. 問題行動の状況	
①問題行動が起こる状況	②問題行動	③問題行動への対応	④その効果
いつ、どのような状況で起きますか？ (場所・時間帯・教科、周囲にいる人、どんな言葉かけに対して、など)	どのような問題ですか？	①の問題に対して、今までどのように対応してきましたか？	③の対応はどのような効果がありましたか？
<ul style="list-style-type: none"> <li>お茶会の準備の時間</li> <li>直前までやっていたが楽しかった</li> <li>いつも、お茶会の準備はしていない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>お話をしている</li> <li>寝転がっている</li> <li>など</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>スタッフがお茶会の準備をしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>お茶会の準備をしなかった</li> </ul>

図1. 問題行動の状況の一例

## 回答者入力

①問題行動への事前対応	②目標・問題行動	③指導方法
望ましい行動ができるようになるために、事前にどのような工夫が必要か？	問題行動が変わる、望ましい行動は何か？	望ましい行動ができたときの対応方法は？
「いっしょにやりましょうよ」など準備を促す言葉がけをする。	お茶会の準備をする	「ありがとう」など賞賛を与える
問題行動が起こらないようにするために、事前にどのような工夫が必要か？	問題行動(「2. 問題行動の状況」の②)	問題行動にはどう対応するか？
「いっしょにやりましょうよ」など準備を促す言葉がけをする。	・お話をしている ・寝転がっている など	「〇〇さん、手伝ってください。」などお願いをしてみる。

図2. 回答者入力の一例

## Ⅲ. 成果

1. 直接参加の成果として次の5点を挙げる。

(1) 支援の仕方、声かけのタイミング、問題行動の対処、授業の進め方、子どもへの話し方、授業内容について、環境設定など、子どもとのかかわり方を学ぶことができた。(2) 問題行動への対応として、正の強化を用いたアプローチの重要性を実践的に学び、また、子どもの行動を見ることなど、子どもの見方が変化した。(3) 保護者と話す時間を設けることができたことにより、保護者のニーズ、特別支援に対する考えなどを知ることができた。(4) 事前ミーティング、反省会において、MT、STの役割、STとしてのかかわり方などを学ぶことができた。(5) また、直接インターンシップに参加しての成果ではないが、特別支援教室に通うことにより、今後の特別支援教育について(特別支援教室、情緒通級指導教室、コンサルテーション、相談事業など)、文献による学習をするようになった。

2. ビデオ分析での成果については、以下のことが挙げられる。

問題行動への対応について授業の様子がフィードバックできた。また、毎回の活動を分析することにより、問題行動への視点、子どもの見方を学ぶことができた。

## Ⅳ. 今後の課題

今後の課題として、問題行動への対処や、指導力、子どもとのかかわり方、うまく活動に導く技法などが課題として挙げられる。また、特別支援学校の役割についてさらに深めていくことも必要である。これについては、ボランティアや実習への参加とともに、文献による学習、授業や学会への積極的な参加によって補っていくことが必要となるだろう。

## V. 最後に

今回のインターンシップでは、実際に特別支援学校が行っている地域支援事業に触れることができた。現在注目されていることが、タイムリーに実習という形で勉強できたことは、非常に効果的なことだと考える。教育実習はもちろんのこと、今回のように長期的なインターンシップも実践力を高める上で重要なことである。

## 参考文献

- 古田島恵津子・長澤正樹（2004）軽度発達障害のある中学生グループ支援とその有効性——参加者本人・保護者への意識調査の結果分析から—。日本 LD 学会第 13 回大会発表論文集。314—315.
- 瀬戸口裕二・安部博志・北村博幸（2004）コーディネーションの実践——養護学校のセンター的機能。LD 研究, 13(3), 231—238.
- 長澤正樹（2006）大学における特別支援教育の支援 新潟大学長澤研究室の取り組み。特別支援教育フォーラム 2006
- 永森正仁・上野真臣・浅井達雄・長澤正樹（2006）ICT を用いた特別支援教育実践および事例データベース構築。電子情報通信学会平成 17 年度大会発表論文集
- 名古屋学（2003）未来の養護学校を目指して——教育相談活動を通じた小学校と養護学校との連携。発達障害研究, 25(2), 85—91.
- 能登宏（2005）新潟大学附属養護学校情緒通級指導教室の実際——長期目標と短期目標の設定と評価方法について。日本 LD 学会第 14 回大会発表論文集。286—287.
- 松岡勝彦・長澤正樹（2004）地域への支援。加藤哲文・大石幸二（編）特別支援教育を支える行動コンサルテーション。学苑社
- 吉橋哲（2006）サポート教室「スクラム」、どうぞよろしく！ 特別支援教育フォーラム 2006

## 学校インターンシップ最終報告レポート

新潟大学大学院教育学研究科

教科教育専攻国語科教育専修

岩 船 尚 貴

指導教員：附属新潟中学校 佐藤 佐敏 教諭

### 1. 学校インターンシップ応募の動機

私は東洋大学法学部法律学科を卒業し、今年度より新潟大学大学院教育学研究科教科教育専攻国語教育専修に進学した。東洋大学での学部生時代・科目等履修生時代には中学校、高等学校の教育実習を経験したが、どちらも現在の専攻とは異なる社会科での実習参加であった。高等学校国語科教師を目指し、本校大学院に進学した私であるが、現場での教科指導を行ったことは一度もなかったということは、今後教員を目指す上での不安要素の一つであった。このような背景から学校インターンシップによって国語科の授業実践を行い、現場の先生方に触れながら多くの経験を積みたいという思いが初めの応募動機である。当初は、一度も触れたことのない小学校の教育現場を知りたいという気持ちもあり、小学校でのインターンシップ参加の希望を出していたが、大学指導教員との相談の上、教科指導の経験を積むということをインターンシップの最大の目的として中学校へと参加希望を変更した。

### 2. 活動の概要

まず、新潟大学教育人間科学部附属新潟中学校・佐藤佐敏教諭と打ち合わせをする中で「お互いに有益な活動にする」というコンセプトを基本に考えて計画を進めた。隔週決まった時間だけ活動を行うという形ではなく、教育実習のように集中的に活動するのが望ましいという佐藤教諭の提案で、平成17年12月5日（月）から12月16日（金）までの二週間にわたって集中的に活動を行った。この期間は附属新潟中学校の「モジュール・スケジューリング (M・S)」の期間となっており、佐藤教諭とT・Tを組んで教科指導にあたるというのが打ち合わせ段階での活動計画であった。M・Sとは自学を基本とした授業形態で、各教科から提示される「学習内容」の習得と追求を目指し、生徒各自が学習計画をたてて、自分のペースで学習をすすめていくというものである(2週間1人あたり20ブロックあり、例えば英語を5、国語2、数学7、社会6というように総数が合うように計画をたてる)。つまり、二週間の期間内に、生徒が自らたてた、各教科の学習計画のノルマをこなしていくというものであるが、その際の教師の主な役割は、自学をする生徒への学習支援及び、生徒に与えられた課題の添削作業である。

今回のインターンシップでは、この M・S を中心としながらも、指導教諭の配慮で現場における様々な経験をさせていただいた。活動の概要は以下の通りである。

実施期間	平成 17 年 12 月 5 日（月）～平成 17 年 12 月 16 日（金）
活動内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指導教諭と T・T を組んで、課題に取り組む生徒の机間指導、課題の添削等、M・S における指導教諭との協同学習支援。</li> <li>・朝礼、ホームルーム等への参加、清掃指導、部活動指導など。</li> <li>・M・S ではなく平常授業の時は、朝テストの採点、授業参観、配布物のコピーなどを行う。</li> </ul>

- ※ 1) 基本的には朝から職員同様出勤し、部活動に参加して一日の流れを終える。しかし、二週目は附属新潟中学校の入学試験が週末に控えていたため午前放課となることがあった。また、昼食は個人的に持参して教務室内で食事をとっていた。
- ※ 2) 一週目は私の他に国語科、書道科の学部生がボランティアで M・S に参加していたため人手が多く、指導教諭との T・T が成り立っていた。しかし、二週目以降は、もう一人の国語科の教諭である中村教諭が一年生、私が二年生、佐藤教諭が三年生、といったように私を含めた三人が分担して各学年を担当するという形になった。

### 3. 成果と今後の課題

成果としてまず第一にあがるのは、やはり現場の中の一人として参加するので教師の仕事内容の細やかな部分を教育実習よりも深く知ることができた点である。また、M・S における教師の役割は、生徒の持ってきた課題の添削や学習支援が主となるので自分の国語力を認識する良い機会にもなった。さらに、教員免許を所持しているためテストの採点など、教育実習ではできなかったことが経験できたことも貴重であった。しかし、一方で活動が M・S 中心となったため、当初学校インターンシップの目的としていた「授業実践」を行うことができなかった。何度か指導教諭の佐藤教諭とも私の授業実践計画をたてたのだが、自分の講義の日程では継続的に授業を行うのは難しいという問題から実現することができず、専門教科の指導という点では、当初の活動目的を十分に達成したとは言えない結果となった。

### 4. 学校インターンシップにおける問題点と意見

5 月より学校インターンシップの活動を開始するべく、附属新潟中学校に赴いての佐藤教諭との打ち合わせ、メールでのやり取りを頻繁に行っていたが、大学の講義日程と受け入れ校の授業日程の調整がかみ合わず、なかなか活動を開始することができなかった。「大学院生にとっても、受け入れ校にとっても有益な活動にする」という基本コンセプトのもとで活動の計画を指導教諭からたてていただいたが、結局のところ M・S 期間における短期集中の 1 回の活動のみでインターンシップを終える結果となってしまった。また、この期

間は、学科の先生方の了解を得、やむなく大学院の講義を欠席させていただいての活動であった。学校インターンシップには教育実習のような欠席届があるわけではなく、公欠扱いにはならない。来年度以降、欠席届が発行され、公欠が認められるようなシステムが作られれば、年間を通して短期集中で数回にわたって活動を行う場合が増えてくると考える。また、私が一回の活動のみであったのに対し、学校インターンシップに参加した他の大学院生の中には定期的に授業を行っている方もいて、人によって活動時間・内容が全く違うという問題が生じていることも事実である。今後は、学校インターンシップに参加しない大学院生も含めて、教育実践総合研究という科目の単位認定の基準をある程度明確にしていくとともに、受け入れ校と大学の更なる連携をはかっていく必要があるのではないだろうか。

## 「学校インターシップ」にもとづく数学科教材研究

新潟大学大学院教育学研究科  
教科教育専攻数学教育専修

長谷川 貴 久

指導教官：新潟大学教育人間科学部附属新潟中学校 金山 光宏 教諭

### 1. 「学校インターシップ」の目的

私は、理学部数学科の出身で、第1種の教員免許を持っていながら、教育実習でしか授業経験や他の先生の授業を見ることが出来なかった。そこで、指導教諭に終日密着することで、現場の学校の実態を知ることが出来る。

今回の学校インターシップの目的は、

- (1) 終日、指導教諭に密着し、教師のあり方について勉強し、自分としての教師像を作り上げる。
- (2) プロの授業を見て、TTをすることで、授業についての理解・形式を考える。
- (3) (2)を踏まえ、実際に自分が授業をし、反省点や課題点を見つけ、今後の教師生活に役立たせる。

主に上記の3つの点について、意識しながらインターシップを行ってきた。

### 2. 内容と方法

#### (1) 1年の流れ

5月下旬に山田教授・金山教諭・長谷川の3者で打ち合わせをし、6月上旬より毎週金曜日に終日通うことに決まる。3月10日の最終日まで、附属新潟中学校に30回、実習でお世話になった。また、授業以外として、終業式・演劇発表会・研究発表会の準備・フォーラム・入試準備・卒業式の準備などの行事にも参加することができ、貴重な体験をすることができた。授業としては、金山教諭の授業のTTを中心に、生徒達をサポートをしながら、授業の準備や構想・教材研究、生徒の見取りなどを勉強した(上記目的の(2))。また、選択数学では5時間、1年生の数学(比例)の授業を6時間、計11時間の授業を担当した(上記目的の(3))。(資料①)

#### (2) 1日の流れ

基本的には、朝の職員会議の参加に始まり、放課後の部活指導まで参加。時間割は毎週変わるので、時間やクラスは毎回不定期である。だいたい1日6時間の内、数学の授業は2～3時間、学活が1時間、選択数学が1時間である。指導教諭の空き時間においては、指導教諭のお手伝い(試験の採点業務・配布物の印刷等々)や、学年部会にも参加。私が授業を担当するようになってからは、教材研究に時間をあてるが多かった。また、数学の授業は、1週間空いてしまうので、その間どのような授業をしていたか、授業の流れや教材観を指導していただいた。数学の授業においては、何度か指導教諭が不在の時に、自習監督を経験することもあった。授業以外の朝学活や給食・清掃は、指導教諭のクラスで指導した。放課後は、野球部の部活指導に参加し、ノックや生徒達が怪我をしないように留意を払いながら指導をした。

### (3) 担当授業について

1年間で、選択数学の授業を5時間・1年生の数学(比例)の授業を6時間担当した。中身については、以下のような授業をやった。【選択数学(以下の①を2時間、②を3時間、計5時間)】

#### ① マッチ棒に関する数学問題(2時間)

最近テレビでも特集されるマッチ棒問題を取り上げることで、まず興味・関心を持たせる。そこで、実際に数学に関わっているような問題を取り上げることで、数学的発想力を身につけることをねらいとする。

1時間目(2005.9.2)：インターネットから出題。

2時間目(2005.9.9)：マッチ棒の本から課題を探し、実際に生徒達にマッチ棒を配り、操作活動を通して考えさせた。

#### ② Logoに関する数学問題(3時間)

選択数学なので、授業の内容の応用を取り上げる。コンピューターを使い多角形の外角の性質を調べ、一般化することをねらいとする。

1時間目(2005.11.25)：Logoの説明・使い方。実際に使ってみる。

2時間目(2005.12.2)：多角形・星形の規則を見つける。

3時間目(2005.12.9)：多角形・星形の規則を一般化する。

#### ③ 1年生数学(比例)の授業(3時間×2クラス)

小学校でも取り扱われている内容を、中学校との違いを明確にし、また身近にある物を取り上げることで、興味・関心を湧きただした。表・式・グラフの3つの視点から見ることをねらいとする。

1時間目(2006.2.10(同日2時間))：時計の長針は、一日に何cm進むのか？調べる。実際に1周する長さを測る。長針の長さを測る。24周分測る。

2時間目(2006.2.13/2.15)：前時の課題を式・表・グラフから読み取り、小学校・中学校の比例の違いを抑える。

3時間目(2006.2.15/2.16)：小学校では習わない部分、負の世界について調べる。

### 3. 成果と課題

#### (1) 全体において

##### ① 成果

- ・ 教員免許を持って一日体験できることで、教師の仕事に近い仕事ができ、教育実習とは大きく異なり、採点業務や自習監督、さらには定期テスト監督など、教育実習では経験できなかったことが経験でき、教師という職業をくわしく知ることが出来た。
- ・ 採点業務をすることによって、生徒達の今の学力状況を把握することもできた。そのことによって、授業のTTにおいて、どの分野が弱いのか？どの生徒を重心的に見ればいいのか？どのような支援をしてあげたらいいのか？ということがわかり、大変良い判断材料となった。
- ・ 一年間通うことによって、生徒達の成長もわかるほか、生徒達がどのような考えを持っているのか？短期では読み取れないことも一年間通うことによって読み取ることが出来た。特に1年生の授業の取り組みについては、1学期と3学期では、大きな変化を見受けることが出来た。



- ・ 給食の配膳指導・清掃指導において、通い始めの頃は、生徒達と一緒に活動している・手伝っているという方だったが、実習も後半になるにつれて、指導や生徒達を注意する活動ができてきた。精神的にも教師としての成長ができたと思う。

## ② 課題

- ・ 教育実習と違い、短期集中して通わないので、準備する期間は確保できるもの、大学の講義の課題との両立が大変だった。

## (2) 授業実践において

### ① 成果と課題

- ・ 発問の仕方：比例の授業において、1時間目の1クラス目は、こちらが予想した回答が全く出なかった。しかし、指導教諭との授業後の検討・ご指導をしていただき、その結果2クラス目にやったときは、少し発問の仕方を変えただけで、予想の回答が出てきた。発問の仕方には十分に留意を払う必要があると感じた。このことから、金山教諭の発問をノートにまとめ、その後、指導教諭とその発言に対しての分析をした。
- ・ 生徒達の授業における活動：生徒達が問題を解くのが活動ではないということ。いかに生徒達に問題を考えさせられるかが重要だということ。授業構成にあたって、そこが重要だということわかった。これとともに、数学的活動を誘発する課題の準備が必要である。
- ・ 教材観：今日の授業で抑えるべき点（単元分析と単元の本質）は、なんなのかな？しっかり抑える点。
- ・ 時間配分：自分が担当した授業において、指導案通り授業が進まなかった。金山教諭の授業を見ていると、1時間1時間の区切りがよく、授業の時間配分・1時間の授業のメリハリ使い方が勉強になった。
- ・ 授業中の評価：教育実習では、評価について全く触れられず、勉強はできなかった。今回実際に評価をするまでの段階まではいかなかったが、どのように授業中に評価してあげるか、ご指導をいただき勉強になった。1年生の比例の授業において、自己評価・他者評価・教師評価の3観点から、どのような評価をするのか、実際に案を出す段階まで出来、ご指導をいただいた。
- ・ 生徒達には、授業中支援していると、中にはノートを隠してしまう生徒もいた。出来ない恥ずかしさや私に対しての警戒心から、そういう行動が出てくるのだと思う。そういう生徒に対して、どのような支援ができるのか？生徒達とのコミュニケーションも大事だと思われる。また、生徒達の何人か抽出をし、授業中の様相を見取り、その後指導教諭と分析をした。

## 4. 資料（1年間の活動）

月日	曜	時間	主な行事	主な活動(TTの活動以外)
2005/6/3	金	午後		学校インターシップの今後の打ち合わせ。
6/24	金	一日	(午後)研修会	(午前)校舎見学。定期試験監督。 (午後)研修会に参加。
7/1	金	午後		選択数学の授業に参加。部活動に参加。
7/8	金	午後		選択数学の授業に参加。部活動に参加。
7/15	金	一日		(午前)学年部会に参加。定期試験の採点業務。 (午後)学年集会に参加。部活動に参加。
7/22	金	午前	終業式	終業式・大掃除・学年集会・クラス学活に参加。
9/2	金	一日		(午前)午後の選択数学の授業準備。学活見学。 (午後)自習監督。選択数学の授業を担当。
9/9	金	一日		(午前)午後の選択数学の授業準備。学活見学。 (午後)自習監督。選択数学の授業を担当。部活動に参加。
9/30	金	午前		春の研究論文を推敲。
10/7	金	一日	(午後)研究発表会の打ち合わせ	(午前)学年の学活授業見学。 (午後)研究発表会(数学の部)の打ち合わせに参加。
10/15	土	一日	演劇発表会	(一日)各学年・各クラスの演劇発表を見学。 (午後)演劇発表の後片づけに参加。
10/21	金	午後		新潟大学教育人間科学部鈴木保高教授の選択数学の授業を見学。
10/22	土	一日	フォーラム	(朝)来客された方々の車の誘導。 (昼間)フォーラムに参加。
10/26	水	一日	研究発表会	(朝)来客された方々の車の誘導。 (午前)数学の研究授業を見学。授業風景を写真撮影。 (午後)数学の研究協議会に参加。
11/11	金	午前		教育実習生の数学の授業を見学。
11/25	金	一日		(午前)自習監督。定期試験の採点業務。 (午後)選択数学の授業を担当。学活見学。
12/2	金	一日		(午前)午後の選択数学の授業準備。 (午後)選択数学の授業を担当。学活見学。
12/9	金	一日		(午前)自習プリント答案作り。自習監督。 (午後)選択数学の授業を担当。
12/12	月	一日	モジュール	(午前)道徳授業見学。 (一日)生徒達の数学の個別学習の支援。
12/14	水	午後	モジュール	生徒達の数学の個別学習の支援。
12/16	金	午前	モジュール	生徒達の数学の個別学習の支援。テスト監督。数学小テストの採点業務。

12/17	土	一日	入試	休み時間の廊下巡視。受験生を面接室までの案内。
2006/1/27	金	一日		(午前) 2 / 10 の授業の教材研究。学年学活に参加。 (午後) テスト監督。
2/10	金	一日		(午前) 比例の授業を担当。学年集会に参加。 (午後) 比例の授業を担当。大学指導教官と授業の反省会。
2/13	月	午後		比例の授業を担当。
2/15	水	午後		比例の授業を担当。
2/16	木	午後		比例の授業を担当。
2/24	金	一日		(午前) 学活の授業見学。 (午後) 選択数学の授業の自習監督。部活動に参加。
3/3	金	一日	卒業式前日	(午前) MT再テスト採点。学活の授業に参加。 (午後) 卒業式の準備に参加し、清掃監督。
3/10	金	一日		(午前) 学活の授業に参加。学活授業研究見学。 (午後) 配属学級での、最後の挨拶。

## 学校インターンシップを通じた成果と課題

新潟大学大学院教育学研究科  
教科教育専攻 音楽教育専修  
吉村 智宏  
配属校：附属長岡小学校  
指導教員：伊藤純子教諭

### 1. 学校インターンシップを希望した理由

平成 17 年 6 月より新潟大学教育人間科学部附属長岡小学校<sup>1</sup>で定期的にインターンシップ活動を行ってきた。本インターンシップは学部における現場とのつながりと一線を画す。それは学部の場合、特に教育実習に代表されるパイプ<sup>2</sup>は、教員を志す学生が生の教育現場を感じる、経験するといった意味合いが強いことに対し、大学院のそれはむしろ実践研究という視点の意味合いが強い。それは院で学習した理論やその上に打ち立てられた実践と現場とをつなぎ合わせ、そして検証するといった過程であり、考察である。また同時にこういった活動が研究の指針はもとより今後の活動の指針にもなってくると言えよう。

ここでは附属長岡小学校におけるインターンシップ活動を通じた成果と課題に付いて考察を行う。

### 2. 活動の内容

本インターンシップの活動はおおよそ以下の内容である。またそれぞれの詳細は次の「2-1.活動内容の詳細」に挙げる。

- ① 音楽授業の観察と補助
- ② 音楽室の掲示物の製作及び整頓
- ③ 給食・清掃指導の補助
- ④ 平成 17 年 11 月 26 日(土)に実施された校内音楽会のアシスタント及び合唱伴奏
- ⑤ 平成 18 年 2 月 22 日(水)、23 日(木)に行われた研究授業

#### 2-1. 活動内容の詳細

##### (ア) 音楽授業の観察と補助

- ・ 伊藤純子教諭の授業の観察
- ・ グループ、個人学習時の歌唱、器楽指導

<sup>1</sup> 以下 附属長岡小学校

<sup>2</sup> 吉村が学部時代に行ってきた現場実習は参考までに次の通りである。

- ・ 1 年次…音楽科学生による小学校訪問演奏
- ・ 2 年次…小学校訪問演奏、新潟市立西内野小学校学習支援ボランティア
- ・ 3 年次…小学校訪問演奏、西内野小学校学習支援ボランティア、同小学校器楽部指導
- ・ 4 年次…小中学校訪問演奏会、西内野小学校器楽部指導

又、2 年次に附属長岡小学校観察実習、3 年次に新潟市立東中の山小学校、坂井輪小学校、4 年次には附属長岡中学校（音楽）で教育実習を行っている。

- ・ 合唱伴奏
- (イ) 音楽室の掲示物の製作及び整頓
  - ・ 小学校で学習する楽典用語の掲示物の製作
  - ・ リコーダーの運指表、国内外の音楽史上の作曲家の掲示や整頓
- (ウ) 給食・清掃指導の補助
  - ・ ⑤の研究授業の対象学級（4-2）にて給食及び給食指導の補助
  - ・ 音楽室前の清掃及び清掃指導の補助
- (エ) 平成17年11月26日(土)に実施された校内音楽会のアシスタント及び合唱伴奏
  - ・ 4学年全体合唱『音楽物語 ごんぎつね』の伴奏
  - ・ 会場セッティングの補助員
- (オ) 平成18年2月22日(水)、23日(木)に行われた研究授業
  - ・ 2月22日(水) 4校時（11:35～12:20）、23日(木) 6校時（14:45～15:30）の全2時間で行われた。

## 2-2. インターンシップ実施記録

本インターンシップ実施日、時間及び内容は以下である。尚、活動内容の番号は本レジュメ「2. インターンシップの活動内容」の番号と対応させてある。

実施日	活動時間	活動内容
平成17年6月6日(木)	16:30～17:30	インターンシップ打ち合わせ
同年 7月7日(木)	全日	①、③
同年 10月3日(月)	全日	①、③
同年 10月12日(水)	全日	①、③
同年 10月31日(月)	全日	①、②、③
同年 11月8日(火)	9:30～15:00	①
同年 11月24日(木)	全日	①、③
同年 11月25日(金)	午前	①
同年 11月26日(土)	午前	④
平成18年2月22日(水)	11:00～12:50	⑤
同年 2月23日(木)	14:00～16:00	⑤

## 3. インターンシップを通じた成果と課題

本インターンシップをするにあたってその形式を「学級専攻」にするか「教科専攻」にするかの選択が必要であった。これはもともと私は小学校の教員を目指していることもあり、児童の様々な場面に触れられる「学級専攻」を選ぶことも考えられたのだが、教育実習その他の現場実習等で多少でも経験しており、さらには1の志望動機でも述べたように当初から大学院で学習した理論や実践を現場とつなぐことが目的としてあったため、「教科専攻」を選択することにした。従ってインターンシップの期間の殆どを音楽室で過ごし、伊藤 純子教諭<sup>3</sup>の授業の観察、補助を行った。

<sup>3</sup> 平成17年度現在

### 3-1. 成果

本インターンシップを通じた成果として次の点が挙げられる。

- (1) 1時間の音楽授業における構造的視点の学習
- (2) 伊藤教諭の実践する論と授業の学習
- (3) (2)と自分の考える実践との比較検討
- (4) 研究授業の実践

(4)の研究授業<sup>4</sup>については、私の大学院の研究内容である器楽演奏との関連で行ったよって先の(1)～(3)は(4)に結びつくに必要な過程であると言える。

又、こういった成果として挙げられた過程は我々教職経験が無い大学院生にとっては重要な意味を持つ。それは自分が考える授業実践はどのようにしたら成り立つのだろうかという具体的な手法を指導教諭の実践から参考にするとといったことや、さらには実践するにあたっての論をどのように立てていけばよいのか、またはそれと指導教諭のそれとはどう関連してくるのかということのある程度の期間を持って学習していくということである。すなわち我々にとって指導教諭の実践と論を学習する事は必須とも言える。

これら成果を挙げる上で一定期間の観察・補助の他、指導教諭との連携や話し合いを通じた自分の学習のフィードバック、記録等が重要である。

### 3-2. 課題

又、先で挙げた成果に達するまでに特筆すべき課題が 3-1 の(2)、(3)との関わりの中で生じた。それは、授業実践をするにあたって立てるべき手法と論が指導教諭のそれとなんら変わらないものになりかねないということである。

私の場合、指導教諭の実践の観察、補助を定期的に行ってきたのだがそれと同時に自分の実践と論を考察していた。しかし、自分の実践と論を進めていく中で起こるある種の行き詰まりが解決できず、逃げるようにして指導教諭の長年の経験と研究から確立された体系のもと立てられたそれに飛びついたと言う経緯がある。具体的には当初想定していた授業案は「情景を思い浮かべて」というピアノを教材として用いた実践であった。しかし、何故ピアノにこだわる必要があるのか、また全ての児童に十分な学習時間が確保できる<sup>5</sup>のか、何を持って評価を決定するのかという点についての解答が自分では見出せずにいた。そういった問題点を含みながら指導教諭の論や実践を学習し、理解していくに従って、自分がこれまで立ててきたものを否定し教諭のそれに移ったと言う事である。

私の場合これを打破するためにある一定期間附属長岡小をはなれ大学院で指導教官の助言のもと再び研究、考察を行った。これは現場を離れ今一度自分の論や実践の真意を確かめることに非常に有効であった。というのは、一度学習者を自分の立場に置き換え器楽演奏について立ち返ることができたということである。もともと器楽学習に対して感じていた問題点や課題は何であったのか、またそれに対して自分の場合はどのように解決していったのかということは今一度見つめなおし、それを1つの授業案として立てることに結びついた。

<sup>4</sup> 題材名「深めよう、私たちの器楽表現」

<sup>5</sup> 教材のピアノが音楽室に一台しかないことによる弊害

ここで大切なことは、我々のような院生を対象とした場合、現場の指導教諭の論と実践を学習すると同時に自分のそれとの擦り合わせを行う事である。これは避けては通れないと言えよう。しかし同時に先に示したような問題点も必然的に起こることが考えられ、大学とのパイプが必要となってくる。

#### 4. 意見、要望

3-2に関連することであるが、実習先の活動を大学院の研究でフィードバックできるような環境を作ることが必要と思われる。

## 学校インターンシップを終えて

新潟大学大学院教育学研究科

教科教育専攻美術教育専修

池上弓子

配属校：附属新潟小学校低学年3組

指導教員：石塚 崇教諭

### 1. 応募動機

インターンシップの応募動機は主に以下の3点であった。まず、教育実習より長期に渡って子ども達と接し、広い視野で子どもたちの活動を観察することで一つの事に偏りなく子ども達の考え方や思いを見つけ出したかったからである。2つ目は、学校やクラスの行事に多く参加して、それらを運営する教師の様子を知りたかったからである。3つ目は、来年度の修了論文に向けた研究テーマ（図工・国際理解に関する）を探りたかったからである。

これまでも子どもと接した機会や、教育実習の経験があった。私の専門は美術教育であるので、小学生の図工や造形活動、中学生の美術を中心に子どもと接してきた。学校現場や子ども対象の活動に関する過去の経験は以下の通りである。

(1) 学校教育課程美術教育に在籍中、1年次の夏季休業期間、出身幼稚園（上越市）にて一ヶ月ボランティア活動を実施した。小学校・中学校の教職免許を取得するつもりだったので、2年生になってからある観察実習の前に、幼児教育について知っておきたいと思い、お願いして受け入れていただいた。午前中園にいて、幼児の世話係や遊び相手を手伝った。体育館で遊ぶ子どもたちを見ていたり、一緒に遊んだり、教室での粘土やお絵描きを一緒にしたり、ままごとをしたりした。ブドウ狩り遠足などの課外学習も同行した。それまでバッタなどの昆虫に抵抗感があったが、子どもたちと一緒に捕まえることで慣れることができた。

(2) 2年次に附属長岡小学校の2年生クラスで1週間の観察実習を行った。初めて小学校の教育現場に入るとともに、子どもの学習の様子や思考、人間関係などについて観察することができた。

(3) 3年次の春季教育実習において附属新潟小学校の2年生クラスで2週間の教育実習を行った。音楽以外の教科を実習した。図工では、もう一人の実習生とTTで2時間続きの授業をした。様々な素材を使って「見たこともない宇宙の生物」づくりをした。教室をいっぱい使って展示し、鑑賞も行った。秋季教育実習では、東青山小学校の1年生クラスで2週間の教育実習を行った。各教科を実習。図工では、大きな段ボールを使って、クラス全員の子どもが入ることの出来るくらい大きな、クラスで一つの「みんなのお城（基地）」づくりを行った。

(4) 3年次に芸術環境創造過程造形表現コースと秋に行ったアートイベント第2回「うちのDEアート」において、3つの活動を行った。1つは、美術教育のゼミ生で行った内野中学校での授業実践である。5月頃から10月にかけて内野中学校の三年生を対象に美術の授業実践を行った。中学生の作品は、内野の神社に展示された。実際に授業をしたり、作品づくりのアドバイスをしたりした。中学生の前に立つことが初めてだったが良い経験になった。長期間だったので、生徒と交流を持つことができた。2つ目は、内野小学校生対象のワークショップである。小学生8名ほどと内野町を歩いてまわって、面白い景色を見つけて写真に撮っていくウォークラリーのような活動である。撮った写真



を子どもたちと行う活動もした。子どもが住む町を子どもの視線から見る良い機会となった。3つ目は、内野住民対象の陶芸ワークショップである。小・中学生に限らず、陶芸の補助をおこなった。

(5) 3年次の秋、美術の他のゼミ主催の、豊栄の早通りの子ども対象のスタンプラリーワークショップの補助を行った。地図をもとに親子と一緒に町を歩いてスタンプラリーをするものである。団地に住んだり、団地で遊んだりした経験がなかったので、子どもたちに連れられ歩いて団地の遊び場を見る良い機会になった。

(6) 3年次の冬、附属新潟小学校の文化祭で図工ワークショップを、美術教育ゼミ生で行った。身近な材料を使った動くおもちゃづくりを行った。

(7) 4年次春季教育実習において長岡の宮内中学校2年生クラスで2週間の教育実習を行った。1、2年生の美術の授業を実習。色画用紙を使って、仕掛けが付いた楽しい名刺づくりを行った。教師側に立って中学生と接すると、生徒どうしの人間関係に気を配らなければならない教師の立場がわかり、ここで初めて、中学校の学級経営・生徒指導の厳しさを知った。

(8) 4年次の秋、内野小学校の文化祭で図工ワークショップを美術教育ゼミ生で担当し、はんこづくりとコマづくりを行った。

(9) 大学院1年次、第3回「うちのDEアート」の内野小学校で、土鈴づくりワークショップの補助を行った。

(10) 大学院1年次の1月、万代島美術館での絵本づくりワークショップを行った。親子対象に、簡単な仕掛け絵本づくりを行った。子どものために親がこのような企画に積極的に応募してくることに驚き、親も子どもと一緒に楽しく活動する様子を見ることができた。また、幼稚園の教師が教材に使おうと、真剣に取り組んでいる様子が見られ、いろいろなところから良い教材を選ぼうとしている現場の教師の姿も印象的だった。

(11) 大学院1年次の3月、小針中学校での授業実践を行った。小針中学校1年生一クラスの美術の授業4時間をゼミ生で実施した。フェイスペインティングをする授業を行った。

以上の図工・美術の実践は、既成のものでなく、考案して活動内容や活動を決めたものである。実習でも普段の活動とは違う内容の実践を行わせてもらった。そのため、対象にする子どもや団体にあわせて、様々な造形活動の実施を経験することができた。

学校教育課程美術教育に在籍中に取得した免許は、小学校一種、中学校美術一種、高校美術、中学校英語二種である。

## 2. 活動概要

11/10(木)から2/3(金)までの期間、計10回の訪問をした。活動日は、11/10(木)午前中、11/14(月)、11/24(木)午前中、12/1(木)、12/5(月)、12/8(木)、12/12(月)午前中、12/15(木)午後、2/2(木)、2/3(金)である。

配属クラスは、附属新潟小学校低学年3組で、1年生8人、2年生7人のクラスである。

朝から夕方まで、クラス担任の石塚先生の補助、図画工作授業などの実施をした。休み時間や放課後、給食や掃除の時間も子どもと過ごすよう心掛けた。また、長期に渡って訪問したことで、季節に合わせた題材や行事を体験することができた。

授業での活動は、担任の先生の手が足りない部分を補助したり、子どもの仲間に入って一緒に授業活動を行ったりする「参加・補助する授業」と、担当の先生なしに子どもの前に立って授業を行う「担

当する授業」にわけることができる。「参加・補助した授業」は、音楽、体育、図工、生活、音楽、コンピュータの授業である。授業の他には、ミュージックステーション（音楽発表会）、低3フェスティバル（他学年の複式学級・養護学校の子どもを招く出し物イベント）、研究授業、研究会に参加し、補助を行った。「担当した授業」

は、図工の授業、英語の時間、国語の自習、作文の時間、読み聞かせの時間である。

### 3. 成果

今回のインターンシップにおいて自身のためになった、今後に生かしたいと思うことができた成果を3つ挙げる。1つ目は、子ども一人一人の学校生活を満遍なく見ることができたことである。今までの実習ではなかなかできなかったことである。

配属になったクラスが少人数だったので、15人全員の生活態度や授業態度、感情表現の様子や友達とのトラブル、ちょっとしたつぶやきなどを見てとることができた。例えば、子どもが休み時間に遊ぶエリアがほぼ全員同じなので、休み時間中に起きたトラブルが原因で後の授業まで口論が続いている場合が多く、それぞれが争いや友達を思いやる気持ちをどんなふう考えているのかを毎回見ることができた。また、授業中の発言も40人クラスより多くの子どものものを把握でき、机間巡視してどこにつまずいているか、何に悩んでいるかを確認することができた。

子どもの様々な場面を見ることで、「この子どもはいつもダイナミックだな。」とか「口は悪いしちょっかいは出すけれど、とても繊細なんだな。」とか「ボーっとしているようだけれど芸術的感性は素晴らしいものを秘めているんだな！」などと理解することができた。その子どもの様子を担任の先生と話をし、授業での発言や図工での作品を参考に理解度や達成度を確認しあうことができた。そこからその後の働きかけを相談することで、新しい課題が見えた。また、長期の訪問で、子どもの成長も見受けることができた。

複式ならではの様子として、子どもの様々な発達や学年に比例しているけれど程度や領域はそれぞれであるということを見ることができた。単なる学年で子どもの発達を判断しがちであったが、一概に決めてはいけないということがわかった。

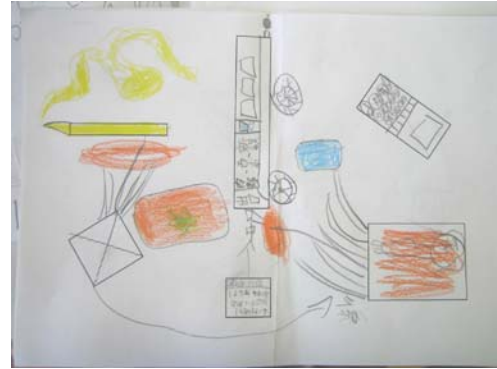
2つ目は、図工の授業の経験を重ねることができたことである。

図工では、①簡単な形を何かに見立てて絵を描く（1時間）、②簡単な形を切り貼りして開閉機能（しかけ）の付いた半立体作品を作る（3時間）、という授業を行った。これらの授業では、一つの簡単な形を様々なものに見立てることで広い見方とひらめきを引き出すことがねらいだった。

最初は何があるか分からない、思いつかないといった表情だったが、手を動かしていくごとに頭が柔らかくなって、「自分しか思いつかないようなアイデアを」という呼びかけに対して「あ！いいの思いついた！」と次々見立てていった。

とにかくいっぱい思いついたものをどんどん描いていく子ども、丁寧に色付けしていく子どもなど、自分にあったペースで作品作りを進められるよう、たくさんの時間を図工に割り当てていただいた。教育実習だと指導案に書いたねらいどおりに授業を進行して、焦って終わってしまうことが多く、本当に子どもの表現の幅が広がったのだろうかという疑問に思ってしまうことが多かった。今回は、実習というプレッシャーもあまり無く、冷静に授業ができ、一つの決まった型を教えるのではなく、子どもが自ら考え出し、思いつくように授業を進めることができた。その結果、私自身びっくりするほど、いろいろなアイデアが出てきて、回を重ねるごとに子どもの表現の幅の広がりを見ることができた。

また、完成した作品を鑑賞する時に行う「インタビュー」は参考になった。友達同士作品の良いところを聞いたり、感想を言ったりするものである。活動しっぱなしにせず、自分の作品に愛着を持ったり、鑑賞することの楽しさを知ったりすることができると感じた。



3つ目は、教師の子どもと向き合う姿である。授業時間に教師が子ども達にどのように接するかというのは、教育実習でもたくさん見てきた。悪いことはしっかり叱る、楽しく分かるように授業をする、みんなの意見をたくさん聞いて分かり合うなどである。今回の訪問では、一緒に大縄跳びの成功を大いに喜ぶ、ミュージックステーションを盛り上げるために体を張る、出来ないことや失敗を泣いていてもしょうがないと熱く語るなど、先生方が真剣に子どもと向き合っている姿が多く見られた。子どもにとって教師は、教科の先生というだけではない。大きな声を張り上げたり、優しく向き合ったりするだけが先生ではないことを改めて感じた。

#### 4. 今後の課題

今までの教育実習や、様々なところで行ったワークショップにおいて、その活動の評価をすることは全く無かった。今回、評価項目を設けて評価をしようとしたが、評価の項目や段階を性格に設定できず、あいまいなものになってしまった。今後授業をする際は、授業案を作る段階で評価の項目をいくつか具体的に挙げていきたい。

また、今回の訪問では研究授業や研究会が多くあり、「題材のねらいは何なのか。」「この題材やこの素材、この形態で子どもたちは、得るべきものを得るのか。」「図工は楽しいだけの教科なのか。」など、図工について深く考えさせられる機会が多かった。適当に考えてやらせておけば成り立つのが図工だと考えられがちだが、子どもは適当に作るのではない。自分の作る作品に向き合っている。手を動かしてなくても、どうしたら自分の思い通りになるか構想をめぐらしている。作りながらもバランス

を考えたり、納得できるようなものにしようとしていたりしている。できない時、すぐ教えるのではなく試させることで子ども自身が気付く。出来上がった作品からも、子どもの性格や気持がにじみ出るし、感想やうまくいった事などを聞けば意外な答えも返ってくる。今回は、図工が持つこのような良さや特徴を実感できた。これらを踏まえ、今後も訪問を続けて子どもに接する中でヒントを得ながら実践を行っていき、研究の参考にしていきたい。

## 教育実践総合研究 報告書

新潟大学大学院教育学研究科  
教科教育専攻美術教育専修

丸山 葉子

実施校：新潟市立内野小学校、同内野中学校

### 1. 応募動機

「軽度発達障害」という言葉が世間に認知され始めて間もない頃、「軽度の知的障害」と言われた中学生女子の家庭教師をすることになった。数年間その生徒の家庭教師を続けてきた先生は、「英単語は基本的に4文字以上覚えられない、文章問題は小学生レベルのものも解くことができない。例えば『100円のノートと50円の消しゴムを買って、500円出しました。おつりはいくらでしょう』といった問題は解けない。軽度の知的障害があるようだ」と言った。私が実際にその生徒の勉強を見始めると、彼女は大好きなモーニング娘。の名前は全員言える、文字は下手だが中学生に流行の折り方で手紙を折れる、編み物はできる等、一概に「知的障害」とは言えないことが分かった。私が達した結論は「知的障害ではなく、学習障害(LD)である」ということだった。そこで私は「軽度発達障害」「広汎性」「多動(ADHD)」といった言葉に興味を持った。

また美術科では新潟市内野町において「うちのDEアート」という地域密着型アートプロジェクトを隔年で行っており、大学3年次より内野中学校で約半年間選択美術の授業を受け持ち作品制作を行った。「内野」という町により密接に関わりたいと思うようになった。

その折、大学4年次に、「学習支援ボランティア」の募集校に内野小学校特殊学級があった。小学校と具体的に関わりを持ったことがまだ無かったので、内野小学校さくら学級へのボランティアを希望した。この期間は1年間であったが、その後も自分の意思でさくらへのボランティアを続けている。よってこの自分の経験を活かしたく、学校インターンシップを内野小学校にお願いした。

2005年度には、第3回「うちのDEアート」があり、再度内野中学校の選択美術を受け持つことになった。活動内容を全て自分たちで決め、中学校に打診し、5月から内野の風景を自分たちの視点で切り取る「切り絵」の授業を行うこととなり、こちらも学校インターンシップの活動とした。

### 2. 活動の概要

#### (1) 内野小学校

特別支援学級「さくら学級」1組(知的障害)教諭1名、介助士2名、週二回 9:00～13:30

9:15～9:30	1時間目、朝の会を行う。(児童登校はおおよそ9時程度まで)挨拶、月の歌、出席確認、先生のお話等。 司会は日直の児童が行う。挨拶や出席確認は歌や手遊びを交えて行う。補助が必要な児童には、適宜行う。
9:30～10:15	2時間目国語。「まいにちぶりと」(その日の時間割)を書く。先生からOKが出た後、自分でファイルに閉じる。連絡欄があり、これで保護者とのやりとりも行う。プリント記入後、各自国語や算数、作業などを行う。

	<p>国語：発達段階に応じてひらがな、カタカナ、漢字の練習をする。児童によっては日記を書く。文章を自分で考えるのが難しい児童は、前日の出来事などを聞き、こちらで下書きをしたものを清書させる。</p> <p>算数：足し算、引き算などが主。発達段階が高い児童は筆算、繰り上がり、繰り下がりのある計算など。文章題ができる児童はあまりいない。</p> <p>作業：字が書けない児童は、「小さい穴にビーズを入れる」「紐に穴のあいたブロックを通す」「知育玩具を使う」「カードゲーム」などの作業を行う。</p>
10:15～10:45	<p>休み時間。普通は20分だけの休み時間だが、そのときの児童の状態や予定などに合わせて延長する場合が多い。「プレイルーム」というすべり台やトランポリンがある教室で多くの児童は過ごす。教室に残ってままごとをしたり、本を読む児童もいる。プレイルームに常備されている遊具は、すべり台（2種類）、トランポリン、三輪車（大人気）、ボール大、ボール小、蛇腹状のトンネル等。先生方はこのときに交代で休憩を取る。</p>
10:45～11:30	3時間目。
11:40～12:15	4時間目。
12:15～13:00	<p>給食。給食当番は、それが可能な児童が行う。先生方が盛り付けをし、それをお盆に乗せて児童が運ぶ。</p> <p>偏食がある児童は、全てを最初から与えるのではなく、「これを食べたら次は●●さんが好きなもの」といったように、完食できるように食事が与えられる。</p>
13:00～13:30	<p>昼休み。</p> <p>13:30に1年生と低学年の一部が下校する。家庭の都合や児童の発達段階に依らず。</p>
13:30～14:15	5時間目算数。2時間目と同様プリント学習や、ビデオを見るなど様々。
14:30～	児童下校。家庭の都合でもう少し遅い場合もある。

## 1組（知的障害）

A児：1年生 染色体異常  
 B児：2年生 軽度発達障害、LD  
 C児：3年生 軽度発達障害  
 D児：5年生 知的障害  
 E児：5年生 軽度発達障害  
 F児：6年生 染色体異常  
 G児：6年生 ダウン症  
 H児：6年生 脳性麻痺（知的障害・肢体不自由）

## 2組（情緒障害）

I児：1年生 自閉症 明瞭な言語  
 J児：2年生 自閉症 明瞭な言語  
 K児：2年生 自閉症 寡黙  
 L児：2年生 自閉症 重度  
 M児：4年生 自閉症  
 N児：5年生 自閉症  
 O児：6年生 アスペルガー  
 P児：6年生 アスペルガー（不登校）

内野小学校では、軽度発達障害の児童が多く、本来ならば2組に行くはずの児童も人数の都合で1組に所属している。

私は大体9時前後に登校、昼過ぎまでボランティアに参加している。活動は、学習時の補助、児童との遊び、移動時の引率、交流学級への引率・補助、行事ごとの補助等である。それとは別に、2005

年は「造形クラブ」の外部講師を勤めた。



▲2005年運動会



▲造形クラブ



▲図画工作

#### 【学習補助】

大人数への指示が上手く聞けない児童や、集中力が途切れがちな児童について、一緒にプリント学習を行った。個別の指示はわかる場合が多い。多くが個別学習なので、マンツーマンで補助を行った。

#### 【児童との遊び】

「本を読んで」「カルタしよう」といった児童と一緒に遊んだ。また高いところに昇りたがる児童などは危険がないように遊ぶ際も気をつけていた。

#### 【引率】

所属する交流学級の授業と一緒に参加した。また学年ごとに写真撮影や音楽発表会の練習があるときには連れて行った。

全校朝会、卒業式などでは交流学級の並びに参加する児童について。大人数でパニックになったり大声が苦手な児童へは、耳を塞いだり「もう少し我慢しよう」などの声掛けを行った。

### 3. 成果と課題

実際の現場に参加したことにより、先生方の授業の手腕を拝見したり、保護者とのやりとりや児童の健康面への配慮を詳しく知ることができた。希望先が特殊学級（現特別支援学級）だったため、それに付随する施設（はまなす養護、教育センター等）についても知ることができた。近くにある学童保育ひまわりや、うちの桜園のお年寄りの方々とも交流することができ、学校内外と関わる機会が増えた。またそういった機関との連携を見ることができ、自分が教師になったときにどのように関わっていったらよいのかの指針にもなった。保護者の方々とお話する機会もあり、教育実習などではできない経験であった。

今年度は実際に自分が授業を受け持つことはなかったが、学級内では来年度図画工作の授業を何度か担当したいと考えている。

2006年はさくら2組の担当となり、週1回ボランティアに参加することになった。大学4年から続けてきたさくらへのボランティアも今年で最後となるが、悔いのないよう児童と関わり、先生方から様々なことを教わっていききたい。

### 4. 意見、要望

教育実習以外、機会がなければ卒業するまで現場と関わらない場合もある。対児童生徒は勿論のこと、実際に教員になったときに生きる経験として学校という機関がどのように動いているのか、どこと連動しているのかを幅広く知るためにも、学校インターンシップは今後も必要であると考え。だ

が実際には通勤手段や時間、受入校の状況により難しい場合もあるとわかった。私はたまたまつながりがあった市立学校で行えたが、附属長岡など継続的な勤務が難しい場所もある。もし可能であるなら、大学近隣の小中学校ともつながりを作れたら良いのではないだろうか。

また今年度から始まったものなので試行錯誤の段階だが、活動発表を大学院だけではなく教育人間科学部全体で学部生に対しても行い、教育への意識の高まりにもなればよいのではないだろうか。



## 「学校インターンシップ」実施概要（平成18年度）

No.	氏名	専攻および 分野・専修	実施校	指導教員 (大学、実施校)	活動の概要		
					教科等	内容	期間
1	柴田 雅子	学校教育・ 学校教育学	附属新潟中 学校	松井 賢二 中村 雅芳	進路指導	中学校における進路指導 の実践	7月 ～3月
2	堀 希代子*	学校教育・ 学校教育学	附属新潟中 学校	高木 幸子 逸見 東子	家庭科	生徒の関心・意欲を高め るための指導援助	5月 ～3月
3	邵 紅玉**	学校教育・ 学校教育学	新潟市立 小針小学校	相庭 和彦 知本 恵子		日本と中国の小学校教育 の比較研究	11月 ～2月
4	中村 美紀	学校教育・ 障害児教育	附属養護 学校	長澤 正樹 牧野 統	特別支援	養護学校特別支援教室の 運営・学習活動の実際を 経験する。	10月 ～3月
5	丸山 信昭	教科教育・ 社会科教育	附属新潟中 学校	児玉 康弘 倉澤 秀典		教育実践力の向上	4月 ～3月
6	竹内 善紀	教科教育・ 数学教育	附属新潟中 学校	山田 和美 渡部 智和	数学	中学校数学科における授 業と教材開発の研究	4月 ～3月
7	細井 俊明	教科教育・ 数学教育	新潟市立 小針中学校	和田 信哉 魚野 潤	数学	数学科の授業法の学習、 教員の補助等	5月 ～
8	杉山佐和子	教科教育・ 美術教育	附属養護 学校	丹治 嘉彦 牧野 統		養護学校における育・学 習活動の実際を経験す る。	1月 ～2月
9	相田 洋輔	教科教育・ 保健体育	附属長岡中 学校	山崎 健 山岸 力	保健体育	授業補助 教員になるための指導力 の向上	10月 ～3月
10	中川 俊	教科教育・ 保健体育	附属新潟中 学校	滝澤かほる 丸山 明生	体育	体育授業の観察・参加を 通して指導技術・知識を 深める。	12月 ～
11	福島 慎也	教科教育・ 保健体育	附属新潟小 学校	滝澤かほる 松原 利弘	体育	授業補助 修士論文データ収集	10月 ～3月
12	小山 裕敦	教科教育・ 保健体育	新潟市立 巻北小学校	大庭 昌昭 石山 博之		学習支援・補助	10月 ～3月

註1. 「活動の概要」は、活動開始時点において作成・提出する「『学校インターンシップ』申込書・活動開始報告書」による。従って、実際の活動内容との間に相違が存在する場合がある。

註2. \*は現職教員、\*\*は外国人留学生を示す。

# 平成 18 年度「学校インターンシップ」活動報告

## — 中学校における進路指導の実践 —

柴 田 雅 子

(新潟大学大学院教育学研究科学校教育専攻学校教育学分野)

(実施校：新潟大学教育人間科学部附属新潟中学校)

### 1. 応募動機・経歴

#### (1) 応募動機

私は、現在、主に中学生を対象とした学校教育の進路指導のあり方を中心に研究している。私は、生徒たちが意欲的に、そしてはつらつとした学校生活を送るためにも、自分の進路を考えさせる時間は重要であるとする。その背景には、私自身がこれまで高校進学、そして大学進学と目先の進路のことばかりを優先して学校生活を送ってきたため、将来の不安を抱きながら大学生活を送ってきたことがある。また周囲にも、同じような考えを持って大学生活を送っている、あるいは送ってきた友人は少なくない。将来の見通しが持てず不安を抱くのは大学生や社会人になってもあることだが、中学生でも同じことが言えるのではないかと、私はみている。将来の見通しが持てないことの原因として、個人の特性の違い、そして学校現場において進学指導に多くの時間をかけ、本来あるべき進路指導が行われていないことがあげられると思う。以上のことから、学校現場における進路指導の重要性を感じ、進路指導の現状を見直していきたいと考えたことが、大学院での研究の目的である。そして、今回の学校インターンシップを通じてその手がかりが得られればと思い、応募を決意した。

#### (2) 経歴

時期	実習名	実習先	期間
2004年9月(大学2年次)	観察参加実習	中学校	1週間
2005年6月(大学3年次)	春期教育実習	中学校	2週間
2005年10月(大学3年次)	秋期観察実習	中学校	2週間

### 2. 活動の概要

学校インターンシップでは、主に進路指導の授業を行うことをねらいとした。今回は中学1年生を対象に、進路に関する啓発的経験の活動の一つとして「職業調べ」を行い、レポートにまとめ、発表会を実施した。以下にそれらの概要について述べることにする。

#### (1) 「職業調べ」のねらい

人間は、職業生活を通じ社会と深く関わっており、どのような職業人生を送るかは、人生をどう生きていくのかということ非常に関連している。現代のように多様化する社会において、どの職業を選ぶか、あるいは、どんな人生を送るかということを考えてみると、たくさんの選択肢であふれるため、迷い悩むことも少なくない。そのような中で、生徒たちが職業の性格や特性を学び、それらを個人の能力・適性や価値と照らし合わせることは、社会と個人との関係を意識し、自分の生き方を考えるきっかけになる。実践校の第1学年では、すでに学級活動の時間で「キャリアガイダンス」として自己理解に関する授業を終えていた。それに続く課題として、個人と社会のつながりを学ぶ機会として「職

業調べ」がふさわしいのではないかと考えた。

### (1) 実践対象

N 県の中学 1 年生 (1 クラス、40 名)

### (2) 実践時期とその方法

2006 年 7 月上旬から 2007 年 3 月上旬にかけて実施した。また、本指導に入る前に、学級担任と数回に分けての打ち合わせと担当クラスの観察実習を行った。

### (3) 授業実践内容

指導の流れは、グループに分かれて、職業を調べ、レポートを作成し、最後にクラス内で発表会をさせている。

日時	実習事項	実践内容
2006.7.24 (月)	事前打ち合わせ (1)	○学校インターンシップ事業の主旨説明 ○学校インターンシップの活動内容の検討
2007.1.5 (金)	事前打ち合わせ (2)	○授業実践の依頼 ・授業実践の日時決め ・授業構想の提示
2007.2.2 (金) 1～5 限	観察実習	○担当クラスの生徒の様子を観察 ○授業のための事前アンケートの実施 ・アンケートの目的：生徒たちがどんな職業に関心をもっているのかを調べるためのものとなっている。
2007.2.13 (火) 1 限	授業実践 「職業調べ (1)」 (学級活動)	○グループレポートの作成 ・ねらいの確認：2 年後義務教育を終え社会と距離が近くなること、社会に出ること＝職業に就くこと、「職業」とは何か、を確認させた。 ・グループに分かれ作業開始：ホランドが分類した職業分類 (注参照) に基づき、グループを 6 つに分けた。職業名はあらかじめこちらから各グループに 10 個程度提示しており、その中から関心のあるものを選んで調べさせた。各グループ最低 3 つを取り上げるように指示した。 ・レポート内容：その職業の内容や特徴、中学を卒業してからその職業に就くまでの進路などを中心に、レポート用紙にまとめさせた。 ・参考資料の提示：主に『13 歳のハローワーク』、また、中学生や高校生用に職業調べのために作られたウェブ上のページをいくつか紹介した。
2007.2.16 (金) 終学活	事中指導	○次回までの作業の確認 ・職業名のチェック：各グループでまとめたレポートをクラス全体に公表し、それを見て関心を持った職業名にチェックとして、自分の氏名を記入させた。このとき、グループ間のバランスをとるために、各グループが調べた職業名に最低 1 つはチェックするように指示した。各グループの中で一番チェック数が多かった職業を 1 つ取り上げ、次回の授業で発表するまでの期間に、さらに詳しく調べてまとめるように指示した。
2007.3.5 (月) 1 限	授業実践 「職業調べ (2)」 (学級活動)	○クラス内発表会 ・ねらい：自分たちで取り上げた職業のほか、他のグループの発表も聞くことで、より職業に対する関心を持たせる。 ・発表形式：各グループ 5 分程度。 ○ホランドの六角形の説明 (注参照) ○まとめ ・要点：生徒たちに、社会に出るといことはたった一人で生きていくことではなく周囲の人間と支え合って生きていくこと、つまり、さまざまな職業同士が支え合って社会が成り立っていることの意味を理解させる。
2007.3.5 (月) 給食後	事後アンケートの 実施	○事後アンケートの実施 ・アンケートの目的：生徒たちの実践授業後の意見や感想を聞くとともに、進路意識の変化を調べるため。

### 3. 成果と課題

#### (1) 生徒のアンケート結果

(原文のとおりに掲載。○は比較的肯定的な意見、●は検討を要する意見として明記した。)

##### <代表的な意見>

- この学習は、私みたいに「どんな職業についたらいいのかな〜?」と考えている人にとっては、とてもためになったなと思いました。
- 私はCの慣習的な職業を調べました。そこでは、自分の知らなかった職業について、どうやったらなれるのかとか、みりよくとか、詳しく知ることができてよかったです。また、他の班の人が調べた職業の中でもたくさん興味のあるものがあつたので、将来、自分はどんな職業につくのかなど、少しずつ見通しが立てられるようになりたいです。とても勉強になりました。
- この学習のおかげで、前よりもさらに進路について関心が出た。このような学習をすれば、自分のしょう来の目標ができるので、その目標に向かって、行くやる気が出て、勉強等もやる気が出ると思うので、こういう学習、授業は広めて行くべきだと思う。
- 今まで知らなかった職業を知ることができてとても良かったです。私の職業は学習内容外でしたが、職業を研究する方法が身についたと思います。
- 私になりたいと思う職業は、沢山あって、まだしぼれていないのですが、今回の授業で、これから先、自分がどういう風に生きていきたいのか、ということをよく考えるようになりました。自分のやりたいように、自分が一番輝ける職業につきたいと思います。ありがとうございました。
- チェック数の多かった1つではなく、自分が調べたものをとことん調べて1人ずつ発表したほうが良いと思った。
- もっと調べる時間がほしかった。

##### <レポートより抜粋>

- 専門用語を使うとか、文系の人が多いとか、この職業を調べてみて今まで興味のなかった仕事のことを詳しく知ることができました。

#### (2) 成果と課題

##### <成果>

##### ・進路・職業選択への関心の高まり

事後アンケートの集計結果、「たいへん意欲的に取り組んだ」「まあまあ意欲的に取り組んだ」を合わせると、全体の約85%がそのように答えている。感想からも、生徒たちが意欲的に取り組んだ姿勢がみえる。今回は、自分が将来就きたい職業を調べ、それをかなえるための進路を考えるというよりも、「職業調べ」を通じて社会や自分の将来の関心を抱かせるきっかけ作りに重点をおいた。その点に関しては、成功したと思われる。なかには、全く関心のなかった職業名や職業分野への関心が高まった生徒や、進路を考えるときの方法を学ぶ機会になった、と回答する生徒もいた。

##### <反省点>

##### ・時間数の不足

実際に私が担当した時間以外でも、学級担任の協力を得てレポートをまとめる時間を作っていたが、それでも時間が足りなかった。重点ポイントをより明確に説明し、作業を予想される時間配分と照らし合わせた上で進めていく必要がある。

##### ・授業のすすめ方

こちらで一方向的にグループ分けをしてしまったので、希望職業を調べたかったという意見もいくつかあがった。生徒の希望する職業でグループ作りをして発表へとつなげる方法でも職業に対する関心は抱かせること

も可能だと考える。グループ活動ではなく、個人活動でとことん調べてみたかったとの意見も上がった。作業への取り組み方に関しては検討し直したい点が多く存在する。

#### <課題>

反省点を検討すると、授業方法や教材研究の点で今後も研究していかなければならない点がある。以下にはその中でも主な課題として述べた。それらをふまえて、中学校における進路指導のあり方を見直し、今後の研究に生かしていきたい。

#### ・意欲的に取り組むことができなかった生徒への指導

意欲的に取り組むことができなかった生徒が全体の15%いた。彼らにとって必要なことは、導入部の動機づけだと考える。これは今回の題材や学級活動の授業のほかでもいえることだが、生徒たちに「なぜ今この学習が必要なのか」を植え付けることをあまいにしては授業全体がぼんやりしてしまう。生徒たちが単に作業をこなすのではなく、意欲をもって取り組むことができるよう、教師側の工夫が必要だと考えさせられた。

#### ・進路学習の評価

生徒の進路意識や進路発達がどの程度促進されたのか評価する方法を検討していかなければならない。今回のような「職業調べ」の授業のほかにも、さまざまな進路意識を促進する授業は多く行われているので、それらを参考にしながら進路学習における評価の方法を見つけ出したい。

#### 4. 学校インターンシップにおける希望

生徒たちの指導や援助を進めていく上で、生徒たちの実態の把握が不可欠だと考えている。そのためにも、もっと生徒たちと触れあう機会があればさらによかったと感じている。また、もっと学校行事や指導計画に沿った指導を展開していくためにも、実践校の実態をよく把握すべきだと考えている。個人で授業実践を重ねていくだけではなく、いろいろな先生方の実践や授業展開を見て自分のものと比較、検討できたらよいと思う。このような点から、実践校に密に関わる環境が一層整うことを願っている。

#### 5. 実践授業で活用した文献・URL

村上龍 2003 『13歳のハローワーク』 幻冬舎

『職業図鑑』 <http://www.aaaaaa.co.jp/job/>

『夢L@nd』 [http://www.i-n.co.jp/kyouiku/yume/yume\\_top.html](http://www.i-n.co.jp/kyouiku/yume/yume_top.html)

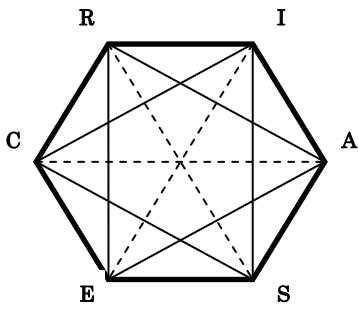
『未来の職業を探せ!』 <http://kids.gakken.co.jp/campus/shinro/index.html>

『PASカード ほーむページ』 <http://www.toshobunka.co.jp/pascard/>

---

#### (注) ホランダの職業分類

ホランダ (Holland, J.L) は人の性格を6つの基本タイプに分け、その6つのタイプを六角形上にあらわしそれぞれの関係性を明らかにしながら、キャリア形成は個人の性格と仕事環境との相互作用の結果からなされるとした。6つのタイプは、六角形の周りに時計回りで順番に、R-I-A-S-E-C と配置される。この6つの性格タイプの相互関係に関してホランダは、2つのタイプ間の距離が短くなればなるほど、その2つの類似性は高まるとしている。



職業の分類	この分類の特徴
<b>R</b> =Realistic (現実的)	機械や物体を扱って、具体的な活動をするのが好き。
<b>I</b> =Investigative (研究的)	研究や調査のような活動をするのが好き。
<b>A</b> =Artistic (芸術的)	音楽、美術、文学など芸術的な活動をするのが好き。
<b>S</b> =Social (社会的)	人に接したり、奉仕的な活動をするのが好き。
<b>E</b> =Enterprising (企業的)	新しい企画を考えたり、組織を動かすような活動をするのが好き。
<b>C</b> =Conventional (慣習的)	定まったやり方にしたがって、同じことをくり返す活動をするのが好き。

# 平成 18 年度「学校インターンシップ」活動報告

## ——味覚教育に関する授業検討——

堀 希 代 子

(新潟大学大学院教育学研究科学校教育専攻学校教育学分野)

(実施校：新潟大学教育人間科学部附属新潟中学校指導教員：逸見東子教諭)

### 1. 応募動機

学校インターンシップの応募動機は以下の2点であった。1点目は、研究内容が中学校家庭科での授業開発であるため、実践を行いながら検証をすすめる必要性があったからである。授業の主役である生徒たちの生の姿や反応を確かめることによってさらに授業の質を高めることができると考えた。2点目は、中学校の現職の教員として、同じ教科である教員からの指導を受けたいという思いからである。中学校の家庭科教諭は大規模校で在籍数2名という学校もみられるが、ほぼ1名の在籍となっている。私自身、最近の9年間は家庭科教諭が1名という中で勤務しており、授業の質を高めていくために、授業の相談や検討をする機会をできるだけ多く得たいと考えていた。今回の学校インターンシップはその意味でも貴重な機会と考え、応募することとした。

### 2. 活動の概要

活動は4月14日(金)～1月29日(月)の期間、計15回の訪問を実施した。

回	訪問日	対象学年・学級	活動の内容
1	4月14日(金)		活動内容の打ち合わせ・年間計画作成
2	5月12日(金)		味覚識別官能検査の実施方法及び食に関するアンケートの項目についての検討
3	5月26日(金)		味覚識別官能検査の実施方法及び食に関するアンケートの項目についての検討
4	7月7日(金)		味覚識別官能検査の実施方法及び食に関するアンケートの項目についての最終検討
5	7月14日(金)	選択家庭科 2・3年生(39人)	味覚識別官能検査及び食に関するアンケートを実施
6	10月13日(金)	1年2組	家庭科授業補助
7	10月19日(木)	1年2組	家庭科授業補助
8	10月25日(水)	1年2組	家庭科授業補助
9	1月17日(水)		授業打ち合わせ・指導案検討
10	1月18日(木)	1年3組	研究授業①「五感を使って味わう」
11	1月19日(金)	1年1組	研究授業②「五感を使って味わう」
12	1月22日(月)	1年2組	研究授業③「五感を使って味わう」
13	1月23日(火)	1年1組	研究授業④「味覚」

14	1月25日(木)	1年3組	研究授業⑤「味覚」
15	1月29日(月)	1年2組	研究授業⑥「味覚」・反省会

### 3. 成果と課題

#### (1) 味覚識別官能検査による味覚の実態把握

中学生の味覚に関する実態を把握するため選択家庭科履修者39人(男子6人、女子33人)を対象に味覚官能検査を実施した。先行研究、文献<sup>1)~5)</sup>を参考に五大基本味(甘味、塩味、酸味、苦味、うま味)について調査した。先行研究から正解率はほぼ60%と予想されたが、結果は酸味の正解率が92%、うま味が44%であった(図1)。この結果は、新潟市内の公立中学校で実施した味覚官能検査の結果ともほぼ同様の傾向を示しており、中学生の味覚の実態を把握できた。

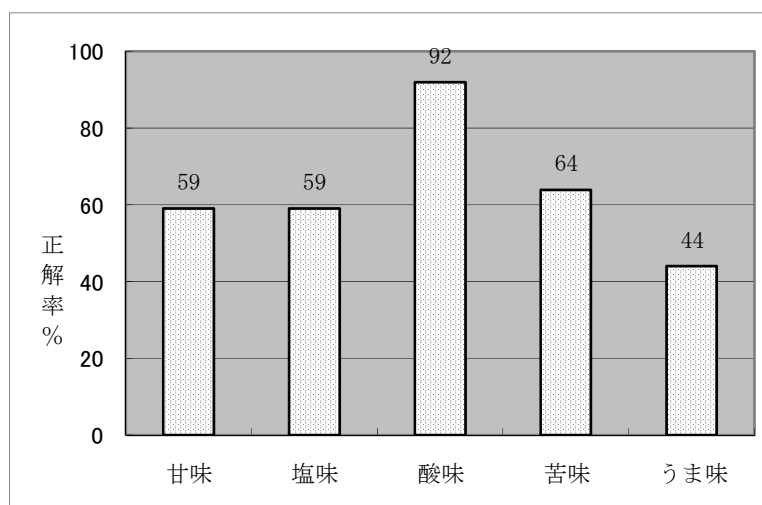


図1 味覚識別官能検査正解率 (附属中 39人)

#### (2) 食に関するアンケートによる食意識と食習慣の実態把握

選択家庭科履修者40人(男子6人、女子34人)を対象に中学生の食生活における食意識と食習慣に関するアンケートを行い、新潟市内公立中学校で実施したアンケート結果と合せて、食意識と食習慣の実態を把握した。

調査結果を分析した結果、食意識に関する項目では、「ピリ辛味はおいしいと思う」、「はやっているものは一度は食べてみたいと思う」などの刺激味を志向する傾向がみられた。食習慣に関する項目では「ファーストフードをよく利用する」、「スナック菓子をよく食べる」などのファーストフードを志向する傾向と「毎日色の濃い野菜を食べる」、「油をひかえめにしている」などの健康を志向する傾向がみられた。中学生の食生活の問題となっている栄養の偏りや肥満につながる実態がみられた。

#### (3) 味覚教育に関する授業の検討

##### ① 五感を使って味わい言葉に表す方法の検討

五感を使って味わわせるための方法を検討した。りんごの見た目・匂い・味・食感について、時間をかけて見たり、匂いを嗅いだり、味わったり、噛むという活動を取り入れ、それぞれの活動で得た実感をことばで表現させた。生徒は初めての体験に興味をもって取り組み、どんなことばで表すことができるのかを周りの生徒と意見交換をしながら考えていた(表1)。



表1 りんごの見た目、匂い、味、食感についてのことば（3学級 120人）

		りんごの見た目、匂い、味、食感についてのことばの例	計
見た 目	形	丸い、いびつな丸、完全な球体ではない、かたむいている、ごろごろ、コロコロ、	11
	色	赤、赤と緑、黄色、赤と黄のグラデーション、うすい黄緑と赤、青い、色がすっぱい、真っ赤じゃない、きれいな赤、赤色えんぴつで軽くぬった感じの色、色あせている、ヘルシーな色、まるで太陽のよう	14
	質感	つるつる、つぶつぶがある、はんでんがある、はりがある、	4
	光沢	表面につやがある、少し光沢がある、ピカピカ、テカテカ、テカっている	5
	その他	かよわそう、優しい、安定している、うまそう、あまそう、新鮮、成長途中、熟している、熟していない、食べられる、ミツが少なそう、ソフトボール位の大きさ、くきが固そう、べたべたする、へたがついている、たてじま	16
匂 い	甘い、透き通った感じの甘い匂い、からっとしたような甘さの匂い、ちょっと酸っぱい、アルコールっぽい、蜜の匂い、シンナー、洗剤のような匂い、農薬、消臭剤の匂い、注射の匂い、段ボールの匂い、青臭い、草の匂いが少しする、木の匂い、花の匂い、みずみずしい感じの匂い、さわやか、爽快な匂い、つんとした感じがある、青森を思い浮かべてくれる匂い、独特のうまそうな匂い	34	
味	甘酸っぱい、しつこくない甘味、自然の甘味、最初は甘い後味甘酸っぱい、甘すぎない、わずかに苦い、しぶい、かんでいるともっと甘くなる、中心に近づけば近づくほど甘くなる、食べていくうちに甘くなっていってすっきりとする、かんだ味に出てくるみつに甘味が含まれている、あっさり、みずみずしい、フルーティー、すっきりさわやか、ジューシー、	32	
食 感	しゃくしゃく、しゃりしゃり、しゃきしゃき、もつさり、さくさく、カリカリ、ガシュ、ムシャムシャ、ベタベタ、ごりごり、しんなり、水分多い、固い、かみごたえがある、見た目よりやわらかい、歯ごたえがある、かたい氷をかんだ感じ、口に入れるととけるような感じ、歯が浮いた感じ、歯が入り込む、かみ続けるとすじっぽいものがある、しばらくかみ続けるとしゃりしゃり感はうすくなり、食感は無くなる、ずっとかんでいるとフニャフニャする、「しゃりっ」といくけど、噛みきる時は「ガリッ」って感じがする、	36	

見た目では、色や形などの他、「熟している」「新鮮」など生鮮食品だけにみられる表現がみられた。匂いでは食品そのものの匂いだけでなく、「農薬」「段ボール」「木の匂い」などの表現がみられた。これは時間をかけて匂いを分析したことによるのではないかと考えられる。また、食感では、「ずっとかんでいるとフニャフニャする」「しばらくかみ続けるとしゃりしゃり感はうすくなり、食感は無くなる」など口に入れた時の食感から噛んだ後の食感、時間が経過した後の食感についても表現していることがわかった。このことから時間をかけてりんごを咀嚼した結果、味や食感が変化していることを感じ取っていたことが窺えた。今回の授業を通して、五感を使って味わうときには時間をかけることやことばで表現することで今まで意識していなかった食べ物の要素（見た目・匂い・味・食感）に気づくことがわかった。

## ② 五大基本味を知り役割を考える方法の検討

五感（視覚、嗅覚、味覚、触覚、聴覚）のうち、味覚に関する授業を行った。五大基本味（甘味、塩味、酸味、苦味、うま味）の水溶液を味わい、その役割について考えた。

これまで生徒は五大基本味を個別で味わった経験がないため、おそろおそろ味わっていた。特に苦

味は拒否反応を示す生徒が多く、印象に残る体験だったようである。この経験から五大基本味の特徴は理解できていた。しかし、五大基本味の役割（甘味はエネルギーになるなど）を理解する指導過程としては、五大基本味の役割を理解できるよう生徒一人ひとりがその役割について予想をたて、確かめる活動を取り入れるなどの工夫が必要であると感じた（図2）。

- ・舌のどこでその味を感じられるかを考えることによってその味がよく分かりました。
- ・味はおいしいのは少ないことがわかった。・5つの味の違いがわかるようになった。
- ・味一つ一つが自分の好きな味ではなくても大切な役割を持っている。
- ・自然界で危険だと思うものは少なくても感じられる。
- ・私がいつも食べているものはいろいろな味がまざって感じていること。
- ・食事をしているときにどこで味を感じるか調べていきたい。
- ・調理実習でもどのくらいの調味料を入れればいいのかなど考えていきたい。

図2 生徒の振り返り記述（授業後）

#### 4. 「学校インターンシップ」制度に関する意見、要望

今回の「学校インターンシップ」では、これまでの現職としての勤務では経験できないことが多くあった。同じ教科の教員と相談して授業を構想し実践できたこと、またお互いの授業を観察しあうことでどのような点が不足していたのか認識できたことである。さらに研究では味覚教育の授業構想内容を授業実践を通じて確認しながら進めることができたのは大きな収穫であった。このような制度は配属校との調整で予定通りに進まない点もあるが、有効に活用していけば研究を進める上でも有益であると感じた。

#### 5. 参考文献

- 1) ジャック・ピュイゼ：子どもの味覚を育てる，紀伊国屋書店. 2004
- 2) 鈴木智子：中学生における食環境と味覚に関する一考察，上越教育大学修士論文. 2005
- 3) 古川秀子：おいしさを測る，幸書房，p. 5-9. 1994
- 4) 山野善正，山口静子：おいしさの科学，朝倉書店，1994
- 5) 瀬戸賢一：ことばは味を超える，海鳴社. p. 27-58. 2003

## 平成 18 年度「学校インターンシップ」活動報告

——特別支援教室における実践——

中 村 美 紀

(新潟大学大学院教育学研究科学校教育専攻障害児教育分野)

(実施校：新潟大学教育人間科学部附属養護学校)

### 1. 応募動機・経歴

#### (1) 応募動機

今回、学校インターンシップに応募した動機は、通常学級に在籍する特別な教育的ニーズのある児童に対する指導の場で実習することでその実際を学び、また、実践力を身に付けたいと考えたからである。

文部科学省の「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国調査」(文部科学省, 2002)では、LD、ADHD、高機能自閉症を含む特別な教育的ニーズのある児童生徒数は、約6%の割合で通常学級に在籍する可能性のあることが示された。これを受け、文部科学省は、「今後の特別支援教育の在り方について(最終報告)」(文部科学省, 2003)や「小・中学校におけるLD、ADHD、高機能自閉症の児童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライン(試案)」(文部科学省, 2004)を示した。そして2006年4月より、これまで通級指導教室の対象外であったLD、ADHDのある児童生徒も、特別支援教室の対象となった。このように、近年、軽度発達障害も含めた特別な教育的ニーズのある児童生徒に対する教育の在り方に焦点が当てられている(馬場・繪内, 2006)。今後は、特別な教育的ニーズのある子どもに対応した指導を行うことができる教員の養成が求められる。

筆者はこれまで、N大学において行われている、特別な教育的ニーズのある中学生・高校生を対象にしたグループ活動(チャレンジルーム)(古田島・長澤, 2004)や、「学習支援ボランティア」に参加するなど、実践力の向上を目指してきた。

そこで今回、N大学附属養護学校(以下、養護学校)で行われている特別支援教室での実習を通して、更なる実践力を身につけたいと考えた。養護学校の特別支援教室は、N市立小学校の通常学級に在籍する特別な教育ニーズのある児童に対し、その障害特性に応じて特別の指導を行う教室である。通常学級に通う特別な教育的ニーズのある児童への実際の支援を見たり実践したりしていく中で、支援の方法を学びたいと考えた。

#### (2) 経歴

筆者は、N大学教育学研究科に通う大学院1年次学生である。学部生から障害児教育専修に所属し、特別な教育的ニーズのある子どもへの教育について学んでいる。

学部生時代の実習歴は、以下の通りである。必修の「教育実習」では小学校1回、養護学校2回、「観察実習」では小学校1回、選択の「入門教育実習」では幼稚園、「学習支援ボランティア」では小学校にそれぞれ参加した。

教員免許については、小学校教諭1種免許状、幼稚園教諭2種免許状、養護学校教諭1種免許状を取得している。

## 2. 活動の概要

養護学校で行われている特別支援教室のグループ指導に参加した。また、10月に行われた養護学校特別支援教育研究会の公開授業に、補助として参加した。

### (1) 特別支援教室の概要

① 授業内容：授業は、ソーシャルスキルトレーニングを中心に行われた。なお、隣接した部屋にモニターが設置され、保護者が授業の様子を観察した。

② 児童：小学生 11 名が参加していた。低学年グループに 4 名、中学年グループに 3 名、高学年グループに 4 名、個別指導に 1 名が参加した。

③ 授業時間：各グループ週 1 回、1 時間行われた。曜日は、1 ヶ月毎に変わった。授業の流れと各活動のねらいを表 1 に示した。

表 1. 授業の流れと各活動のねらい (低学年グループ：例)

内容	活動のねらい
1. はじめの会 ・係決め ・あいさつ	◎自分で係を決めることができる (話し合っ て決めることができる)。
2. いろいろな遊び ・歌遊び ・リズム遊び	◎遊び方を理解し、友だちと楽しく歌遊 びができる。
3. ゲーム「ウノ」	◎ルールを理解し、楽しく遊ぶことが できる。
4. お茶会	◎お茶を飲み、おしゃべりをしながら楽 しく過ごすことができる。
5. 終わりの会 ・振り返りカード記入 ・あいさつ	

④ スタッフ：特別支援教室担当職員が MT として授業を行った。その他、ST として、養護学校職員、N 大学長期研修生、大学院生、学生ボランティアが参加した。ST は、1 回の活動で 2～4 名参加した。

### (2) インターンシップの概要

#### ① 活動内容

1 回の活動は約 2 時間であった。活動の流れを表 2 に示した。授業では、ST として参加した。ST の役割は、モデルを示す、個別に褒める、集中できない児童へ声を掛ける、記録 (写真撮影) などであった。

#### ② 活動期間

2006 年 9 月から 2007 年 3 月まで、週 1 回程度の割合で参加した。

表 2. 活動の流れ

時間	内容	詳細
13:30	授業事前ミー ティング・授業 準備	ビデオセット、教材の準備、 授業ミーティング (活動内 容・留意点などの確認)
14:00	授業開始	ST として参加
15:00	授業反省会・後 片付け	ビデオ・教材の片付け、授業 反省会 (活動内容・かかわり 方などの振り返り)

### 3. 成果と課題

#### (1) 成果

今回、特別支援教室での実習を通して、以下の3点について成果があった。

まず1点目は、支援の方法について学ぶことができた点である。実際に子どもにかかわったり現職教員による支援を見たりすることで、褒め方や注意の促し方、またそのタイミングを学ぶことができた。例えば、不適切な行為があった場合の注意の促し方については、次のようなことを学んだ。

養護学校の特別支援教室では、失敗して叱られるよりも成功して褒められる経験を重視し、指導の基本として「怒らない、叱らない、注意しない」ということが掲げられていた。そこで、不適切な行為があった場合、その行為に注目せず、不適切な行為が不適切でない行為に変わった瞬間に褒めるということを全員で共通理解し、徹底して行った。不適切な行為に対して、ただ注意するのではなく、子どもの実態に合わせて、このような支援の方法もあるということを知ることができた。

2点目は、授業の構成、進め方、環境設定など特別支援教室の運営について学ぶことができた点である。授業の構成、進め方については、1回1時間の授業の中に様々な活動を取り入れ、テンポよく授業を進めていた。このような進め方により、子どもたちはより多くの活動を体験することができ、また、多くの成功体験をすることができたのだと思う。また、環境設定については、子どもが失敗体験をしないようにする工夫が多くなされていた。特に、「約束カード」による支援が多かった。例えば、ゲームをする際「負けても怒らない」と書いたカードを見せて事前に約束する、「席を立てていいですか」カードを子どもが希望する枚数だけ配る、「あいさつの仕方」をカードで示しておくなどである。このようにカードで示しておくことで、子どもたちは常に確認しながら活動に参加することができていたと思う。また、ゲームの勝ち負けに極度にこだわってしまう子には、その子が勝てるように促すなどの支援もしていた。

3点目は、特別支援教室の在り方について、より深く学ぶことができた点である。LD、ADHDなど、軽度発達障害のある児童が対象の特別支援教室の取り組みはまだ始まったばかりであり、まだ試行段階といえる。研究会の公開授業では、100人近くの人が参観に訪れ、その関心の高さをうかがうことができた。このような中で特別支援教室で実習できたことは、大変貴重な経験であり、また、今後の特別支援教室の在り方について考える上でとても重要であった。

#### (2) 今後の課題

今回の特別支援教室での実習では、様々なことを学ぶことができた。また、いくつかの課題も残った。

1つ目は、特別支援教室の在り方について、今後も検討していく必要があるということである。今回は特別支援教室での子どもへの指導にかかわったが、実際の運営には、保護者や学級担任との連携、目標の設定、評価の方法など、様々な問題があると考えられる。今後も、ボランティアへの参加や文献を調べるなどして、特別支援教室の在り方について学んでいきたい。

2つ目は、更なる実践力の向上である。これは常に求めていかなければならないものである。今後も積極的に現場とかかわっていき、実践力の向上に努めたい。今回のような軽度発達障害のある子どもへの教育だけでなく、通常学級や特別支援学校の支援についても学んでいきたいと思う。

### 4. 「学校インターンシップ」の制度に関する意見、要望

現場で長期間にわたり実習できたことは、とても有意義であった。特に今回は、近年注目されてい

る特別支援教育の現場で実習することができ、勉強になった。このように、教職に就く前に現場で実習できることは、現場を知る上でも、自身の実践力向上のためにも、大変重要であると思う。

要望を1点述べる。学校インターンシップのように、教職に就く前に現場で実習できることは、教職を目指す学生にとってとても大切なことであると思う。よって今後、学校インターンシップに参加できる学年を拡大するなどして、より多くの学生が現場での実習を経験できるようになるとよいのではないかと思う。

## 5. 文献

馬場広充・繪内利啓 (2006) LD・ADHD・高機能自閉症等のための実現性のある特別支援教室(仮称)の在り方に関する一考察—モデル教室(すばる)の実践と利用者である保護者・担任のアンケート調査から—。LD研究, 15(2), 234-244.

古田島恵津子・長澤正樹 (2004) 軽度発達障害のある中学生グループ支援とその有効性—参加者本人・保護者への意識調査の結果分析から—。日本LD学会第13回大会発表論文集, 314-315.

文部科学省 (2002) 通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国調査.

文部科学省 (2003) 今後の特別支援教育の在り方について(最終報告)。

文部科学省 (2004) 小・中学校におけるLD、ADHD、高機能自閉症の児童への教育支援体制の整備のためのガイドライン(試案)。

# 平成 18 年度「学校インターンシップ」活動報告

— 附属新潟中学校における一年間の活動を通して —

丸 山 信 昭

(新潟大学大学院教育学研究科教科教育専攻社会科教育専修)

(実施校：新潟大学教育人間科学部附属新潟中学校)

## 1. 応募動機・経歴

「学校インターンシップ」への応募動機として、以下 2 点あげる。

1 点目に教職に就く上で必要な教育技術の向上である。

2 年間の修士課程後の教職に就くことを目指し、教育現場との継続的なかかわりを通して教員としての資質の向上を目的としてきた。特に生徒理解や授業技術等は大学における研究活動を補完するものとして大きな位置を占めると考えた。

2 点目に社会科教育における授業開発技術、教材研究である。

社会科教員として必要な教科教育技術、教材開発について指導の実際に継続的に触れることで、その資質および能力を向上させることを目的とした。

経歴に関しては、学部 2 年次に新潟大学教育人間科学部附属新潟中学校（以下附属新潟中学校）、主免教育実習として学部 3 年次に春期 2 週間を附属新潟中学校、秋期 2 週間を新潟市立黒埼中学校において行った。副免教育実習として、学部 4 年次春期 2 週間を新潟大学教育人間科学部附属新潟小学校において行った。その他の活動経歴として、学部 1 年次には「教育実践体験研究」として、十日町市立水沢中学校の学校林活動への参加を行い、学部 3 年次後期に「放課後学習チューター」として、学部 4 年次および大学院 1 年次に「学習支援ボランティア」として新潟市立黒埼中学校において活動を行った。

## 2. 活動の概要

平成 18 年 4 月中旬から、平成 19 年 3 月 9 日まで、基本的に毎週金曜日に附属新潟中学校において活動を行ってきた。主な活動の内容は、授業観察や選択社会科における補助等である。授業以外の活動では、配属学級である 1 年 1 組に入り、学級活動や清掃、給食等へ参加して生徒とかかわりを持った。その他、放課後や夏期長期休業中などは部活動指導に入り、生徒とともに汗を流した。また、平成 19 年 3 月 12 日および 3 月 14 日には 2 年 2 組において 2 時間の研究授業を行った。

## 3. 成果と課題

まず成果として考えられることを以下 2 点あげる。

### (1) 授業技術向上への寄与

1 年を通して社会科の授業観察や選択社会科の補助に入ることで、社会科授業における教育方法技術、教育内容開発についての理解が深まったと考えられる。特に日常の授業観察においては、研究授業以外の単元における魅力ある教材の開発と提示について学ぶことができた。また、選択社会科の補助に入ることで、生徒の調査活動を支援して中で主体的な活動を促すための生徒への働きかけなどに

ついて考えることができた。

加えて、インターンシップ後半には2時間の研究授業を実施し、教材研究を重ね授業を実際に行うことができたことは大きな収穫となった。授業における反省点・課題を活かし社会科の授業開発研究の糧としたい。なお、研究授業における指導計画と授業風景については本節末に掲載する。

## (2) 生徒理解について

授業に関しては、学年の発達段階に応じて発問や教材提示の方法に工夫が必要なことを改めて実感した。また、授業以外の部分でも配属学級での活動を通して、どのように生徒に働きかけていくべきなのか一年間の活動を通して考えることができたといえる。

次に課題として考えられることを2点あげる。

## (3) 修士研究とのつながりについて

本来であればインターンシップにおいては、修士論文研究とのつながりを持たせた内容の活動を継続的に1年間行う必要があったが、修士論文研究の方面が素材研究の段階にとどまっていたので、つながりを持たせる活動ができなかったということである。研究授業においては当初、修士研究にあわせた授業開発を目指したが、1時間目の授業の展開により2時間目を修正する必要があり、当初の目的を達成することができなかった。

## (4) 授業観察にとどまった点

活動の主な内容は授業観察であり、それを通して授業方法や教育内容について一定の成果を得ることはできたと考えられるが、授業の実際をもう少し経験するべきであったと考えられる。しかし、大学での研究活動等も重なり日程的に難しい状況が続いた。

以上、インターンシップにおける成果と課題であるが、以下に3月に行った研究授業の指導計画を掲載する。資料に関しては紙量の関係で割愛する。

## 中学校地理的分野学習指導計画

### (1) 単元名 「発展途上国の人口問題を考える」(全2時間)

### (2) 単元のねらい

発展途上国における爆発的な人口増加とそれがもたらす影響・問題点を理解するとともに、その根本的な要因を追求することで問題の対策を考える。

### (3) 教材について

2006年2月には世界の総人口は65億人を超え、今現在も一秒に約3人の割合で増え続けている。特にアジアやアフリカの発展途上国における人口増加は顕著であり、食糧問題や貧困の問題が懸念されている。しかし、発展途上国の人口増加の背景には、産業構造の問題(労働力の必要性)や、将来の生活の安定のための子供の必要性(乳児死亡率の高さ)などが存在し、抑制することは容易ではない問題である。また、先進国と発展途上国の貿易の不均衡により、自給自足の生活が崩れ、その結果として人口増加と食糧不足による貧困が起こったという見方もある。一方で日本をはじめ、ヨーロッパなどの先進諸国では少子高齢化社会が進み社会福祉などの課題が表面化している現状である。このよう



に人口問題は地域や社会によって多様ではあるが、将来の人々の平和で健康な社会生活のためには解決しなくてはならない重要課題であるといえる。

本単元では第1次で、増え続ける世界の人口に目を向けていき、その中でも発展途上国地域において人口爆発が起きていることを理解する。また、発展途上国における人口の増加の要因や、それにもなる影響や問題点を諸資料をもとに理解する。そして、第2次では発展途上国の人口問題の対策に目を向ける。発展途上国の人口増加の原因、影響には先進国との関係が存在していることに気付き、どのように解決していけばいいのか事例を通して考察していく。

#### (4) 単元の指導構想

第1次「増え続ける発展途上国の人口問題の原因を理解する。」

第2次「発展途上国の人口増加の問題と対策を考える。」

#### (5) 単元の展開

##### 1 時間目

	発問	教授・学習活動	資料	生徒に定着させたい知識
導入	<ul style="list-style-type: none"> <li>世界の人口はどのくらい増えてきたらどうか。</li> <li>世界の人口は一秒間にどのくらい増えているだろうか。</li> <li>これから2時間は、この増え続ける人口問題について考えていきます</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>T: 投げかける</li> <li>S: 予想する</li> <li>T: 投げかける</li> <li>S: 予想する</li> <li>T: 説明する</li> <li>・テーマ提示</li> </ul>	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・30年間で15億人も増えている。100億人に達する日は遠くない。</li> <li>・(予想する。)一秒間に30人、100人……。人口時計によると、世界の人口は1秒間に3人くらいの割合で増えている。</li> </ul>
展開	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どのような地域で人口が増えているのか分析しよう。(白地図に色分けをする。)</li> <li>・人口増加が起きている国はどのような国か。</li> <li>・なぜ発展途上国で人口増加が起きているのか。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>T: 発問する</li> <li>S: 調べる</li> <li>T: 発問する</li> <li>S: 答える</li> <li>T: 説明する</li> <li>T: 発問する</li> <li>S: 調べる</li> </ul>	2 3 4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アフリカやアジア、ラテンアメリカで特に人口増加が急速に進んでいるといえる。</li> <li>・人口増加が起きているのは主に開発が遅れている発展途上国と呼ばれる国であるといえる。</li> <li>・発展途上国では先進国との貿易により、自給自足の経済が崩れ、コーヒーやカカオなど商品作物栽培が主な産業となった。一時は豊かになり、人口も増えたが、やがて増えた人口を養うための食料が不足し始め、生活必需品などを購入するには、商品作物の増産しか方法がなく、より多くの生産をあ</li> </ul>

				げるため子どもを労働力として必要としている。
終 結	・人口時計によると授業開始から○人増加しました。	T：投げかける		・人口は刻々と増え続けているのだな。このまま増え続けることで問題はないのだろうか。

## 2 時間目

	発問	教授・学習活動	資料	生徒に定着させたい知識
導 入	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人口時計によると前時よりも○人増えていました。</li> <li>・なぜ、発展途上国で人口増加するのか、前時のエピソードからまとめてみよう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>T：投げかける</li> <li>T：発問する</li> <li>S：まとめる</li> </ul>	4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・二日間でも世界の人口はかなり増えているのだ</li> <li>・発展途上国の人口増加の要因の一つは先進国との貿易である。</li> </ul>
展 開	<ul style="list-style-type: none"> <li>・世界の人口がそのまま増えすぎるとどのような問題が起こると考えられるだろうか。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>T：発問する</li> <li>S：答える</li> </ul>	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一人当たりの耕地面積が減少しているから、いずれは食糧問題や飢餓が起こるのではないか。その結果食料をめぐる紛争が起こり、社会不安に陥る恐れがある。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発展途上国の人口抑制をすべきだろうか。なぜですか。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>T：発問する</li> <li>S：答える</li> </ul>	6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・抑制する必要がある。食糧問題が起こり飢えている人がいる現状もあるからである。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・資料と、おにぎりとおにぎりの体験を通して世界の穀物需給について分かったことを説明しなさい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>T：発問する</li> <li>S：調べる</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・世界では多くの人が飢えて苦しんでいる。しかし、世界の食糧生産は人口増加とともに増えている。食料が均等に分配できないのは、先進国などが肉を作るために穀物が飼料として大量に消費されていたり、先進国と発展途上国の間で食糧供給の不均衡が生じたりしているからである。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発展途上国の人口は抑制する必要はあるのだろうか。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>T：発問する</li> <li>S：答える</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・現在の穀物を均等に分配すれば、抑制する必要はないのではないか。今のペースで増え続けたら穀物も足りなくなるから抑制したほうがいいのではないか。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・発展途上国の人口問題を解決するには、途上国が人口抑制すれば、解決するといえるのか。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>T：発問する</li> <li>S：考える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発展途上国だけの問題ではない。先進国が努力をしなければ解決しない問題ではないだろうか。</li> </ul>		

終 結	・発展途上国の人口問題について 2 時間学習してきて、分かったこと、考えたことについてまとめなさい。	T：発問する S：まとめる	・発展途上国の人口増加の原因や、それによる問題点には途上国だけの問題ではなく先進国の影響があることが分かった。先進国との関係を改善しなければ、人口問題は解決できないのではないか。
--------	--	------------------	---

## 【教授資料】

- 1 人口時計（アメリカ国勢調査局、国連統計データから試算）
- 2 白地図
- 3 人口増加の割合補足資料（ワークシート）
- 4 発展途上国産業の寸劇
- 5 人口増加による問題点(資料集、一人当たりの耕地面積)
- 6 穀物需給の不均衡を示す資料(おにぎり 65 個がハンバーガー1 個相当など。)



(附属新潟中学校での研究授業風景)

## 4. 「学校インターンシップ」の制度に関する意見、要望

「学校インターンシップ」制度に関する意見、要望は以下の2点である。

## (1) 大学での研究活動との両立の問題

今回一年にわたり附属新潟中学校において、毎週金曜日に活動を行ってきた。大きな成果を得ることができたが、それは金曜日全日をインターンシップに当て、一年間継続的に活動してきたからであるといえる。しかし、大学での研究活動との両立という点で少しばかり困難を感じた。大学院一年次は、単位履修数も多く、前期・後期にわたり大学での講義履修の振替の必要が生じたのである。また、他日に講義を振り返ることで負担が大きくなっていたのも事実である。より大きな成果を求めるのであれば、より多くの時間をかけ、質的に高い活動をインターンシップで行う必要があるが、大学での講義や研究活動に弊害が出ないようにする必要も同時にある。したがって、単位認定や単位履修に関する手続き等を見直す必要があるのではないと考える。

## (2) インターンシップ制度の説明に関する問題

大学院一年次入学の段階に紙面にて本制度の説明を受けたが、より詳細にどのような活動を展開していくのか履修生に説明する必要があるのではないだろうか。また、インターンシップ生相互の情報交換等行う機会があれば、お互いの活動内容を見直してよりよい活動が展開できるのではないだろうか。まだ、始まったばかりの制度であると聞いているので、今後本制度が大学院生にとって有益なものとなるように継続的に行われ改善されていくことを望む。

## 平成18年度「学校インターンシップ」活動報告

— 教師と生徒との人間関係に関する一考察 —

竹内喜紀

(新潟大学大学院教育学研究科教科教育専攻数学教育専修)

(実施校：新潟大学教育人間科学部附属新潟中学校)

### 1. 応募動機・経歴

#### (1) 経歴

私は平成17年度3月、芝浦工業大学工学部を卒業し、その年の4月にこの新潟大学大学院教育学研究科に進学した。大学時には、私の母校である新潟県村上市立岩船中学校にて3週間の教育実習を経験し、その中で、教師という仕事を通してその責任の重さ、生徒の信頼関係を気づくことの大切さを学び、また、生徒との活動の中から自分自身を見つめなおし、生徒を通しての自分の長所・短所の新たな発見さらには、授業実践における数多くの課題を気づかされた実習であった。

私は、数学教育は実践学であると考えており、大学院の学業の傍ら実践学を経験するため、新潟市立明鏡高等学校（定時制高校）にて夜間部の非常勤講師をこの一年経験させていただき、数学の授業を通して様々な生徒と出会い、実践学について日々、悩み・考える一年でもあった。

#### (2) 応募動機

入学時より、「学校インターンシップ」という活動が新潟大学大学院では行われていることを指導教員から教えていただき、附属新潟中学校でのインターンシップに応募した。動機は、数多くの授業実践を詰まれた現場の先生の優れた授業を見学することで、授業とは何であるのか、そしてその中で教師はどうあるべきなのかということを深く考え、自分にとっての教師像を明確にするためである。さらには、教師としての生活を一日、指導教員の先生と共に活動を通すことで、教育実習では学ぶことのできない経験を積みたいという思いがあり、自分を見つめなおすことができると考えたからである。

### 2. 活動の概要

#### (1) 活動実施校と活動期間

活動実施校 新潟大学教育人間科学部附属新潟中学校

活動期間 平成18年4月21日（金）から平成19年3月9日（金）までの毎週金曜日

#### (2) 活動目的

- [1] 終日、指導教諭に密着し、教師のあり方について勉強し、自分としての教師像を作り上げる。
- [2] 実践経験豊富な指導教諭の授業を参観および机間指導をすることで、教師の生徒への働きかけ、それに対する生徒の様相を観察し、授業とは何か、教師とはその中でどうあるべきなのかに対する考えを持つ。
- [3] [2]を踏まえ、実際に授業実践を行い、反省点や課題点を見つけ、今後の授業実践・大学院での研究に役立たせる。

#### (3) 活動内容

##### ① 活動の経緯

4月中旬にインターンシップ活動校である新潟大学付属新潟中学校へ出向き、指導教諭の渡部智和先生にご挨拶に伺った。そこで、指導教諭の先生と応募動機などを話し合い、さらには校舎見学を行い、4月下旬より毎週金曜日、通い終日活動を行うことに決まる。3月9日の最終日まで、附属新潟中学校に35回、実習でお世話になった。また、授業以外として、体育祭の予行練習・演劇発表会・研究発表会の準備・モジュール学習・フォーラム・卒業式の予行練習などの行事にも参加することができ、一年間を通して貴重な体験をすることができた。

## ② 活動の主な内容

主に渡部教諭の授業参観を中心に、授業における教師と生徒とのやりとりを中心に学び、また生徒へ机間指導をしながら生徒への働きかけ、生徒との関係づくり、生徒の見取りなどを勉強した。さらには、お世話になった学級が進学を控える3年生ということもあり、学活の時間における進路指導などを断続的であるが見学することができ、進路を控える学級を持った担任の責任の重さ、その中での生徒との絆の深さを目の前にし、充実し実りある1年であったと思う。(上記目的の(2))。

数学の授業実践は2時間ではありましたが、貴重な時間をいただき1年生の数学(線対称・点対称)の授業を担当させて頂いた。渡部先生からは、お忙しい中ではあったが指導案を事前に見ていただき、温かくも厳しいご指導を頂いた。(上記目的の[3])。

表1. 1日の主な活動

時間	時間割	活動状況
8:00	登校	電車と徒歩で登校
	職員会議	全体の打ち合わせ、学年(3年生)の打ち合わせに参加。生徒に連絡する機会はないが、メモは取る。
	朝の学活	<ul style="list-style-type: none"> <li>指導教諭のクラスの朝の学活に参加。</li> <li>毎朝、生徒達は、MT(モーニングテスト)を実施している。見学(夏はMTが実施されない)。</li> </ul>
	1～4時間目	<ul style="list-style-type: none"> <li>基本的に時間割が毎週変わる。時間やクラスも決まっていなが、基本的には午前中は4時間中2時間が授業。内1時間は学活。学活は、学年集会やクラス学活。</li> <li>授業においては、指導教諭が授業をして、机間支援(TT)。</li> <li>指導教諭のお手伝い(MTの採点業務・配布物の印刷等々)。</li> </ul>
	給食	<ul style="list-style-type: none"> <li>指導教諭のクラスで給食。教務室での配膳。</li> <li>食事では、たくさんの生徒と話せるように心がける。</li> </ul>
	昼休み	<ul style="list-style-type: none"> <li>時間に余裕があるときは、生徒とバスケットボールをして過ごす。</li> </ul>
	5時間目	<ul style="list-style-type: none"> <li>数学の授業参観。午前と同じく、机間支援(TT)をする。</li> </ul>
	6時間目	<ul style="list-style-type: none"> <li>毎週違う時間割りだが、1年3組の数学の授業はほとんど変わらない。</li> <li>1学期は、指導教諭が授業を行い、生徒達に配ったプリントを、私も解いていた。</li> </ul>

		・2学期は、1学期同様授業見学、MTの採点、出題問題を解くなど。後半にて授業を2回担当する。
	清掃	指導教諭のクラスで、教室清掃の指導。
	帰りの学活	朝の学活同様、指導教諭のクラスに参加。
17:00	下校	非常勤の高校へ向かう。

### ③ 授業実践

【 実施年月 】 平成19年1月29日(月)

【 指導教諭 】 渡部智和

【 授業者 】 竹内喜紀

【 生徒の状況 】 附属中学1年生(3組) [男子20名 女子20名]

#### (1) 本時の単元

- 平面図形(対称な図形)

#### (2) 指導観と考察の視点

日々の生活において線対称な形や模様を目にすることは良くあるが、それが数学と結びつかないと考える生徒は多い。こうした、見慣れた形も、数学の対象として考えるとその性質には線対称な関係が存在することを気づかせたい。





本時は、日常生活から目にする模様から線対称な図形を抽出し(導入)、それを数学の対象として考え、その図形における様々な性質を見つける(展開)。こうした活動を通し、最初から数学の世界での授業を中心に展開するのではなく、現実世界で見られる模様や形と数学を結びつける生徒の考えを育みたい。(まとめ)


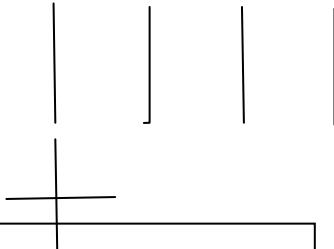
生徒の率直な意見を聞き、今後の指導法や教材観に活かすために、授業最後に感想を書いてもらう。線対称図形という図形概念を現実世界に中にも存在し、そしてその中の性質を抽出しそれを数学の世界で考えを生徒が感得することができたのか成果・課題として述べる。

#### (3) 本時のねらい

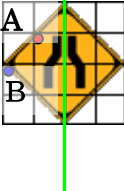
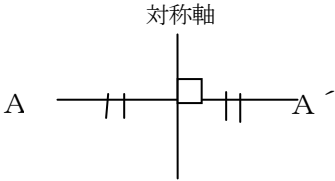
- 対称な図形の美しさを知り、対称性に着目して考察することができる。
- 線対称な図形について知り、対称の軸の意味を理解する。

#### (4) 本時の展開(本時3/13)

時間	教師の働きかけと意図	学習活動・内容
	<p>先生は、町で道を歩いていると道路交通標識や企業のシンボルマークなどを良く目にします。</p> <p>(小プリント①を配布)</p>	<p>学習プリント①を配布</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>(ア)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>(イ)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>(ウ)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>(エ)</p> </div> </div>

<p>導入 (15分)</p>	<p><b>発問1</b> これらは、先生が最近見た標識やシンボルマークです。「じっと」見て、標識の意味や色で分けることは考えず、4つのグループに分けをしてください。 グループ分けした記号とその特徴を聞く。</p>	 <p>(本) 1 (表) 標識・シンボルマーク</p> <p>小プリント①に分類したマークの記号とその分類理由を記入させる。</p>
<p>展開 (25分)</p>	<p><b>[中心で左右同じ模様になる]</b> <b>発問2</b> 模様と形で分類した人は、その理由を教えてください？  どうも真ん中の中心線を引くと、その左右で形が同じで、ぴったり重なりそうですね。</p> <p><b>[実験1]</b> 鏡を使い、中心線(対称軸)を境に、ぴったりと左右の部分が重なることを確認する。</p> <p>では、線対称な図形の性質について調べてみましょう。(対称軸との関係から) 方眼の付いた小プリント②を配布する。</p> <p><b>指示</b> では、この辺上に点Aがあるけど、鏡に映すと、どこに移ると思いますか、予想して書き入れなさい。また対称軸との関係はどうなりますか。ノートに書き入れなさい。</p> <p><b>(実験2)</b> 鏡を用いて、点Aが対称の性質により、反対側の同じ位置、対称軸から等距離の位置に移動することを確</p>	<p><b>[中心で左右同じ模様になる]</b></p>  <p>●黒板上で、線対称・対称の軸の説明を標識・マークを用いて説明。(ノート)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>線対称な図形             <ul style="list-style-type: none"> <li>一つの直線1を折り目として折りかえすとき、両側の部分がぴったり重なる図形。</li> </ul> </li> <li>対称軸             <ul style="list-style-type: none"> <li>折り目となる直線</li> </ul> </li> </ul> <p>方眼の付いた小プリント②を配布し、線対称の関係を調べさせる。</p> <p>方眼紙を利用することで、対応点を正確に捉えることができる。</p>



	<p>認する。</p> <p>図から、線分と対称軸を抜き出し、見つけた性質を生徒に説明させる。</p>	<div style="display: flex; align-items: center;">  <div style="margin-left: 20px;"> <p>鏡に半分の模様を映し、点の対応を予想させる。</p> </div> </div> <p><b>図2 標識・シンボルマーク</b></p> <p>(特徴)</p> <p>① 対応する点を結ぶ線分は、対称軸に垂直に二等分される。</p> <p>点と線を抜き出し、中点と垂直二等分線の説明を行なう。</p> <div style="text-align: center;">  </div>
<p>まとめ (10分)</p>	<p>時間が余った時、確認プリント</p>	<p>今日の復習</p>

### (5) 授業実践における成果と課題

生徒の感想を以下のように分類して考察する。

#### 【 生徒の主な感想 】

##### 「指導法に関して」

- 図形の授業は計算よりも楽しかった。又、鏡を使って分かりやすかった。
- とても分かりやすい授業でしたが、もうすこしスピードがほしかったです。
- 実物（標識・カード）があって分かりやすかった。
- 先生の授業は、実際に実物を用いて具体的に表わしてくれたので非常に理解しやすかったです。今回は、挙手した人に発言させていたので、次回は色々な人に当てていけば皆まんべんなく発言できるのでそのような工夫を考えたみたらどうですか。
- 初めて先生の授業だったが、先生の授業の内容は理解できた。分かりやすかったけど、少しペースは人によるので、渡部先生のように慎重に生徒に聞いて行った方が良い。
- 鏡を使って実際に見せてくれたので分かりやすかったけど、声が小さかったので少し聞きづらかったです。
- 声をもう少し大きくしてもらいたいです。でも、丁寧な説明で分かりやすかったです。
- 線対称の説明がもう少しほしかったです。でも、全体的に分かりやすい授業だったと思います。
- 実際に鏡でやってくれたのですごくわかりやすかったです。プリントも分かりやすく

て、ためになりました。

#### 「線対称図形に関して」

- 身近な図形について考えました、左右対称であるとか普段はそんな細かく見ていないのでおもしろかったです。
- 対称について初めて知ったことが多かった。図形にはいろいろな形があり、対称にならないものもあるということを初めて知った。
- 図形の違いを考えるのがとても楽しかった。呼び名を覚えるのが大変だった。

#### 【成果・課題】

感想を分析することで次のような成果と課題があると考えられる。

- 【成果】
- 線対称図形の概念を理解させるため、鏡を使った実験を取り入れたことにより、興味・関心を抱く契機となった。
  - 具体的な模様（県章や標識）を取り入れたことにより、わかりやすい導入となった。
  - 日常生活で目にする模様や記号を数学の対象として捉えてくれる生徒が少なかったが存在したこと。さらに、身近に存在する図形に関心を抱くきっかけとなった。
- 【課題】
- 分かりやすかったが、声の小ささが目立つ、スピードが遅いのではないかという指摘が多かった。
  - 鏡を使った実験の様子が後ろの人に見えにくく、苦勞させた。
  - 授業のテンポ・リズムがなく、だらだらした授業の流れに陥った。
  - 説明に時間を費やしすぎたため分かりやすさ重視の展開になってしまい、生徒の知的な興味・関心を引き出す授業につながらなかった。
  - 授業にはテンポとリズムが重要であること、挙手した生徒のみが答えるのではなく、生徒皆の意見を聞くような指導法が重要であることを実感した。

### 3. 成果と課題

#### (1) 活動の成果と課題

活動を通して得たことを、順次述べる。

##### ① 教師と生徒の人間関係について

指導教諭である渡部先生から温かくも厳しい指摘を受けた。この点を踏まえ、生徒との人間関係について活動を通して得たことを述べる。

生徒との人間関係の築き方について考えると、私は1学期の大半を緊張と緊迫観の中で生徒と接してきたように思う。こちらから積極的に話し出すことが上手くできず、生徒に接することができないことが活動の当初、良くあった。その態度を指導教諭である渡部先生に指摘された。先生は、自分の経験を交えながら「自然に接する」ことを教えて頂いた。生徒と向き合うことは、自分を創り表現するのではなく、自然なありのままの自分を表現することであることに気づかされた。私は、慣れない緊張と緊迫観の中で自分を見失うことが多く、中学生は思春期であり多感な時期であるといった先入観が強くあったため、一見あたりまえに思えることでも考えられない状況であった。そうした先入観を捨て、自然な形で生徒と接することが生徒との人間関係を築く根本であり最も重要なことであると実感した。

さらに、私は学級運営を通して、その人間関係の結びつきはさらに深くなると実感した。先生の担当する3年3組の生徒は、生徒一人ひとりが自分の考えを持ち自発的に行動をする学級であり、そ

こには、何よりも学級全体の団結力の強さが根底にある。そのことが一番強く感じたのは、3組の演劇である「坊ちゃん」が出来上がるまでの3組みの活動過程と演劇発表での生徒の姿からである。「坊ちゃん」の題目が決まるまでの学活においての話し合いでは、上手く意見がまとまらず、心配する場面も多々あった。しかし、3組の生徒は、持ち前の明るさと行動力で最後には息が合いまとまる。私は、そこには、やはり生徒同士の団結力が根底にあり、それを理解し信頼している教師がいるからこそ、それが可能であると考ええる。

私は、3組の学級を通して日々の生活の中で生徒同士が信頼し合い、他者を許し認めあう人間本来のあるべき姿が学級全体の中で育まれるのが理想的な学級であると思った。そして、教師にとって、生徒との人間関係を築きあげることが最も重用であることをこの一年間の活動を通して実感した。そのためには、教師は、生徒と常に本音で向きあい、そして最後まで生徒を信じることである。そして、生徒と「自然に接する」ことで日々の生活の中から信頼関係が築かれ、様々な学校行事を教師と学級全体で乗り越える。こうした活動を通して、教師と生徒との人間関係は築かれると思う。

## ② 授業での教師と生徒の人間関係について

授業の中での教師と生徒の人間関係について、指導教諭である渡部先生、さらには金山先生の授業の見学より考えたこと。さらに、授業実践において私自身が感じた授業における生徒と教師の人間関係について考えたことを述べる。

授業を成立させるためには、生徒と教師の中での人間関係が成立していることが最も大切であると思う。しかし、この人間関係を築くまでが難しいと一年間を通して実感した。渡部先生、金山先生、双方の授業を見学、そして私の授業実践を通して思うことは、教師一人一人個性が違うが、その個性を上手く活かした授業があるということだ。そして、その中で生徒との信頼関係の築き方が独自に存在することである。

教師は、50分という時間の中で、生徒一人一人に目を配り、その中で如何に生徒を中心に授業を組み立てるかという授業構成者の役割がある。生徒たちの様子は、一日として同じ日はなく、その中で、今日の生徒の様子を感じ取り、時には、深く考えさせる授業や実験を取り入れた授業を行い、またあるときは、計算力を付けさせるために練習問題、プリントを行わせる。さらに、生徒の様子が行事やその他の事情で疲れており、統一が執れない時には、授業に入る前に余談を加え教室全体を和ませてから授業に入るなどの工夫をする。

こうした生徒の様子を日々、敏感に感じとり、授業内ばかりでなく、学校全体の中で常に生徒の様子や変化を考えていく。そして、「ただ優しい」だけではなく、授業態度や他人に迷惑をかける行いには、的確に注意し学ぶ姿勢を正す、あるいは、生徒をほめ、困ったときには一緒に考えてあげる。こうしたことが、生徒との人間関係において新の関係を築き上げることにつながり、授業における生徒との人間関係づくりにおいて大切であると思う。

## ③ まとめ

①②に生徒と教師の人間関係について、活動を通して得たこと述べた。一年間を通じて、長期に渡り、生徒の発達の変化、成長を見取ることができ、教育実習では学べないことが多く学べた。その中で、私にとって最大に得たことは、先に述べた生徒と教師の人間関係についてである。教師と生徒との人間関係を築き上げることは、学校教育の基本であると思う。その人間関係が成立しているからこそ、授業は独自の価値を生み出し、生徒との絆は深くなると考える。また、教師は、様々な人間と関係を築きあげることが必要になり、その関係が強いほど授業や学級運営は成立し、実りあるもと成る。私は、こうした経験から得たものを活かし、今後の活動に励みたい。

## 4. 参考資料（活動記録一覧）

表2 1年間の活動記録

月日	曜	時間	主な行事	主な活動(T Tの活動以外)
2006/4/21	金	一日		インターンシップの挨拶。簡単な自己紹介を行う。 研究授業の見学(理科・音楽)を行う。
4/28	金	一日	生徒総会	授業参観。午後に生徒総会の見学。生徒総会では、 各専門部の意見を生徒会を中心に話し合う。
5/12	金	一日		数学の授業参観。
5/19	金	一日	体育祭の準備	体育祭の予行練習と準備
5/26	金	一日		数学の授業参観。
5/31	水	午前	数学研究授業	研究授業(数学)の見学を行う。
6/2	金	一日		数学の授業参観。
6/9	金	一日	教育実習期間	教育実習生の授業参観。
6/16	金	一日	教育実習期間	教育実習生の授業参観
6/23	金	午前		テスト期間中により、スタッフルームにて教材研究 を行う。
6/30	金	一日	美術の授業研究 (2時間)	数学の授業参観。美術の授業研究の見学
7/7	金	一日	学活(演劇の打ち 合わせ)	数学の授業参観。学活にて演劇の打ち合わせを見 学。
7/14	金	一日		
7/21	金	一日	ウィグル最終日	ウィグルのみなさんのお別れ会を見学 (各学級にて) 学活(演劇の打ち合わせ)
9/8	金	一日		数学の授業参観。
9/15	金	一日	三校合同清掃	付属養護学校・小学校・中学校の合同でグラウンド の清掃活動を行う。(付中の三年生が主導)
9/22	金	一日		数学の授業参観。学活見学。
9/29	金	一日		(午前)自習プリント答案作り。自習監督。 (午後)選択数学の授業を担当。
10/6	金	一日		(午前)道徳授業見学。
10/13	金	一日		生徒達の数学の個別学習の支援。
10/25	火	一日	教育研究発表会の 準備	明日の研究授業のため、午前中授業見学。午後から、 研究授業の準備。パネルの準備等および清掃活動を 行う。
10/26	水	一日	教育研究発表会	研究発表会の見学。その後の研究協議会に参加。

10/27	金	一日		休み時間の廊下巡視。受験生を面接室までの案内。
11/10	金	一日		数学の授業参観。机間指導。
11/24	金	一日		教育実習生の授業見学。音つどの練習を見学。
11/28	火	午前	モジュール学習	モジュール学習の準備。机間指導。
12/1	金	一日		数学の授業参観。机間指導。
12/4	月	一日	モジュール学習	モジュール学習の準備。机間指導。(1限から5限)
12/8	金	一日		数学の授業参観。机間指導。
12/15	金	一日	年度の最終活動	和田先生のゼミ生の授業を見学。検討会に参加。
2007/1/12	金	一日		数学の授業参観。机間指導。 授業について御指導を頂く。
1/19	金	一日		数学の授業参観。机間指導。来週の授業についての打ち合わせ。
1/26	金	一日		数学の授業参観。机間指導。 授業について御指導を頂く。
1/29	月	午前		授業実践①(1年生, 平面図形[線対称な図形])。 授業の反省会。
2/2	木	午前		授業実践②(1年生, 平面図形[点对称な図形])。 授業の反省会。
2/2	金	一日		数学の授業参観。机間指導。部活動の指導(バドミントン)。
2/9	金	一日		数学の授業参観。机間指導。部活動の指導(バドミントン)。
2/23	金	一日		数学の授業参観。机間指導。部活動の指導(バドミントン)。
3/2	金	一日	卒業式の予行練習 三送会	卒業式の予行練習の見学。三送会の見学。
3/9	金	一日	インターンシップ 最終日	数学の授業参観。机間指導。部活動の指導(バドミントン)。御指導頂いた先生方への最後の挨拶。

# 平成18年度「学校インターンシップ」活動報告

— 数学教育の現場を通して —

細井俊明

(新潟大学大学院教育学研究科教科教育専攻数学教育専修)

(実施校：新潟市立小針中学校)

## 1. 応募動機・経歴

私が「学校インターンシップ」活動への参加を決意した主な動機は、次に示す2つの点にある。

1つ目は、中学校で数学教育がどのように行われているかを実際の現場において肌で感じたいと思ったからである。私は、大学4年間に3回の教育実習を行っている。そのうち、小学校が2回、中学校が1回である。また4年次には、「学習支援ボランティア」として内野小学校へ1年間通った。小学校への実習などが多かったため、小学校での算数授業における指導に関しては、多くの学びに恵まれたが、中学校における数学教育における指導に関する学びは決して多いとは言えない。さらに、私自身の研究テーマが中学校数学における文字式指導に関するものであることも重要な動機付けとなっている。実際に行われる中学数学の授業を体験し指導法を学ぶとともに、授業内での生徒との関わりを通して生徒のつまずきや思考を感得したいと思ったことが挙げられる。

2つ目には、教師の仕事を学びたい、体験したいと感じていたことである。大学4年間の教育実習では、児童・生徒と向き合うことが多く、また研究授業のための準備などに追われ先生方が行われている教科指導以外の仕事という面に対して意識的に学ぶことができなかつたと感じている。この活動を機に、どのような仕事があるのかを学ぶことも重要な目的である。

### 経歴

- |                       |                 |
|-----------------------|-----------------|
| ○ 第2年次観察実習（附属長岡小学校）   | 平成15年9月         |
| ○ 第3年次主免教育実習（松浜小学校）   | 平成16年6月         |
| ○ 第3年次主免教育実習（附属長岡小学校） | 平成16年10月        |
| ○ 第4年次副免教育実習（上山中学校）   | 平成17年6月         |
| ○ 学習支援ボランティア（内野小学校）   | 平成17年4月～平成18年3月 |

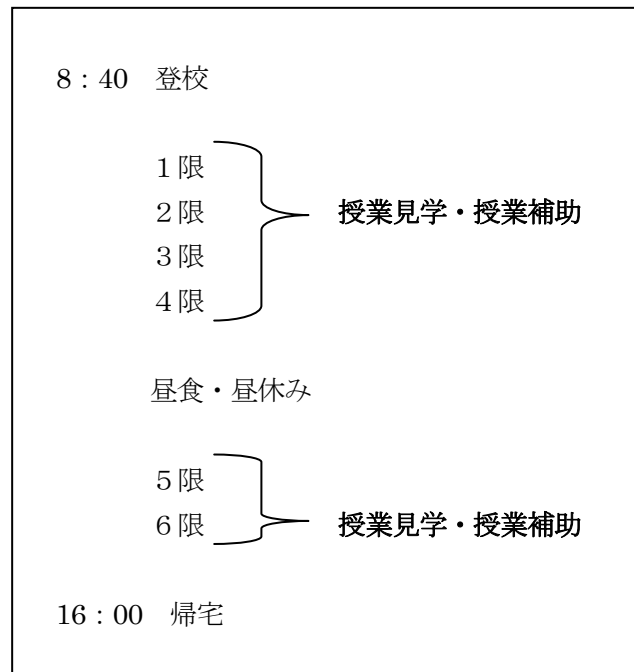
## 2. 活動の概要

活動の具体的状況は以下の通りである。

- (1) 活動日
- |                 |                           |            |
|-----------------|---------------------------|------------|
| 5月23日, 30日      | 6月6日, 20日, 27日            | 7月4日, 11日  |
| 9月12日, 26日      | 10月3日, 10日, 17日, 24日, 31日 |            |
| 11月7日, 21日, 28日 | 12月5日, 12日                | 1月16日, 30日 |
| 2月13日, 27日      | 3月13日                     | (計24回)     |

- (2) 活動時間 活動時間は、8：40～16：00である（日により異なることもある）。

- (3) **活動内容** 通常は以下のような活動が行われた。ただし、学期により多少の変更（授業見学するクラスの変更、授業数など）はある。



主な活動は、授業見学・授業補助であった。数学の授業では、魚野先生、山本先生が担当されているクラスを中心に授業見学・授業補助を行った。授業見学では、先生方の板書、指示、発問などを学ぶとともに、どのような発問、指示に対して生徒がどのように発言、活動をするかを学ぶことができた。また授業補助として、補助を必要とする生徒への対応や、机間巡視をしながらの丸付けなどを行った。

また、私が配属されたクラスが2年生ということで、修学旅行に関する授業・特別講義にも参加することができた。修学旅行先（沖縄）に関する講義を生徒ともに聞いたり、修学旅行へ向けての計画作成などにおいて、質問に答えたり、机間巡視を行ったりすることで貴重な学びを得ることができた。

### 3. 成果と課題

ここでは、先に述べた2つの動機の観点、また活動の概要と対応させながら本活動における成果をまず述べ、その後に課題を提示する。

#### (1) 数学の授業における授業見学・授業補助からの学び

まず、私が本活動において数学の授業の見学、補助を行うなかで感じたことは、同じ内容を教えるたった1時間の授業でも、先生方により様々な指導方法、授業形態があるということである。具体的には、生徒の発言を取り入れてクラス全体で作る授業、生徒に考えさせることを一番に重視する授業など、その単元その内容に適した指導方法を先生方が考えているということ、感得することができた。また、授業後にはその授業に対する意図や改善点などに関するお話を聞いた。これらのことは、実際の中学校でしか学び取ることの得ない貴重な学びであった。

そのなかでも、私が特に関心を抱いた点を以下に述べる。

### ① 生徒間の繋がり

私は、中学校で行われる数学の授業は、教師と生徒間のやりとりで進めていくというイメージを抱いていた。しかし、実際は生徒間におけるやりとりが非常に重視されていた。教師から提示された課題に対して、まず生徒は自らの力で解決しようとする。そして、行き詰ったり間違えたりした場合には、近くの生徒とその課題に対して意見を交わす。このような場面が非常に多く見受けられた。説明を聞く生徒は一生懸命に耳を傾け、説明をする生徒は生き生きとした表情で、どうにか伝えようと必死に言葉を選ぶ姿があり、お互いに学ぶ場を作っているのだと感じた。また、生徒同士ということであらずね易いということ、説明する側の生徒は理解の深化につながることなどがこの授業形態の良いところであると考え。生徒は、他の生徒と自由にやりとりできるという状況に甘えることなく、しっかりと課題に対して取り組む姿勢を維持していたのは、提示された教材のよさ、日頃からの指導などがあるからだと感じている。

その一方で、生徒は正面から数学を楽しんでいる。私が机間巡視をすると、多くの意見が交わされた後に、ある予測を立てたり、ある発見をしたりする場面も多くあった。生徒自身が主体となり課題を解決していく姿から、授業内において生徒間の繋がりを意識し、上記のような生徒間の繋がりが築かれるような指導を行っていくことは非常に重要なことであると、感得することができた。

### ② 多様な表現を用いた指導

特に、1年生の授業を見学、補助させていただくなかで感じたことである。1年生は、小学校からの移行学年であるために、文字式などの概念を考える際にも他の表現様式を用いることが重要であるというお話が先生からあった。具体的には、 $2a + 3a$ の計算の際や、方程式の利用（文章題）における式化の際に多く適用されていた。中学校では、関数や図形などの分野において多様に記号的な表現が用いられるようになる。そして、他の表現から記号的な表現で表すような場面が増えていく。それに伴い、生徒の数学に対する難易度も上昇することは明らかである。よって、授業中に行われていたように、ある表現から水準の低い表現へと抽象度を下げて考えるという活動を、生徒自身にも体験させることは非常に重要なことであると感じた。さらに、生徒が1人で課題に取り組む際にも自らそれを活用できる力を育むことも大切であると考え。そのためには、日頃から、記号的な表現や言語的な表現を図的な表現などに移す活動を授業の中に取り入れていくことが必要であるのだと、改めて実感することができた。

### ③ 生徒の発言の活かし方

先生からの「授業は瞬間、瞬間で様々な判断を迫られる」というお言葉が非常に印象的である。それは生徒の発言や、授業の進み具合などによるものだと授業を見学、補助するなかで感じた。そのような場面では、生徒の発言に対して即座に理解する力が必要であるし、様々な発言を予め予想し、どのように対応するかも考えておく必要がある。また、生徒が理解に困難を示した際には、他のアプローチを準備しておかなければならないということも実感した。しかし、生徒の発言には感心するものが多く、あっと驚かされることもあった。そのような発言をどのように生徒全体に返すか、またどのように活かすかが大切である。多様な意見を生徒から引き出し、クラス全体で数学の授業を行っている雰囲気を作り上げ、また生徒の些細な発言や的外れた発言を活かして、生徒に対しさらなる課題を与えていくことの重要性を感じた。

## (2) 学校生活全般における教師の姿より得た学び



前述したように、年間を通して通ったことで、修学旅行指導の場に一緒できる機会に恵まれた。修学旅行指導では、貴重な先生方の講義を聞くとともに、多少ではあるが事務的な仕事を補助することができ、今までにはない経験を得られた。ここでは、修学旅行指導だけにとどまらず、学校生活全般に渡り教師が生徒に相対している姿から、私が学び取ったことを以下に述べたいと思う。

#### ① 生徒に対する教師の信頼

修学旅行指導だけではなく、様々な活動（具体的には清掃や学級活動など）においても、先生方が大変生徒を信頼していることを感じた。一旦指示を出すとはほとんど助言や注意はされていなかった。生徒を信頼し、また教師に頼らせることなく生徒の活動を見守る姿が大変印象に残っている。生徒の生徒による活動を保障し、生徒だけで解決する力を身に付けさせることが重要であるということを感じ得た。また、小学校との違いをこのような点にも感じることもできたことは大きな学びである。

以上の成果を受け、今後に最大限に活かされるように課題を簡単にではあるが提示したいと思う。

#### ① 研究への示唆とすること

今回のような年間に渡り、数学の授業を見学、補助を行う経験は貴重なものであった。そのなかでも、生徒の考え方や取り組みをすぐ近くで長期的に見取ることができたことは、私自身の研究の領域においても素晴らしい示唆となったと感じている。この活動で得た示唆を今後の研究や、教育に携わる活動のなかでしっかりと活かしていくことが課題となる。

#### ② 様々な体験を積極的に行うこと

先生方が様々なことを生徒に語りかける姿を目にし、様々な面においての成長が必要であると実感した。教師の仕事は、教科指導だけではなく多種多様であることから、多方向への学びを求めていく必要がある。そのためには、より多くの体験を求めていく積極的な姿勢を持たなければいけない。漠然としたものであるが、私の重要な課題である。

### 4. 「学校インターンシップ」の制度に関する意見、要望

まず、この1年間ご多用のなか温かなご指導を頂きました校長先生、魚野先生、山本先生、並びに小針中学校の諸先生方に心より感謝を申し上げたいと思います。さらに、この様な貴重な体験を与えてくださった「学校インターンシップ」委員会の先生方に感謝申し上げます。

また、この「学校インターンシップ」の活動がよりよいものになることを願い、拙い意見、要望ではあるが以下に述べたいと思う。

#### (1) 単位認定要件が「計60時間以上」と漠然としていることに関して

私は、通年で通ったため、学校の様々な行事に関する指導を勉強することができた。しかし、一週間に一度という活動であったため授業実践のような連続した日数を必要とする活動を行なうことが難しかった。また、生徒との関係を気付くには難しいものがあつたと感じている。できれば、単位認定の要件が総計60時間と漠然としたものよりは、夏期の休講を利用し、例えば2週間などのように連続した日数での要件の方がよいのではないかと感じている。そうすることで、学校の先生方も実践授業や様々な面において学生と連携が取れやすくなり、学生にとっても様々な経験を得るのにより恵まれた活動となると考える。

## 平成 18 年度「学校インターシップ」活動報告

— 養護学校における造形活動の実践的課題 —

杉 山 佐和子

(新潟大学大学院教育学研究科教科教育専攻美術教育専修)

(実施校：新潟大学教育人間科学部附属養護学校)

### 1. 応募動機・経歴

この度の「学校インターシップ」への応募動機は、学校現場における教育・学習活動の実際を経験するという点での目的が大きい。大学院では、研究題目を「現代社会における人間の内的世界とその表出を通じた考察」とし、学部時代を通じて「芸術と人間」を軸に他領域にまたがる現代的課題と向き合ってきた。そのなかで、私自身の進路として特別支援学校での支援や教育活動に就くことを強く希望するようになり、「美術による教育」という視点から豊かな人間教育の可能性を開いていきたいと考えている。従来のでらな工作や美術の時間に限らず、領域・教科を合わせ持つ指導における造形活動の教育的側面を明らかにしたいと考え、それに基づいた教育実践に関する認識を深めたいと思い、本活動への参加を希望した。

経歴として、学部 2 年次に新潟大学教育人間科学部附属新潟中学校における「観察参加実習」、めいせいデイサポートセンター（知的障害者）、新潟大学教育人間科学部附属養護学校における「介護等体験」を行う。学部 3 年次に「教育実習」として、船橋市立若松中学校（母校）、私立国府台女子学院高等部（母校）において 2 週間ずつ、計 4 週間の自習を行う。また、同年次に新潟県立高等養護学校にて「学習支援ボランティア」の活動を行う。学部 4 年次より、障害をもつ人の余暇活動のための絵画教室「あすなる教室」（万代市民会館）にてボランティア（指導補助）活動を続ける。新潟大学教育人間科学部附属養護学校中学部における、平成 17 年度の「総合的な学習の時間」交流学习（新潟大学教育人間科学部美術科学生との交流）に参加する。平成 18 年 3 月、中学校教諭 1 種免許状（美術）、高等学校教諭 1 種免許状（美術）を取得。現在、養護学校 1 種免許状を取得中。

### 2. 活動の概要

学校インターシップ実施期間は、平成 19 年 1 月 22 日から 2 月 27 日までの計 12 回とし、内訳は中学部での「実践及び参観」が 7 回、小学部・高等部での「参観」が 2 回ずつの計 4 回、特別支援教室での「参観」が 1 回となった。また、事前に行われた新潟大学教育人間科学部附属養護学校での第 29 回特別支援教育研究会でのボランティアを含め、インターシップの活動内容とした。総計 60 時間（15 単位時間／1 単位時間＝4 時間）。学校における活動 12 単位時間、研究会 2 単位時間、レポート 1 単位時間

回数	月/日 (曜日)	時間	内容				践
1	1/22 (月)	午前	中学部参観・実践	6	2/6 (火)	午前	高等部参観
2	1/26 (金)	午前	中学部参観・実践	7	2/7 (水)	午前	中学部参観・実践
3	1/29 (月)	午前	中学部参観・実践	8	2/9 (金)	午前	中学部参観・実践
4	1/31 (水)	午前	中学部参観・実践	9	2/13 (火)	午前	高等部参観
5	2/2 (金)	午前	中学部参観・実践	10	2/20 (火)	午前	特別支援参観
				11	2/23 (金)	午前	小学部参観
				12	2/27 (火)	午前	小学部参観

「参観」は、主に観察と授業補助及び生活指導補助を含む。「実践」では、中学部の生活単元学習「なかよしアーティスト」において、授業補助及び授業準備補助として指導実践を行った。

新潟大学教育人間科学部附属養護学校中学部 生活単元学習「なかよしアーティスト」	
単元名	「なかよしアーティスト」
目標	作品展週間に向けて友達と一緒に共同作品（染物カーテン）を制作することができる。 布を使った造形活動の目標 ○布の特徴を生かすための行為（染色）が分かる。 ○布の特徴を生かすための行為（染色）を行うことができる。 ○様々な感覚を使って布の特徴を実感することができる。 ○自分や友だちの行為や表現の良さを実感することができる。
題材観	布の特性を生かして自由に楽しみながら制作に取り組む。 作品を様々な空間（例：教室、廊下、体育館、等）に設置することで、表情を変えていく作品とその空間の変化を楽しむ。
場所	各教室、廊下、体育館
材料・道具	布（綿、200cm×90cmを10枚）、染料、塩、輪ゴム、ひも、結束バンド、筆、桶、他
指導計画	全10時間（活動時間10:40～12:00） 1、オリエンテーション（1時間） 2、個人制作（1時間） 小さな布を使って、自由に遊びながら基本的な技法を学んでいく。 3、共同制作（7時間） 大きな布を使って、基本的な技法を生かして、さらに工夫を加えて制作していく。 4、鑑賞会（1時間）

### 3. 成果と課題

「実践」として取り組んだ中学部の生活単元学習「なかよしアーティスト」は、生活単元学習のなかに造形活動の要素を取り入れた学習内容であり、「美術による教育」における人間形成と学習活動の実践への認識を深

める上で、興味深い題材であった。

新潟大学教育人間科学部附属養護学校中学部の「生活単元学習」では、「生徒が目的意識をもち、自分の役割に進んで取り組んだり、友達とかかわったりしながら楽しく活動し、生活に必要な知識や技能、態度を身につける」ことをねらいとしている。また「生活単元で育てたい自立につながる力は豊かな心と集団生活」であり、「これらを中心とした自立につながる力の内容を、さまざまな活動の中で生徒に応じて育てていくことで、生活に必要な知識や技能、態度を身につけることができると考えて」いる。

今回の単元では、その活動に布を染めるという行為が用いられた。布に色を定着させる技法には、さまざまな方法があり「布を生かすための行為」として、①染め（絞り染め、ろうけつ染め、草木染め、引き初め）②絵の具で塗る（アクリル絵の具、水彩絵の具など）③マジックで描く等の方法を挙げ、事前に先生方による教材研究の場が持たれたことを伺った。1時間目のオリエンテーションでは、染めた布をカーテンにして、学校の教室や廊下、体育館などに設置し、いつもの学校の見え方を変えて楽しもうというコンセプトを生徒とともに確認した。

本単元は、中学部の全学年が取り組み、学年（1学年1クラス/各6名ずつ）ごとに共同制作を行うものであり、各学年の作品の千差万別の仕上がりは、それぞれの指導者の働き掛けの違いが表れ、非常に興味深く感じた。この単元においては、生徒の制作協力及び授業補助の形で、各クラスに新潟大学教育人間科学部美術科の学生が2名程度入り、かかわりを持って制作を行った。この美術科の学生と生徒とのかかわりは前年度の「総合的な学習の時間」の交流学习から続いており、互いに自然なかかわりを持つことができたと感じている。

同じ造形活動を通じた活動でありながら本年度の活動が前年度の交流の場合と異なる要因として、生活単元学習の中での造形活動であることが挙げられる。前回の活動では、大学生と生徒たちの交流が主であり、学生は交流の時間の度にさまざまな造形活動を用意し、生徒とともに布であれば布の素材から受け取る感覚を大切にし、布で家を作ったり、布を身にまどってみたりするなどの造形遊びを展開していった。そこでは、生徒の自発的な活動や発想を形にする柔軟な試みがなされ、造形活動を通じた交流のかたちが見られた。今回の生活単元学習のなかでは、「役割」と「かかわり」という視点から目標と評価基準を設定し、主体的な態度や知識・技能の側面で評価を行う。私が「実践」において担当した中学部3年のクラスでは、役割分担とかかわりをもった活動が上手く行われていた。

担任の先生が、クラスの6人の生徒を2人ずつペアにして、それぞれの目標に合わせた役割が与えられた。染めの方法も、輪ゴム・結束バンドを使った絞り染め、テープで海の生き物をつくる係や筆で描く係、溶いた染料を布にたらしにじみの手法を使う係などの分担がなされた。このクラスのカーテンのイメージは「海・森・空」であり、レイアウトも明確に定められていたため、それぞれが与えられた箇所を担当し、変化はつけつつも基本的には繰り返しの作業をおこなった。この繰り返しの作業は、着実に技能が身につけるための行為として生活単元学習の目的に適っている。生活単元学習の実践としては適っているが、美術教育としての側面からは「創造活動の喜び」という面で満たされないものを感じる。「美術による教育」の実践は作業内容だけを意味するのではなく、心の成長という面でも働き掛けることができると考える。

附属養護学校の教育課程では、図画工作や美術の時間は設けていない。しかしながら、様々な学習の場面で造形活動の要素が見られる。それらの場面において造形活動が他の学習目的に付属するものに終始することも危惧される。造形活動を用いるという、作品化することに目が向けられ易いが、その制作過程で得られる学びに目を向けて行きたい。そうした視点の転換が、領域や教科の枠を超えた学習を可能にすると考え。子どもたちの心身を開いた学びを実践できるように、教育現場において芸術の果たす役割をさらに考察していき

い。



[中学部3年の作品]



[中学部1年の作品]



[中学部2年の作品]

今回の「実践」では、実践内容の計画段階からの参加は出来なかったが、現場の先生方や生徒と活動をともに行う中で気がついた点があった。それは、同じ染め物のカーテンづくりという題材であっても、指導の工夫や題材の捉え方でまったく授業内容が異なるということである。それは3クラスの作品が、まったく異なる仕上がりであることから見えてくる。そこに「美術による教育」の面白さや豊かな可能性があるのだと考える。制作を行う中で、必要な道具をみつけ、机の配置などの制作環境も自分たちに必要な形へと変っていった。「何をするのか」を与えるのではなく、生徒が自分で見つけ出せる環境や状況を指導者は作ることが出来ると感じ

た。今回の「実践」では、個別の教育支援計画や評価等の詳細を確認することはできなかったが、1つの単元に初めから終わりまで関わることで、生徒の変化や生活に必要な知識、技能、態度の獲得の課程を目の当たりにした。その中で、実際に指導に当たる上での課題が見えてきた。今回の「参観」「実践」での経験を、今後の研究と自己形成の課題として活かしていきたい。

「学校インターシップ」を通して、小学部、中学部、高等部の児童、生徒とかわりをもつことで、その目覚ましい発達を肌で感じた。また、養護学校における造形活動の実践的課題についても、見識を深める機会となった。障害特性はさまざまであり発達段階も異なるが、それぞれに必要な学びがあり、それを支援していく教職のやりがいや再認識することができた。

#### 4. 「学校インターシップ」の制度に関する意見、要望

「学校インターシップ」により、学校現場での「実践」を兼ねた貴重な経験が出来たと感じている。

ただし、「学校インターシップ」がまだ制度として曖昧な面があるため、対象者も受け入れ先の学校の側も、どこまでの活動を実施したらよいかかわからない状況にあると感じた。限られた時間の中で、より充実した教育実践を行うためにも、担当組織を介した事前の確認が綿密に出来るとよいと思う。

#### 5. 文献

- ・『「自立につながる力」を育てる教育システム』新潟大学教育人間科学部附属養護学校（明治図書）
- ・『図画工作・美術科 重要用語 300 の基礎知識』岩元澄男（明治図書）

## 平成18年度「学校インターンシップ」活動報告

— 教員を目指すに当たり感じたこと —

相 田 洋 輔

(新潟大学大学院教育学研究科教科教育専攻保健体育専修)

(実施校：新潟大学教育人間科学部附属長岡中学校)

### 1. 応募動機・経歴

学校インターンシップに応募した動機は主に以下の点である。

- I 現代の生徒の状況を把握し、今後の学校生活、教師になった時の一助とする。
- II 教員になるための指導力（技術力）の向上。
- III 学校行事の運営などを観察し、教員がどのように計画・行動をしているか把握する。

Iについては、様々な問題を抱えている現代社会の中で、生徒たちが学校でどのような生活をしているのかを把握するためである。授業数減少、体力低下、学級崩壊、キレやすい子どもの増加など数年前までは考えられない言葉を耳にする中、生徒たちはどのように学校生活を送っているのか。もちろん良い点も悪い点もあるわけであるが、そのようなことを教育現場で感じることで教師になるための一助になると考える。

IIについては、教員には指導力（技術力）が必要である。これは当然のことであるが、大学で教育現場の実践を学ぶことも必要なことではあるが、やはり現場に出向き、学んだことを自分で実践する必要がある。そうすることによって、自分の考えている通りにはいかないことや予想外のことが起こったときの対処能力が身につくと考える。指導力向上のためには大学で理論等を学ぶことと、現場で実践することの二つのことを同時に進めていく必要があると考える。

IIIについては、学校では様々な行事が行われる。その行事一つ一つは生徒たちにとって非常に価値のあるものとなっている。生徒はその行事を楽しそうに、また時には苦しみながら行う。そうした行事（もちろん普通の授業もそうであるが）を行う中で、教師たちはどのような計画を練り、実際に行動しているのかを把握したいと考えた。教育実習では期間も短く、その間に行事があることは稀である。そこで、学校インターンシップという長期の実習を通して、実際に準備等に携わることで、学校における行事とは生徒にとってどのような価値があるのか。また、教師がどのような動きをしているのかを知ることができるかと考える。

以上の目的を達成するために学校インターンシップに応募した。

実習先・期間等は以下の通りである。

実習先 新潟大学教育人間科学部附属長岡中学校

期間 平成18年10月30日～平成19年3月16日までの毎週金曜日（変更あり）

回数 全16回

学部生時代の教育実習は母校実習で高等学校に実習（四週間）にいったため、中学校の教育現場は2年次の観察実習（新潟大学教育人間科学部附属長岡中学校）以来であり、他の実習も経験がない。そのため中学生と接するのはほとんど初めてである。この学校インターンシップが現代の中学生と向き合う非常によい機会になると考える。

## 2. 活動の概要

活動の概要を基本的なタイムスケジュールに示す。

6時		7時		8時		9時		10時		11時		12時	
起床	通勤・出勤			職員朝会	朝会	1限	2限	3限	4限				
1時		2時		3時		4時		5時		6時			
清掃 給食	昼休み	5限	6限	終会等	下校 まとめ	退勤 帰宅							

特定のクラスは担当せず、3学年を担当した。そのため、朝会・終会は週代わりに3学年1～3組を観察した。

授業は、体育のある時限はティーム・ティーチング (TT)、又はメイン・ティーチャーで授業を担当した。保健の時間は観察をした。その他、授業のない時限は他の授業の観察、又は授業準備である。

実習曜日が金曜日であり、翌日が入学検査試験や行事になることが多く、スケジュールが変更し、行事の準備(手伝い)を行うこともあった。

## 3. 成果と課題

この項目については、以下の三点について述べる。

### (1) 生徒と交流を通して

授業時間はもちろんのこと、休み時間や給食、清掃の時間も積極的に生徒とコミュニケーションをとることを心がけた。ここで非常に感じたことは、「生徒は非常に素直に発言する」ということである。授業中にわからないことがあれば、「わからない」と大きな声で訴えてくることやその日の服装についてあれこれ言う生徒もいた。中学生は特に素直に物事を言うと感じた。小学生であれば、そこまで考えてはいない。高校生であれば、わかっていると言わないこともある。中学生期が一番自分の思ったことを言葉に発し、感情を表現する年代であると感じた。

また「勝敗」ということに対しても非常に執着心がある。体育の授業でも休み時間の運動でも、こちらが勝敗にはこだわらず楽しく行うことを目的としても、どの場面でも本気になって取り組む。その結果、勝ち負けに非常にこだわり、一本のシュートに対しても感情を表に出す。時には物に当たり破損するということが起こった。物に当たるということは決して良いことではない。しかし、思っていることを素直に感情に出し、生徒同士も教師に対しても正面からぶつかっていくことはこの年代の子どもたちには必要なことであると感じた。そして、それが一番できる年代が中学生であると実感した。

### (2) 授業を担当したことで感じたこと

この実習では、実際に授業を担当させていただくことも多かった。特に柔道の時間は一人で担当させていただくことが多く、指導力の向上につながった。

まずは、指導するということの難しさである。指導をしているうえで感じたことは、自分の癖(欠点)が顕著に現れたことである。言葉がつかまることや「えー」などの必要のない言葉を発し、話を聞いている側の生徒に指示が伝わらないことが多々あった。言葉というものは非常に重要であるということを感じた。

また、体育の授業では教師が見本を示さなければならない。そこで以下の二点、



- どここの部分を示すか
- どの順番で示すか

ということを授業を行っているうえで非常に重要であると感じた。技や運動にはポイントがある。そのポイントを「いかに示すことができるか」ということが教師には必要であり、生徒が上手くできるかどうかに関係する。全体を通して「このような感じ」ということも時には必要であるが、何もわからない、やったことのない生徒に対しては、2、3のポイントを絞り説明をしていくことが良いと感じた。そこで、教師はその技（運動）が「できる」必要がある。よく、「自分ができることと、指導することは違う。だから自分ができなくてもポイントを絞れば指導はできる」と言われる。確かに自分の苦手な種目に関しては、指導するポイントをつかみ、それを伝える方法が良い時もある。しかし、ここで感じたことは、やはり自分ができるうえでの指導なのではないかと感じた。教師が見本を示し、生徒に「すごい」と思わせることで、生徒の興味・関心をひきつけることができる。生徒を教師にひきつけるということは授業が成立するうえで大切なことである。その点が、非常に欠けている点であり、力のなさを実感した瞬間でもあった。今後は、得意な種目の精度を上げることはもちろんのこと、苦手な種目の克服もしていかなければならない。

また「どここの部分を示すか」ということに加え、「どの順番で見本を示すか」ということも重要である。例えば、柔道を例に述べると、同じ技でも、「手から指導するのか」、「足から指導するのか」、「全体を示してから各部分を指導するのか」があり、指導の順番によってその技の印象が異なる。あるクラスには「手」からの指導を試みたところ、生徒の反応もよいと感じた。そこで、あるクラスでは同じ技を「足」から指導を試みた。その結果、生徒から「わからない」、「どうするの」という声が聞こえ、この方法は失敗であると感じた。どの方法が一番良いということではなく、その時の状況などに合わせ、方法を選択する必要があるが、教材が生徒にとって良いものになるかどうかは教師の力による。そのためには教師の指導力の向上が不可欠である。

さらに、実際に体を動かす体育の授業では隊形移動が伴ってくる。そこでスムーズに生徒を移動させることができるかどうかということは50分という短い時間の中では重要である。ここで学んだことは、生徒を移動させるより自分が移動し生徒の見やすい場所に移動するということである。授業を行った最初の方は、見本を示す時に「見やすい場所へ移動しなさい」と指示を出した。しかし、生徒は「見やすい場所」とはどこなのかわからない。結果的にダラダラと移動し、時間を費やすことが多かった。そこで担当教諭の授業を観察していると、生徒が移動するのではなく、自らが移動し、生徒の見やすい場所をつくっていた。こちらの方が移動に時間を費やすことなく、また移動中のダラダラした状況がないため、授業全体が引き締まる感じを受けた。これは、授業を担当させていただいた結果、発見したことである。

今回、授業を担当したほとんどが「一斉指導」であり、「生徒自ら考える」ような授業はできなかった。しかし、授業を担当させていただくことで自分の癖や発見できることが多々あり、現場に出向き実際に授業を行うことの重要性を感じた。

### (3) 学校行事の運営について

毎週金曜日の実習ということで、翌日にアカデミー、入学検査試験、卒業式を行うことが多く、先生方と共に準備等に携わることができた。教師は生徒を理解し共に学ぶことと同じように、学校を運営していかなければならない。そのため、この準備や手伝いは非常に自分にとってプラスになると考え積極的に行動した。

学校行事は、非常に意味あるものである。生徒にとっても日常の勉強から解放される瞬間であり、また互いに協力することで、生徒同士の絆を深めることができる。そのため、教師は生徒のためにも

行事を成功することを願う。教師は裏方に回り、全力で生徒を支援する。

その支援の過程で、教師は綿密に計画を練り、それを実行していた。どの行事の準備でも生徒の細かい動きや会場の設営などを紙面に詳細に記載し、それによって行動していた。自分が生徒の頃には何不自由なくやっていた行事が、あれほどの苦労のもとに成立しているのだと感じた。生徒の移動一つとっても、花の置き方一つとってもしつこいくらいまで事細かに話し合い、最善の方法をとっている。時には教師同士が強い口調で言い合い、その場の雰囲気为重くなることもある。しかしそれは、お互いの教師を信頼しているからこそできることであり、いい加減にこなしていれば言い争いなど起こらない。教師一人ひとりが生徒にとって最も良い方法を考え、真剣になっているからこそ言い争うことができる。これが教師間の絆であり、その絆が強い学校ほど行事も素晴らしいものとなり、生徒も全力で行事に取り組むことができると感じた。

今回の実習では、言葉や紙面では表すことのできないくらい多くのこと、細かいことを学んだ。実習先の中学校では、教師の生徒に対する熱意を感じ、それと同時に生徒の学校生活の過ごし方が素晴らしいと感じ取った。また、実習生の私に対しても時には厳しく、時には優しく真剣に指導して下さった。教育実習よりもさらに一步踏み出し、実習を行うことができた。この経験は今後の私の学校生活、さらには教職についての時の一助になることを確信している。

#### 4. 「学校インターンシップ」の制度に関する意見・要望

「学校インターンシップ」の制度は教師を目指す学生にとって非常に意義ある制度である。各学校の指示に委ねられることが多く、一概に言うことができないが、意見・要望としては、大学側からも実習先に制度の説明をしていただきたい。自分で趣旨を説明することも当然必要であり、教頭先生や担当教諭はどのような実習かということを理解していただいたが、より実習生が積極的に行動できるようになるためにも、制度の詳細な説明をしていただきたいと願う。

#### 5. 文献

中学校学習指導要領解説（保健体育編）

# 平成 18 年度「学校インターンシップ」活動報告

— 保健体育教師として必要な力を探る —

中 川 俊

(新潟大学大学院教育学研究科教科教育専攻保健体育専修)

(実施校：新潟大学教育人間科学部附属新潟中学校)

## 1. 応募動機・経歴

### (1) 経歴

学部	1 年次	入門教育実習	新潟市立上所小学校
	2 年次	観察参加実習	新潟大学教育人間科学部附属新潟小学校
	3 年次	研究教育実習 (体育)	新潟市立桃山小学校
		春期教育実習	新潟市立鳥屋野小学校
		秋期教育実習	新潟市立女池小学校
	4 年次	研究教育実習 (体育)	新潟大学教育人間科学部附属新潟中学校
春期教育実習 (体育)		新潟大学教育人間科学部附属長岡中学校	
大学院	1 年次	研究教育実習 (体育)	新潟大学教育人間科学部附属新潟小学校

学部生 1 年次に入門教育実習を履修し、小学生と泊り込みでキャンプ活動を行った。これが子どもたちと触れ合う初めての实習であった。その後、学部の必修である観察参加実習・教育実習を履修した。また 3 年次から所属している滝澤研究室では、研究教育実習として毎年 9 月に体づくり運動の教材研究を行い、小中学校で約 3 時間の授業実践を行っている。

### (2) 応募動機

学部生 1 年次で入門教育実習を経験してから大学での講義だけでなく、実際に学校や子どもたちの中に入っていくことの必要性を感じた。それから進んで子どもたちとのキャンプやスキー、部活指導など様々な活動に参加してきた。様々な実習や活動の中でも教育実習の経験は自分にとって大きな出来事であった。心残りがあるとすれば 2 週間という短期期間で 1 つの単元しか学ぶことができなかったことである。

この学校インターンシップは教育実習のように短期ではなく長期にわたって参加することから、1 つの単元だけでなく、様々な単元の授業を観察参加できる。また教員免許状を取得してからの実習であり、授業の実践や評価などに関わることができるなど、より教師という立場で参加することができる。これらのより幅広い活動を通して、私がこれから保健体育教師になるためにはどのような力をつけなければならないのかを探りたいと思ったことが動機である。

## 2. 活動の概要

- 実習期間 平成 18 年 11 月 24 日より平成 19 年 3 月 9 日までの毎週金曜日 (全 11 回)
- 実習時間 8 時 15 分から 17 時まで
- 実習内容 ・丸山教諭 水流教諭 小林養護教諭の体育および保健の授業について観察参加する。空いている授業時間は 3 年 1 組の道徳・総合学習・学級活動を観察する。そ

の他の授業時間は実習の反省を行う。

- ・授業時間以外は3年1組丸山 明生教諭(保健体育)のクラスで活動を共にする。
- ・放課後は陸上部の練習に参加する。

#### ○実習1日の流れ

職員朝会	全体朝会・3学年朝会に参加
朝会・清掃	3年1組の朝会に参加し、その後清掃指導
1・2・3限	授業観察・参加
給食・昼休み	3年1組の生徒とともに活動
4・5限	授業観察・参加
終会	3年1組の終会に参加
放課後	総下校時刻まで陸上部の練習に参加
	部活後、生徒全員が玄関を出るまで見送り
総下校後	丸山教諭・水流教諭のお手伝いをして実習終了

### 3. 成果と課題

附属新潟中学校の体育は、男女共修体育である。その中でバレーボール・器械運動・柔道・卓球・選択体育・保健という幅広い単元にわたって観察参加し学ばせていただいた。まず観察参加してきた中で2つの授業内容を挙げる。そして自分自身がこれからどのような力を身につけなければならないのか、この実習を通して学んだ点について述べていく。

#### (1) 観察参加してきた授業

##### ①「ワンバウンドバレーボール ― Fリーグ」(1年生)

1年生はまだバレーボールの基礎技術が未熟であることから通常のルールでバレーボールのゲームを行うことは難しい。そこで導入としてルールを大きく変えた「ワンバウンドバレーボール」が行われた。端的に言えば「バウンドあり、トスでのキャッチありのゲーム」である。ねらいはゲームのレベルを下げて試合を成立させることが目的ではない。ゲームを楽しみながらも、まずはボールの落下点を読んだり、正確にアンダーハンドパスやトスを上げる技術を身につけることが目的である。授業の後半で行われた「Fリーグ」では男女が一緒になってゲームを楽しみながらも、しっかりアンダーハンドパスやトスの技術を身につけている姿が見られた。

##### ②「関わり合いを重視したマット運動 ― 附中オリンピック」(1年生)

マット運動は今まで個人で取り組むという意識が強い種目であった。一斉指導ではなく、自分の課題を追求する授業形態では、教師がすべての生徒をしっかり指導することは難しい。そこで生徒同士の多様な関わり合いの中で技能の向上を目指したマット運動が行われた。「同じ技を練習する仲間」「附中オリンピックでのチームとしての仲間」など、様々な生徒の関わりを設定し、アドバイスや補助をしていく中でお互いの技能を高めていくことがねらいとされた。授業後半では、全体で練習してきたバランス系・つなぎ系・回転系の技の中から5種目をつなげて得点を競う「附中オリンピック」が行われた。オリンピックの開催によって「競争」という要素が加わった。これらが動機づけとなって生徒の練習は活発なものとなっていった。団体での競争から「仲間意識」が生まれ、自分だけがうまくなるのではなく、チームとしてうまくなろうという姿が多く見られた。

## (2) 保健体育教師としてこれから身につけなければならない力について

授業への観察参加によって、教師のクラス全体への働きかけや個々の生徒への対応など細かく観察することができた。また、生徒と1対1や複数でなど、たくさんの指導機会を得ることができた。私自身これからどのような力を身につけなければならないのか。教師の観察から、教材を吟味し提示していく力が必要であると感じた。また生徒との個々の関わりの中で、自分の指導力のなさを痛感した。またこの2つに共通するものとして、クラス、生徒を見極める力があることに気づいた。

### ① 生徒を見極める力 ― 現在の力とこれから身につけさせたい力

教師は、生徒を理解し見極める力が必要である。現状の力を把握し、これから身につけさせたい力を見通していかなければならない。見極めるものは個性であったり、技能であったり様々である。これらが「教材を吟味する力」や、「個々に対応する指導力」につながっていくものであると考える。今回の実習においても指導教官はクラスや個々の生徒によって取り組みや指導のスタイルを明らかに変えていた。

1年生バレーボールでは、ゲームを通常のルールで行う技術は持っていなかった。そこで生徒たちが3年生になったときバレーボールのゲームができるためには、今の段階で何を身につけていなければならないのかを見通さなければならない。それが、トスとアンダーパスを正確に上げることであった。落下点を読んでトスを上げる、そのためにワンバウンドバレーボールで落下点の位置を読む練習が行われた。また、1回キャッチありのトスを行っての正確な技術を身につけさせる練習が行われた。まさに現状の力とこれから身につけさせたい力を考えて取り入れた工夫である。

生徒を見極めるという点から学習カードは有効な手段であるといえる。この実習でも授業後は必ずといっていいほど学習カードを使った振り返りが行われた。学習カードを添削していくと実際に子どもたちと関わっていてもわからないような課題を発見することができたり、難しい点の傾向などをつかむことができた。マット運動の授業において、ハンドスプリングがなかなかうまくできない生徒がたくさんいた。その共通点は、腕をしっかり伸ばすこと、突き放しであることを学習カードから知ることができた。それらを次回の授業の指導に生かすことができたのである。学習カードを書くことは難しいといえる。成績を気にしたり、いい加減に書いたりする場合も多いからである。まずは、書く習慣つけさせることから始めなければならない。書いたことがしっかり次回の学習につながるという思いを教師が持たせてあげなければならない。

このように教師は実際の授業の様子や、学習カードを使うことで生徒を見極め、今後を見通していくことが不可欠である。

### ② 教材を吟味する力

教材を吟味する力とは、教科内容の深い理解とともに実際の子どもたちに対して教科内容を教材として再構成できる力であると考えられる。そのまま既存のスポーツを教材として与えてもそれは教材になるとは限らない。今回の「ワンバウンドバレーボール」、「関わりあいを重視したマット運動」はまさに指導教官が目目の前の生徒に対して教材を吟味したものである。

優れた授業実践をそのまま、別の教師が別のクラスで行ってもうまくいくとは限らない。これは教材が先行しているからである。生徒がいて始めて教師が教材を提示する。教材があっても生徒がいるわけではない。だからこそ生徒を見極め、今までの経験などから教材を創造していかなければならない。そのためには絶対的に専門的な知識が必要である。

私自身まだまだ教科内容に関する知識は乏しい。大学でもっといろいろな研究会に参加し、すばらしい実践を見て学ぶこと、論文や文献を読み込んでいくことが、まずは必要である。

### ③ 個々に対応できる指導力

指導には言葉による方法・示範することで視覚的に教える方法があると考えられる。指導力の高い教師は、問題点を把握し、言葉でその技術のコツを説明できたり、自分の持っている感覚で教えたりできる。また、自分で師範して視覚的に指導することができる。確かな指導力を身につけるためには、専門な知識と自分の実践知が重要である。

今回の実習ではいろんな場面で生徒と個々に関わってきた。ある生徒は自分の助言でハンドスプリングができるようになった。しかし別の生徒では同じ助言ではうまくいかず、結局できるまでには至らなかった。ハンドスプリングも押さえるべきポイントはいくつかあるが、それらを提示してあげることができなかった。それだけ自分のマット運動の専門的な知識や、自分が経験してきた実践知が不足している。1つの技術を獲得させるためには教え方はひとつではなく様々な方法がある。それらを生徒によって変えながら指導していかなければならない。まさに「引き出しの豊富さ」が重要になる。これからの課題として、専門的な知識を増やしてだけでなく、大学の実技講義を何回も聴講し、指導することを念頭に置きながら自分自身の実践知を増やしていくことが必要である。

### 4. 学校インターンシップの制度に関する意見、要望

募集要項に「修士論文」について明確なテーマを持っている人ということであった。テーマを持っていることでインターンシップの活動中に授業をさせてもらえたり、アンケートを取らせてもらえるかもしれない。しかし教科や内容によっては自分の修士論文がその学校の授業の流れと結びつかないこともある。テーマがあいまいな人は現場の問題点を自分でしっかり見ることで何かヒントを得られる場合もあるのではないだろうか。一概にこの学校インターンシップが修士論文に関係するとは言いきれない。「研究テーマを明確に持っている人」が募集要項にあがっていると、学校インターンシップをやりたくてもやれない学生が出てくるのではないだろうか。

## 平成 18 年度「学校インターンシップ」活動報告

— 附属新潟小学校 3 年生を観察して —

福島 慎也

(新潟大学大学院教育学研究科教科教育専攻保健体育専修)

(実施校：新潟大学教育人間科学部附属新潟小学校)

### 1. 応募動機・経歴

応募動機：修士論文データ収集、小学校教員の仕事体験。

経歴：学部 1 年次—入門教育実習（幼稚園・小学校・中学校体験コース）

学部 2 年次—観察参加実習（附属長岡中学校 3 年生）

学部 3 年次—中等教育実習（長岡市立東中学校 1 年生）

研究教育実習（新潟市立桃山小学校 4 年生、輪を使った体操授業実践）

学部 4 年次—中等教育実習（附属長岡中学校 2 年生）、初等教育実習（附属長岡小学校 4 年生）

研究教育実習（附属新潟中学校 1 年生、縄を使った体操授業実践）

### 2. 活動の概要

授業観察、補助（丸つけ、個別指導）、実践（算数 2 時間）

### 3. 成果と課題

<活動日時>

11 月 20 日～2 月 5 日 毎週月曜日 8 時 15 分～14 時

2 月 19 日～3 月 5 日 毎週月曜日、3 月 14 日（水曜日） 8 時 15 分～16 時

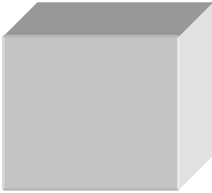
計 12 回・92 時間

<成果>

日付	成果・活動詳細
11 月 20 日	<p><u>朝の職員朝会</u>：ノロウイルスの流行について、担当教員が健康観察の重視を促す。続いて、いじめ問題について副校長先生から話があり、「私たちの子どもは無傷か、真剣に考えよう。周囲に流されるのではなく、事実に基づいて子どもをみよう。子どもの命を守るのが私たちの仕事。いい友達づくりをさせよう」と職員に伝える。今多発するいじめや自殺について異常事態と捉え、この後の全校集会で話をするを職員全体に伝える。</p> <p><u>全校集会</u>：子どもが興味をもつように安藤美姫選手の話から入る。そして「安藤美姫選手もいじめにあっていた」といじめ問題について切り込んでいく。何がいじめなのか、いじめは悪いことである、いじめを見たらどうすればよいかなどを全校児童に伝える。</p> <p><u>朝の会</u>：3 年 2 組担任の先生からもいじめについて話をする。「いじめの判断基準としてみなさんに教えます。～くんを仲間はずれにしよう。この言葉からいじめは始まっています。絶対にやめましょう。」</p>

	<p><u>感想</u>：子どもとの関わりについて</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ すぐに近寄ってくる子どもとそうでない子どもがいる。全ての子どもの内面を見てみたいと感じた。</li> <li>○ 教師という立場でインターンシップに参加し、どこまで甘くするか判断が難しいと感じた。</li> <li>○ 失敗を恐れずにありのままの自分で子どもに向かっていこうと決めた。</li> <li>○ 小学校3年生に用いる言葉の選び方、話し方が難しいと感じた。</li> <li>○ クラス内のいじめを見抜くことができるかを課題の一つに決めた。</li> <li>○ 子ども同士の関わりを観察し、その輪を広げられるようにしようと決めた。</li> <li>○ 現代の子ども達の遊び方、運動能力を把握しようと決めた。</li> </ul>
11月27日	<p><u>健康観察</u>：出欠・風邪・薬服用・ケガについて聞く</p> <p><u>すばらCの使い方</u>：子どもたちが素晴らしい行動をしたときに黒板に一枚ずつドラゴンボールを貼っていく。これにより子ども達は、自分の行動を見直すことができる。規定の枚数たまると、お楽しみ会ができるという特典付きであり、子どもは毎日たまることを楽しみに頑張っている。</p> <p><u>家庭学習</u>：わくわくホームワークと名づけられ、やらないと次の日の休み時間がつぶれる仕組み。名前の工夫が子どもたちのやる気をかきたてている気がした。</p> <p><u>褒め方</u>：子どもが何を褒められているか実感できる言葉を用いることが重要。</p>
12月4日	<p><u>教具</u>：体育授業で、太鼓を用いて集合をさせる。叩く回数、音の大きさの工夫ができるし、笛よりも落ち着いた音であるため、笛よりいいと感じた。</p> <p><u>授業の工夫</u>：授業開始時に、その時間の内容を話してしまう。すると子どもは見通しがつき、安心する。</p> <p><u>注意</u>：悪いことは、悪いと言い切ることが必要。廊下に連れ出し、1対1で話すことも必要である。</p>
12月11日	<p><u>授業の工夫</u>：教科書に登場するキャラクターに名前をつけると授業が楽しくなる。褒める時は授業を止めてでも、褒める。次の時間へ期待を持たせたまま授業を終了する。古い箸を活用し、先に番号を書き、指名する時に使う。</p> <p><u>学級経営</u>：イスには全て個人の番号をつけておく。机の教師側から見える場所にマグネットで名前を貼っておくと、他の先生もすぐに名前を呼べる。暖房で教室が乾燥すると、細菌が増え、風邪をひきやすくなるため、霧吹きを用意し、湿度を保つ。ヒーターを利用し、給食の台拭きを濯ぐ際、冷たくないようにする。</p>
12月18日	<p><u>月曜日</u>：週の始めは落ち着きがない。</p> <p><u>掃除</u>：素早く行うために、厳しく指導する必要がある。班長の言うことに従わない子どもへの声かけが必要。</p> <p><u>スピーチ</u>：「おすすめの○○」「昨日の出来事」「私のやってみたい○○」の三つから日直がクジをひき、その内容について30秒くらい話す。話すスキルを使った時は褒めてあげる。</p>
1月22日	<p><u>授業の工夫</u>：なわとびカードの活用。30秒で何回跳べるか、何分跳び続けられるかなど、自分の記録を向上させるために努力させる。人との競争ではない。</p> <p><u>注意</u>：いくつ注意するかを先に話す。ケガの防止のため、プロレスの禁止。</p>



2月5日	<p><u>係り活動</u>：お手伝い係、保健係などをうまく使うことで、一日がスムーズに進む。</p> <p><u>歌</u>：子ども達は歌が好きである。音楽の時間に歌う曲ではなく、各クラスで決め、SMAPの歌から夏川りみの歌まで幅広く歌う。歌詞が良いもの（SMAPのありがとう）などが選ばれる。</p> <p><u>スキル紹介</u>：中学年で見につけるスキル</p> <p>書くスキル——つなぎ言葉を使う・段落を使う・400字の作文を書く</p> <p>聞くスキル——反応する・質問する</p> <p>話すスキル——結論から話す・つなぎ言葉を使う・図や表、実物を使う・(~ですよね?)などと確かめながら話す</p>									
2月19日	<p><u>読書</u>：読書は、文字を読む力や文章を構成する際に、とても重要である。そして早い段階から本を読むことに興味を持たせることが重要であるため、週に何時間かは読書の時間を設ける。子ども達は皆、喜んで読書している姿がみえる。</p> <p><u>学級活動</u>：6年生を送る会の計画。まず代表を立候補者の中から多数決で決める。本人が、数字を知ることになりショックを受けている様子がみられ、疑問を抱いた。</p> <p><u>授業の工夫</u>：全ての授業で考えさせる授業が必要であると知った。</p>									
2月26日	<p><u>健康観察</u>：体調不良が多いため、念入りに行く。</p> <p><u>授業実践（算数）</u>：箱の形について調べましょう</p> <p>内容</p> <table border="0" data-bbox="347 1016 1013 1144"> <tr> <td>①箱の平らなところの名前は？</td> <td>面</td> <td>6つ</td> </tr> <tr> <td>②面と面との境の名前は？</td> <td>辺</td> <td>12本</td> </tr> <tr> <td>③辺が三つ集まるところの名前は？</td> <td>頂点</td> <td>8つ</td> </tr> </table> <p>④ドリル学習</p> 	①箱の平らなところの名前は？	面	6つ	②面と面との境の名前は？	辺	12本	③辺が三つ集まるところの名前は？	頂点	8つ
①箱の平らなところの名前は？	面	6つ								
②面と面との境の名前は？	辺	12本								
③辺が三つ集まるところの名前は？	頂点	8つ								
3月5日	<p><u>国語</u>：3年生で一番の事件を決めよう。</p> <p>内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・クラスで一番の事件を決定するための準備段階。話し合いをしているCDを聞いて、話し合い方はどうか、なぜまとまらないかなどを考えさせる。</li> <li>・各自が事件を三つ考える。理由を添えて。</li> </ul> <p><u>授業実践（算数）</u>：そろばん</p> <p>内容</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>①使用上の注意…みんなが使う物であることを伝える。</li> <li>②持ち方、はらい方、名称（一だま、五だま、定位点）を覚える。</li> <li>③0～9までの置きかたを考える。</li> <li>④5306を置いてみる。</li> <li>⑤ペアで問題（4桁の数字）を出し合う。</li> <li>⑥たし算</li> </ol> <p><u>学級経営</u>：「仕方がない」という言葉はクラスや自分のレベルを下げる。「今何が一番大事か」自分で判断する。</p>									
3月14日	<p><u>お別れ会</u>：1人の児童が転出することになり、お別れ会の準備を進めた。司会者、ゲーム担当、歌担当、マジック担当など、多くの児童が自らの役割を一生懸命果たしていた。一人一人が別れの辛さを体験していたように見えた。</p>									

	保護者参観：初めて保護者と直接会話をした。一人の子どもの親が、以前昼休みに子どもがケガをしたと、伝えてきた。私は詳しくはわからなかったが、謝罪し話を聞いていた。保護者への対応の難しさを知ることができ、よい経験となった。
インターンシップを終えて	担当の先生の話によると、この時期は研究会の時期と、比較すると落ち着いているということだった。「暇ですよ。」と笑っておっしゃっていたが、見る限りでは忙しいと感じた。常に子どもは何か事件を起こし、その対応をしっかりとする。そんな先生を見ていてすごく尊敬した。学生である私から見ると忙しいと感じる一日も先生から見ると、忙しくないということでした。経験の違い、教師としての力の違いを実感できた。そして、どんなに忙しい時も、どんなに大変な状況でも、子ども達のことを考え、常に楽しそうに接する姿を見ていて、将来自分もこうなりたいという理想ができた。本当に勉強になった4ヶ月でした。

#### 4. 「学校インターンシップ」の制度に関する意見、要望

大学では学べない現場のことを知ることができ有意義な実習であった。教師の日常を観察・体験することで、大学で勉強する際、今までより深く考えることができると感じた。日常を知り、体験する中で、何もできない自分を知ることができた。

要望は、大学側からいろいろな学校名を選択肢としてあげていただき、どの学校に何回いってもよいという体制で、多くの学校を観察してみたいと感じました。

#### 5. 文献

小学校学習指導要領解説（算数編）

# 平成 18 年度「学校インターンシップ」活動報告

— 単元計画・評価基準の作成と実施から学んだこと —

小 山 裕 敦

(新潟大学大学院教育学研究科教科教育専攻保健体育専修)

(実施校：新潟市立巻北小学校)

## 1. 応募動機・経歴

### (1) 応募動機

教育実習では、2 週間といった比較的短い期間での子どもとの関わりや授業を実施した。教育実習生にとっては初めて授業を実施するため、授業計画の作成の仕方や子どもたちとの関わり方といった実践の中での気づきも多く、教育実習の果たす役割は非常に重要である。しかし、教員養成段階において、実践の場として非常に重要な実習ではあるものの、単元の 1 時間しか受け持っていないことから分かるように、短い期間での取り組みであると私は感じた。そして、実際の教育現場では、単元全体の指導構想を練り、全ての授業を担当もしくは担当の教師が実施している。採用になって初めて単元全体の実施やそれに伴う評価を実施するものも多いと考えられる。

そこで、より実際の職務に近い経験を積みたいと考え学校インターンシップに応募した。その中で、教育実習では困難な単元計画・評価基準の作成及び実施することをねらいとして活動していきたいと考えた。

### (2) 経歴

学部	履修名	配属校
2 年次	平成 15 年度観察参加実習 (初等)	新潟大学教育人間科学部附属長岡小学校
3 年次	平成 16 年度春期教育実習 (初等)	新潟大学教育人間科学部附属新潟小学校
	平成 16 年度秋期教育実習 (初等)	新潟市立浜浦小学校
4 年次	平成 17 年度春期教育実習 (中等)	新潟市立下山中学校
	学習ボランティア (水泳)	新潟市立山の下小学校
	学習ボランティア	栃尾市立西谷小学校

## 2. 活動の概要

期日：平成 18 年 10 月 13 日 (金) から計 24 回参加した。(表 1 を参照)

場所：新潟市立巻北小学校 (担当学年：5 年)

主な活動：

### (1) 学習補助

体育、算数に TT として参加した。具体的には、体育ではサッカーとバスケットボールの審判や子どもが立てる作戦のアドバイザー、算数では、丸付けや不得意な子への補助を行った。場合によっては、他の教科でも TT として参加しているが、観察する事の方が多かった。

### (2) 単元「器械運動」の計画と実施

平成19年2月9日(金)から計9日間、専門教科である体育の「器械運動」の単元を担当する機会を頂いた。時間数は、マット運動4時間、跳び箱運動4時間の計8時間。2クラス合同体育で、全4クラスを担当した。教育実習で行う研究授業と違い、学校インターンシップの参加が可能となった単元全体での研究授業である。また、教員免許を取得しているため、評価をすることができ、授業中に評価の観点を求められることとなった。このことは、今までの実践では体験することのできない、より職務に近い活動となった。

表1 主な一日の活動

	活動日	活動内容		活動日	活動内容
1	10月13日(金)	学習補助	13	2月6日(火)	学習補助
2	10月20日(金)	学習補助	14	2月9日(金)	学習補助、研究授業
3	10月27日(金)	学習補助	15	2月13日(火)	学習補助、研究授業
4	11月3日(金)	学習補助	16	2月14日(水)	学習補助、研究授業
5	11月17日(金)	学習補助	17	2月16日(金)	学習補助、研究授業
6	11月24日(金)	学習補助	18	2月20日(火)	学習補助、研究授業
7	12月1日(金)	学習補助	19	2月23日(金)	学習補助
8	12月8日(金)	研究会補助・参加	20	3月6日(火)	学習補助、研究授業
9	12月15日(金)	学習補助	21	3月7日(水)	学習補助、研究授業
10	12月22日(金)	学習補助	22	3月9日(金)	学習補助、研究授業
11	1月19日(金)	学習補助	23	3月13日(火)	学習補助、研究授業
12	2月2日(金)	学習補助	24	3月16日(金)	学習補助

### 3. 成果と課題

#### (1) 日常の中での関わりから

休み時間やTTで子どもたちと関わる中で、時間による子どもの変化を見ることができた。時間を重ねるごとに生活態度や学習態度が良くなっていく子どもや一時的に落ち着きがなくなる子どもなど様々な変化を見ることができた。生活態度や学習態度が良くなる子どもに対しては、自然とほめることができ関わるすることができた。しかし、一時的に落ち着きがなくなり子どもに対して変化に気づいても関わるができなかった。そのような子どもにその場で注意することも必要であるが、個人的に話を聞く機会を設けることも重要であると感じた。

そして、これからの課題として、めりはりをつけた関わり方が必要であると感じた。注意をする部分はしっかりと注意ができるような線引きをしていこうと考える。

#### (2) 単元計画・評価基準の作成と実施から

私が今回教育実習では体験できない貴重な経験をした。それは単元計画・評価基準の作成と実施である。そして、それらから学んだことを3点取り上げたい。① 環境づくりの難しさ、② ねらいを伝える難しさ、③ 評価の難しさ、である。

##### ① 環境づくりの難しさ

マット運動で、異質集団による教えあいの授業を計画した。その中で、子どもたち同士が動きを見ることで技のポイントに気づいたり、教えあいの中で相手を思いやる心を育んだり、といったことを

ねらいとした。そして、そのための環境づくりとしてチェックシートを用いたグループ編成や技のポイントを書き込むためのワークシート（図1参照）などを作成した。

実際の授業では各自の技のコツをつかみ、自分なりに記述できることを目標に展開していったが、子どもたちは「技のコツ」や「技のポイント」という言葉では中々反応できない状況であった。抽象的な表現では何を見たらよいか分からず、ワークシートへの記入も殆どなかった。そこで、子どもたちの技を見る視点として「手の着き方」や「目線」といったキーワードを提示した。すると、「手の着き方」を見ることをきっかけに、他の部分にも目線が向いている記述がワークシートから見られるようになった。何もないところから「見つけましょう」ではなく、「手の着き方はどうなっていますか」「頭の位置はどこにあるでしょうか」など、子どもたちを見つけるためヒントを提示することが非常に重要だと実感した。しかしながら、全ての子どもがワークシートの活用の仕方を理解しておらず、実際の授業でもワークシートをうまく使っている子どもの例を取り上げることやその時間が取れなかった。

そこでこれからの課題として、どのような活動を行って学習していくのかを子どもに理解させることが必要であると感じた。今回の授業では技の見方、今の技がどうだったか話す時間、ワークシートに自分のコツや他の子から指摘された点を書く時間を確保するといった細かい部分の授業計画を作成する必要があると感じた。それらを計画することで、子どもにとって学びやすい環境が考えられる。

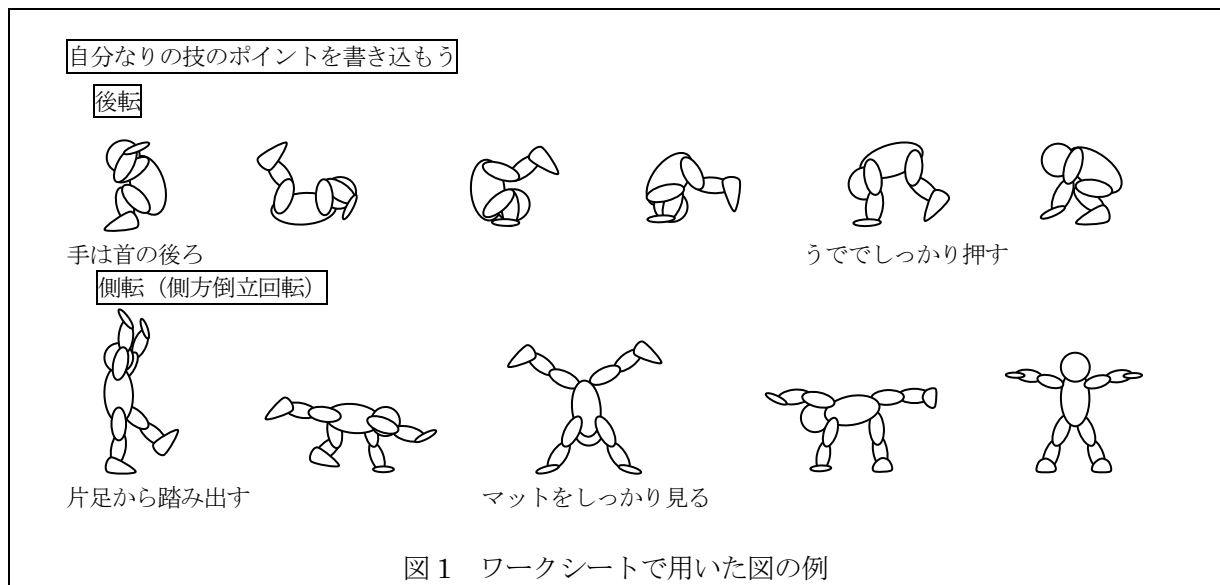


図1 ワークシートで用いた図の例

## ② ねらいを伝える難しさ

教育実習では、担当教師の立てた授業計画の1時間を受け持つため、単元全体での自分のねらいが薄くなっていたが、今回は単元の指導計画全体を作るため、自分の単元に対する思いを持つことが重要となった。今回私はわずかな活動時間ではあるが、子どもたちに「いろいろな技に挑戦させたい」という思いから、授業で伝えたいことが多くなっていた。しかし、授業実施にあたって、「子どもの活動を止めたくない」といった思いがあったため、授業の進行に気を取られ、子どもたちに「身につけて欲しいポイント」を、言葉にできないまま授業が終わるケースも多かった。授業を終えて「今回の授業で子どもは何を学んだんだろう」と思うこともあり、振り返ると体を動かすだけの体育になっていたことも多かった。ここで、教えたいことが沢山ある中で「何を教えることが今の子どもたちに一

番よいか」といった優先順位をつけていくことが必要であることに気づかされた。

これからの課題として、子どもたちの現状にあったねらいを持ち、優先順位を付けて教えていくことが子どもたちにとって学びのある体育になると感じた。子どもに伝えたいことを持って授業に臨むことは勿論であるが、それをどのタイミングで、どのくらい全体に伝えられるか、そしてどのくらい伝わっているか見取っていくことを心がけ授業をしていきたい。

### ③ 評価の難しさ

今まで、教育実習や水泳指導などで子どもの活動様子を見取することはあった。「ちゃんと活動しているかどうか」といった私の指示は子どもに理解されているか、授業は進行しているかといった視点で子どもを見ていたことが多かった。しかし、今回は一回の研究授業を評価するだけではなく、通知表の成績をつけるための評価に関わることができ、自分自身の授業中の評価の目の甘さを実感することとなった。その場では子どもの動きを見ているものの、授業後活動の様子を振り返ると授業全体の雰囲気は分かるが、個人の活動の様子を見とれていない状況であった。そこに、自分の授業を評価することに慣れていないが、子どもの活動を評価することに慣れていない自分があることに気づかされた。そこで、授業中に見とれない子どもに対して、授業後の感想を書くための体育ノートやワークシートを用いることで、一人ひとりが「今回の授業で何を気づくことができたか」を把握できると今まで以上にそれらの活用の重要性を感じた。

そこでこれからの課題として、授業後の感想を書かせることは勿論有効であるが、授業に臨む前にどれだけ授業後の子ども一人ひとりの姿を思い描けるかが重要になってくると感じた。そのためには、「今の自分はどのくらい子どもを見とれるのか」といった自己理解が必要であり、できることやできないことと向き合うことが必要であると感じた。

以上の3点から、現場の教師と同じ経験が重要な役割を果たしていると感じた。計画してみて分かること、実施してみて分かること、評価してみて分かることが数多くあり、教師になっても日々成長するという言葉の意味を実感した。そして、今まで実際に考えたことのない単元計画・評価基準の重要性を自分が実施する立場になって改めて実感した。

## 4. 「学校インターンシップ」の制度に関する意見、要望

今回私が参加した学校インターンシップは、教育実習と違い長期に渡り学校・子どもと関わること、単元全体の指導計画・評価基準を作成・実施することができ私にとって良い経験となった。

要望としては、教員採用試験を受けるにあたって「学校インターンシップ」という名称は、どの程度認知されていて、どの範囲（書類など）に使用できるのか。といった点が明確になると取り組みやすいと感じた。

## 5. 文献

「個を伸ばす」きめ細やかな指導方法の工夫 生田孝至・岸本賢一 学校図書